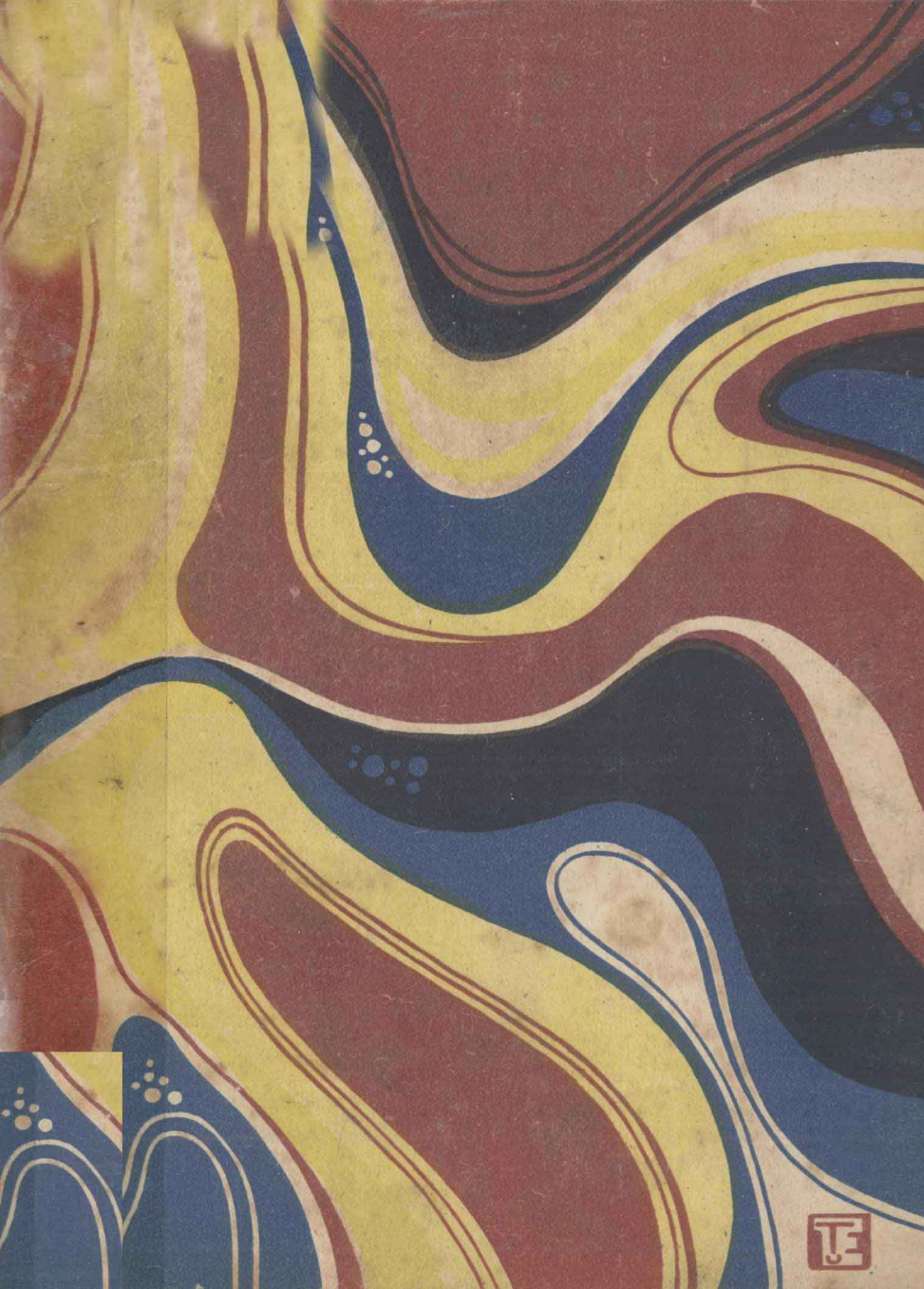




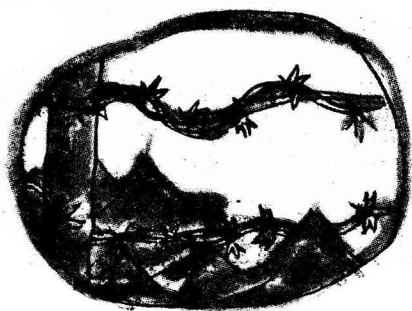
沖繩俘虜記

宮永次雄



沖繩俘虜記

宮 永 次 雄



雄 鷄 社

昭和二十四年十二月二十日 印刷
昭和二十四年十二月二十五日 發行

定價 一八〇圓

記 浮 樓 沖



著 者 宮 永 次 雄

東京都中央区日本橋江戸橋一ノ七(山叶ビル)

發 行 者 武 内 俊 三

東京都千代田區神田神保町三ノ二三

印 刷 者 鈴 木 竹 次 郎

東京都千代田區神田神保町三ノ二三

印 刷 所 旭 印 刷 株 式 會 社

東京都中央区日本橋江戸橋一ノ七(山叶ビル)

發 行 所 株 式 會 社 雄 鷄 社

電話日本橋(24)四九〇二・二七九一

(落丁・亂丁の際は早速お取換へ致します)

第一篇 宮古島の記

目次

ア	ダン	バ	三		
慾	望	八		
の	び	る	三		
特	攻	隊	員	七	
煙	草	三		
陣	地	構	築	六	
油	三		
結	婚	十	周	年	四〇

第二篇 鐵柵の生活

夢 四七

飛行場設營 五四

芋 六六

マラリア 七五

敵 八一

終戦を聞く 八六

星のある夜空 九一

船上 九九

陸上 一〇六

鐵柵 一一〇

P
W 一二五

小野山の一夜	二二〇
弾痕のある風景	二二五
スミス軍曹	二三三
「I・D」と「P・O」	二三九
検査	二四四
O・B・C	二四八
満洲を憶う	二五六
娯樂	二六二
P・W社會	二六九
小野山タイムス	二七三
歌の集い	二八四
沖繩嬢	二九〇
お喜代	二九五
灰色の戦友	三〇四

姫百合の塔	二〇九
捕虜の話	二二六
P・W根性	二三三
ハーバー	二三八
知り合うこと	二四三
文化的なもの	二四八
性慾	二五三
孤兒	二五九
歸心	二六六
ライカム	二七三
シラミの歌	二七九

表紙
扉
二見利節
中西
徹

第一篇 宮古島の記



宮古島

沖縄本島南部

太平洋

海

那

支

東

伊長部島

西原

大野山林

下長

海軍飛行場

陸軍飛行場

鏡原

九州

種子島

屋久島

薩

南

諸

島

大島

奄

美

群

島

琉

沖繩島

久米島

球

列

宮古島

島

西表島

石垣島

厚喜

石川

越辺

嘉手名

那覇

小禄

豊見城

糸満

喜屋武

磯壁

牧港

首里

与那原

知念岬

摩文仁

台湾

アダンバ

一年有半の島の生活で、生涯忘れることの出来ない植物が三つある。これをランクするとナンバー・ワンに位するのがアダンバ、次に芋、のびるといふ順序であろう。アダンバはたしかに、宮古島の象徴であつた。兵隊はこのアダンバの爲に苦しみ、泣き、又時として、このアダンバ故に救われ、愉しみを満喫した。

アダンバの持つ強靱な表情は、たくましく若々しい兵隊たちにとつては、まことにふさわしいものとして素描し得るのであるが、私の疲れきつた心にはあまりにとげ／＼しい存在であつた。

アダンバが植物學で何科に屬するのかわからぬ、そうした知識に乏しい私には判定出来ないが、大きな蛇のようにぬる／＼と伸びた莖に、君子蘭の大きい葉が完全に武装して、まつわりついたようなその姿は、サボテンのテン淡さにも似ず、薔薇のとげ／＼しさとも違ふ南國獨特の風貌が見とら

れる。

張り手で双葉山以下の立浪部屋を總なめにして、國技館の觀衆に、にくまれながら人氣を博した前田山を、往年の出羽ガ獄の體格にまでひき伸ばして見たら、或いはアダンバの感じをいくらか感じとつてもらえるかも知れない。

そのアダンバが宮古の山野をうすめているのである。山という山、麓から路へ、そして民家の裏庭にまで。兵隊はアダンバに觸れることなく行動した日は恐らく一日とてなかつた。

「敵は来る、必ずこの島に上陸する」とがむしやらに教えられて、兵隊は夜を眠ることさえ許されずに島全體に穴を掘りまくつた。山も、野も、海邊も、完全に穴だらけになし得た時に、宮古島の防禦戦は成功すると、私自身おろかにも信じ始めていたのであるが、その命をかけた穴掘り作業にアダンバの存在がどれ程兵隊を泣かしたことか。

あのアダンバの鋭利なとげが、兵隊のカサ／＼になつた皮膚を傷つけると、「おや俺のからだにも紅い血が流れている」と改めて自らの生命を自覺することがあつた。圓匙でそのとげをたたき切ると、今度は執拗にはつたアダンバの根が、一日に四つ掘ることを強制された肉攻壕の作業進

涉を、嚴然とこぼんだ。兵隊は涙も出なかつた。

そのアダンバには丁度、パインナップルに似た実がなる。數も少なく、そしてなか／＼熟してくれないのであるが、眞夏の七月頃に、時として蟻がびつしりたかつた甘酸つばいアダンバの実を見出すことがある。

飢餓に苦しみ、體力をすりへらした兵隊にとつて、それはまさしく天の恵みであつた。

この島に着くまでは、バナナの鈴なりになつた風景を頭に描いていた私たちであるが、現實の宮古島では、バナナやパイヤは全く民家の南國風景を裝飾する單なる風物詩にしか過ぎなかつた。

だからこそ、アダンバの實は、兵隊たちには、忘れられない豪華なフルーツとしてその味覺を満足さしてくれた。だが残念なことに、日本軍隊の嚴正な軍規にしばらくして、兵隊は思うようにこの珍味を愉しめなかつた。形式一點ばりの日本軍隊は、兵隊は榮養失調に斃れても、兵隊が個人的にアダンバの實を求めるところを嚴重に禁じつづけたからである。

將校は下士官に、下士官は古年兵に、古年兵は初年兵に對して、徒らな束縛を強いることがあ

たかも日本の軍規であるが如くに見えた。そして私は、その最下級の初年兵として一年半の宮古の生活を、まるで奴隷のように強いられて来たのである。個性の總てを抹殺され、徒らに無教養な下士官と古年兵から——確かに無教養な上官程、初年兵に對する態度は苛酷だったが——暴力をふるわれて、私は日に日に卑屈になり物を云わなくなり、反抗心を強めて行つた。

「こんなことで俺の性格を變えられてたまるか!」「ごまかせるだけごまかしてやるんだ!」と表に出せない齒ざしりをしつづけたものである。

「アヤをつける」——この言葉は、私が軍隊で覺えた言葉の一つである。

兵隊が、美事に熟したアダンの實を探しあてて朗らかに豪奢なひと時を愉しんでいると、これを見た上官は必ず「貴様! 誰の許可を得て食つとる!」と、まるで犯罪者に對する刑事の態度で覆いかぶさつて来る。「アヤをつける」のである。アダンの實を食うことが、兵隊の體力恢復に、延いては日本軍の戦闘力向上に益することを百も承知しながら、どうしてもそれを認めないかたくなさを、上官の特權として誇つてゐるかに見えた。卑屈になつた兵隊は決して「班長殿如何ですか」と眞心からは云えなかつた。

いつも蔭にかくれて、欲しいものを一人で食い、聞きただされると大抵嘘を答えた。そしてその嘘はすぐばれるのであるが、ばれたからといって決して嘘をつくことを改めようとはしなかつた。

この嘘、最も悪質の形式主義に原因したこの嘘が、日本を敗戦に導いた大きな素因をなしていることに、私はその後氣づいた。

軍の最高主脳部は、嘘のかたまりを金科玉條とまもつて無謀にも「敵を知らざる」も甚だしい戦いを闘いつづけ、「自らの力」をさえも平氣で誤認して、祖國を滅亡へ滅亡へと導いたのである。

アダンバの實と敗戦——私は笑えない。

慾

望

私は滿洲で、一七七部隊に召集の命を受けた瞬間から、先ず、浮世の慾望を棄てる覺悟をきめた。それは自棄に似た淋しいあきらめでもあつた。

「酒にも煙草にもお別れさ——」半ばは棄てばちな、半ばは冷たい未練を抱きながら、この言葉をぶちつけて、私は私服を脱ぎ棄てたのである。

酒はともかくとして——勿論どん底の兵隊稼業でなければ、これもなか／＼であるが——煙草を斷つということは、私にとつては二十九年に近い最愛の戀人との別離を意味するのであるから、一寸そこらのカフェーで知り合つた女と手を切るように淡々たる心境ではあり得なかつた。その戀人とも斷じて別れようという悲壯な決意が、私の軍隊入門の心がまえであつた。

正直なところその頃の私には「散つて九段の櫻花」なんてな一途なものではなかつた。と云つて

いいかげんにごまかして逃避してやれ、などという非國民的な心臓を持つていたわけでもない。誰からとなく豫備知識をふき込まれている軍隊に少なからぬ憂鬱を感じながら、何とかその苦しい生活をやり抜けてやろう——他人のやつてることが俺に出来ぬ筈はない、といったところが、偽らざる私の日本人としての氣持だつた。

所が、その禁煙の悲壯な決心は、哈爾濱の兵營生活では、至極あつさり解消されて、私は一日に二十本入りの「極光」を一箇ずつ、しかも九錢と云う兵隊さまくの安價で、愉しむ幸福に恵まれた。

慾望——それは達せられてしまうと、至つてたわいもないものである。私は、くそ面白くない兵營生活をほのめかして、友人に書き送つたりする心の餘裕を持ちつづけながら、まあ一應大過なく初期の兵營生活を過していた。

それから數カ月後の宮古島の生活が、かくも厳しくかくもみじめなものであろうなどは、全く夢にも考えることなく——。

人間が、その環境によつて、如何に小さく萎縮するものであるか、私はその事例を、宮古の兵隊の欲望するものにはつきりと見た。始めは、煙草が足りないなどと贅澤を並べていた。それがいつの間にか、何とかして腹一ぱい食つてみたいと少しずつ切實なものに變つて来た。やがてその切實さは更に深刻なものにまで移行していかざるを得なくなつた。

「ああ、一寸でいいから鹽づけが欲しいなあ」

「一時間でいいから眠りたい」

「月に一度で澤山だから、からだを洗いたいもんだ」

「せめて手を洗う水が欲しい」

「汗とあかで、べちや／＼になつた禪を洗わしてもらえないか」

その頃になると、兵隊たちは、體中にシラミの襲撃をうけて、カサ／＼になつた白い皮膚に、そのあとかただけを赤い斑點としてきざみつけていた。

マラリアで四十度の高熱を出すと、どうにも使ひものにならず、それでも上官からは結構いやみを並べられながら、兵隊は蚊帳と毛布一枚だけの就寝を許可された。熱にうなされながら、「ああ俺はありがたいかも公然と寝ることが出来る」とホツとしたことさえあつた。

いつの間にか、宮古の兵隊には「酒や肉が欲しい」などと口に出すことは、荒唐無稽な冗談口になつてしまつた。

・そして「女が欲しい」などと云う慾望は、冗談にさえ兵隊の口からは飛び出さなくなつたのである。

身體的にも精神的にも虐げられ過ぎた兵隊には、「女」に對する慾望などは、全く消滅し盡していたのである。

こんな兵隊で戦争に勝てるはずがない——竹槍一本で「MI」戦車にぶつつかつて行くのと何等變りない事實が、兵隊の肉體と精神の上に強いられていたのである。

の
び
る

満洲で協和會の中央本部に居たと云う松浦と知り合つたのは、特別鍊成隊の要員として、この島の西海岸にある西原の舊小學校に行つた時だつた。一カ月餘りのそこでの生活では、彼と特に昵懇になつたわけでもなかつたが、その後マリアの再發で鏡ガ原の陸軍病院に入院した時、彼が病院の先輩として、たま／＼隣室に居て、何かとめんどうをみてくれるから、約三カ月の間、彼はすつかり離れられぬ男の一人になつてしまつた。

成城の高等部に居た頃、左翼にかぶれて——彼は自ら特にかぶれたと云つていた——暫くくさい飯を食つた経歴を持つ松浦は、その組織的な頭腦と理論すきな性格を、常によく私にぶつつけて來た。

三月から六月にわたる間で、丁度米軍の沖繩本島上陸から日本軍の敗退までの時機だつた。連

日猛烈な空襲が続いて、海軍飛行場に近い病院の周辺に、大きな穴をぶちあけていた。

私たちはこのはげしい空襲を避けるために、病室に寝ることはほとんど絶無だつた。

哈爾濱以來、後生大事に持ち續けたきたない毛布と飯盒をぶらさげて裏山のアダンバの蔭に待避していた。全く空襲さまざまで、この待避行には何等の難かしい軍規がなかつた。好きな戦友と好きなところにかくれて居さえすればよいので、點呼などと云う日本軍特有の憂鬱な存在もなかつた。

私は勿論、常に松浦と一緒にだつた。

この待避生活の日課——それがのびるとりであつた。體力恢復を最も必要とするマラリア患者に與えられる日本軍の給養は、その頃完全に制海權を失つて補給の道がないのであるから、全く栄養失調を強要するに等しかつた。

私たちは所謂私物料理で自らの健康をとりもどすことに、全力をたたきこんだ。その私物料理と云うのが、薩摩芋とのびるを採つて来て、病院から提供される、飯盒のふたにちよつびりのせ

られた飯の中にかきまぜてお粥を作ることだった。芋はそこらの畑にあるのを失敬して来るので至つて簡単だった。これは、だから主として夜の間か朝早く、あたりが未だうす暗いうちに一日分をかたずけてしまふのである。

のびるは野生である。だから白晝堂々とこれを採集することが出来る。

松浦と私は、小枝の先をとんがらして、よく畑の中をのびるをさがして歩いた。

ねぎとにんにくのあいの子みたいなこの植物は、畑やあぜ路の雑草にまじつてポツン／＼と生えている。ぐつと白い根を土深く伸ばし、しかもその奥にがっちりと球根を持つこの植物は、指だけで引張つてみてもなかく、完全には採れなかつた。雨上りの土のやわらかい日を除いては、どうしても器具を必要とした。小枝の先をとんがらしたのはこの器具としてである。グサリとのびるの根に向つて尖つた枝をつきさして土をかえすと、ながい根が球根と共に完全にむき出される。

これは指だけで、プツリと引き切つたのびるに較べると、量的にも質的にも三倍位の價值を生ずるのである。

ゆつくり歩き廻つて、兩方の掌で持つ程度の収穫があると、「おい戦力だぜ」と松浦はほくそ笑んで私をよくふりかえつた。同じ時間だけ一緒に採集にあたつても、いつも松浦は私の二倍か三倍かは採集した。そして私が「どれ、いたずらに出かけるかなあ」などと云うと、むきになつて「いたずらなんてなもんじやない、生くんが爲にこれは絶対だ」そう云つて、のびるとりを彼は「戦力の確保」だと稱していた。

生くんが爲に、私よりは三倍も熱心に、戦力の確保に眞剣さを示したその松浦が、とうとう宮古で死んでしまったことを聞いたのは終戦後であつたが、私は全く呆然として目を瞑つた。

私と松浦とは、こうして採つて來たのびるを、あきることなく、おじやにたたきこんだ。アダンプのかれ葉がポヤ／＼と燃え上ると、飯盒のおじやがクツ／＼煮え出してのびるの香がプンの生活で、こみ上げて來る心からの愉しい笑いがあつたとしたら、この時ぐらいではなかつたらうか——と思うのである。特に、あの小さい球根をかみしめた時の味などは、絶対に忘れられないなつかしいもの一つである。

のびるは小さくきざんで鹽ですつかりもむと、又何とも云えない草の味を發揮するが、これは鹽の消費量を増大させるおそれがあつたので、私たちはあまり試みなかつた。ひとつまみの鹽の入手に、如何に苦勞するかを考えるとそうした贅澤は出来なかつたからである。

松浦はどうとう死んだ。偶然會つた彼と同じ中隊の兵隊からそれを聞いたとき、そして彼の死因が他の多くの兵隊と同じように榮養失調であつたと聞いたとき、私はもつと彼と共にのびるを採る病院生活を永く持ちたかつた、としみんと思つた。

階級の低い兵隊だつた我々には、自分の中隊（それを幹部は温かい家庭だぞ！と強いて定義づけさせたが）にもどされると、幕舎のすぐ横にのびるが一ぱい生えていても、一本でもそのブーンとくる愉しい香と味を愉しむことが出来なかつたのだ。野生ののびるでさえ、軍規の嚴正な日本軍隊ではお偉い人々から「俺のために採つて來い」と命じられた時以外にはなかく自由にはならなかつた。

復員したら、私はどうしても松浦の奥さんには會つて、彼の宮古の生活を傳えたいと念じている。その時には、是非のびるを探し歩いておじやを作り（勿論私の手料理で）それを奥さんに食

べていただくつもりである。

特攻隊員

軍隊生活を經驗する以前の私は、日本の軍隊教育の良さを信じていた。日本の教育で、何物かをはつきり掴んでいるのは、軍隊教育だけだと確信していた。士官學校や兵學校を見學した親しい友人や尊敬する先輩の口から、直接私はそれを聞いたこともあつた。火野葦平の「兵隊もの」を讀んだ時などにも、苦しい兵隊生活の中にある本當の人間性といつたようなものを感じて、やっぱり日本の軍隊は、いい精神教育を完成しているのだなあ、と思つたこともあつた。

だから——私は初めて營門をくぐつた時、覆いかぶさつて來る憂鬱の中にも、何かを見出し、やる！ と心に決めていた。何かを見出すためには、懸命にその中にとびこんで、苦しみをすなおに苦しみ、喜びを無邪氣に喜ばなければならぬ。私は、一途にやつた——。

そしてどうしても本物に觸れ得ない時には反省もした。「何かを掴もう」などとする私のこの態度そのものが既に間違っている。自らを「無」にして飛びこんで行つた時にのみ「何かを掴める」のだと。

勿論、私のこうした態度が決して自らを「無」になど出来る筈がない。私は私のこの態度を更に反省して「年齢を忘れ」「今までの仕事や生活を忘れる」ことに努力した。そして少なくとも全力を盡して「若い兵隊」になりきるべくやつてみた。

結論は、私にとつてはあまりに淋しかつた。「死」を軽々しく口にする日本の軍隊でありながら、その「死」さえもここでは單なる形式として取扱われた。そして「物」よりは「人間」を安つぱく取扱う貧乏人のきたない根性が總てを支配していたのである。人間を、そしてその魂を最も高いものに認めてこそ、「死」の崇高さがあり、「死」の尊厳さがある。それにも拘わらず、人間を石ころ以下に見棄てること（本氣にだ）が、ここでは教育の根底になつてゐる。

「泣くにも泣けない」くやしさを、誰もが骨にしみて感ずるのは當然である。そのくやしさが何か次の偉大なものを生む前提であれば、「否、あつてくれ！」と念じながら、その後に来る何も

のもないことを知つた時、私は「死んでも死にきれない」と思つた。

鏡が原の陸軍病院に居た時である。哈爾濱以來の親しい谷田部が何か新発見でもしたように、私の病室に飛びこんで來た。彼は大野山林の夜間作業で、泥濘に脚をすべらして、肩にかついだ重い木材に、片腕を折られてその頃外科に入院してゐた。

「おい、變つた兵隊が入院して來たぜ。顔を見に來ないか」というのである。谷田部は新京で法
院に勤めていた検事といふいかめしい肩書の持主で、その肩書にふさわしい體格をしていたが、日本の軍隊生活に愛想をつかしている點では、全く私と同じだつた。彼は彼の「骨折」と云う悲しむべき事故をさえ、中隊の束縛から離れ得ると云う精神的解放の故に喜んでゐた。

彼が飛びこんで報らせてくれた話題の主は、十九歳という紅顔の青年だつた。「水上特攻隊？とか云うベニヤ板の舟艇で、近接する敵艦に魚雷をいだいで、突つこんで行く部隊に所屬してゐるんだ」と谷田部が説明してくれた。

「初めて、本當の日本軍人らしい兵隊に會えたような氣がする」

「我々が中隊で見た兵隊と全然違ふ！」

「本気で死をみつめている純情な青年なんだ！」

谷田部は昂奮の色さえ見せて、彼の隣りに爆弾の破片をうけて入院して来た青年のことを私に紹介した。

谷田部のめずらしい昂奮は私にとつても大きな心の動きであつた。形式とごまかしで總てを塗りつぶして「軍隊は要領だ」などと平気で云うことが常識になつていた（それ程ひどい中隊だけしか知らぬ私が不幸だつたのかも知れないが）私にとつて、偽りのない「誠」の兵隊の存在は、正に嚴肅なものであつた。

「嬉しい」とか「驚いた」とか云つたものとはおよそ別個のものである。

私は、ひそかにその特攻の青年の顔を見るために、谷田部の病室を訪ねたのである。

ぶしつけで無作法になりきつている兵隊にとつても、心からの親しみを感じて、本氣に近づくとなると、何だか「はにかみ」を覺えるものだ。

私は谷田部と一緒に、その青年の枕邊に坐つて、彼の負傷の状態を聞いたり、その家庭のことなどを聞いたりして時間を過した。始めはこの青年から大和魂を單的に聞き出す豫定だつたのに

いつの間にか、私はそんな話題をなげかけようと企んでいる自分を淋しく省みたりした。そして私はこの青年の口からは何等勇ましい決意や、心がまえを直接聞き出すことは出来なかつた。しかも、私はこの青年に逢つたことが、こよなく嬉しかつた。どこからか、あらわにはなく、にじみ出て来る純情な日本の魂に感觸させられたからである。

その後、もう沖繩本島の血戦もほとんど終焉近くになつて、宮古から飛び立つ特攻機（それも時々一機か二機に過ぎなかつたが）の姿が大正時代の遺物のような練習機に變り果てたのを仰ぎながら、私はこの病院での青年の顔をよく思い浮べたことだつた。

煙 草

私は湯わかし當番という勤務を命ぜられていた。沖繩本島に米軍が本格的な攻撃を始めて、今

にも宮古島に敵が上陸するんだ、といつて脅かされていた頃である。海軍飛行場あたりから拾つて来たドラム缶を二つ並べて、それに中隊員百數十名が飲むだけの湯を沸かすが、私に與えられた任務であつた。

この湯わかし當番は、元氣で陣地構築の出来る兵隊からは常に輕蔑されていた。なぜならば、マラリアあがりでへな／＼にしなければなつた兵隊が、順番にこの湯わかし當番をふりあてられたからである。

従つて私のようなおよそ遅ましからざる兵隊は、適任者が居ないとほとんど湯わかしをやるために兵隊になされたかのように、實によくこの任務をあてがわれた。しかも私は又、この仕事を天命でもあるかのように愛し、他の如何なる兵隊らしい仕事よりは積極的にやつてのけた。一口に云えば私は湯わかしが好きだつたのである。

私と心のつながりを持つ一連の兵隊の中には、私同様にこの湯わかし勤務を愛するものが數人居た。

湯わかしを愛する最大の理由は、この勤務にはおえらい「班長」と稱する人種が居なかつたし仕事を輕視されていただけに、古年兵と云うやつが、長づらをして何かと不愉快な干渉をするこ

とがほとんどなかつたからである。二つのドラム罐のどちらかに、いつとりに來ても熱い湯が半分以上あれば、それで一應當番としての責務は全うされる。それだけのことを自分で計畫的に實施すれば、特にひどい難くせをつけられなくて済む。

勿論井戸に恵まれぬ大野山林での湯わかしは、「水」に苦勞し、雨のあとなど「薪」に泣かされたことは何べんもあつた。そして大事な飯時に飲む湯が間に合わずに「貴様は湯わかしも完全にやれんのかツ」とひどいびんたをもらつたこともあつた。湯わかしみたいな最も輕くて低い任務さえも!? といつた輕侮を體全體に現わしながら、二十三、四の古年兵殿から力一ばいぶんなぐられた時などは、ふつと會つての教え子の顔を思い浮べたりしたものだ。十數年前のこと、私が最初に赴任した時の教え子たちはもう二十五、六になつていたし、その中のあるものは中尉になつて私に戦地からの消息をよく送つてくれたものだつたので――。

私はこの湯わかしをやりながら、よく煙草を製作した。原料は苺の葉とよもぎ、時としてこれに桑の葉を混合した。本ものの煙草というやつを、その頃宮古で喫つていたのは大隊長以上ぐらいたつたろうか。私のたいして好きでもなかつたうちの中隊長などは、時々大隊長あたりからの

お恵みにあずかつていたように見えた。

なるべくやわらかい苺やよもぎの葉っぱを、約一日日蔭に乾燥させる。そしてそれを小さくきざんで紙で巻くと、我々の愛する煙草らしいものが出来上るのであるが、それが結構うまいのである。適当な紙がなくて弱つたが、それでも大事に背囊の中にしまいきんでおいた古い女房からの手紙が完全になくなるまでには、相當にこの手製の煙草を愉しむことが出来た。

「おい一ふくやつて行けよ」

私は、親しい戦友が晝飯のための湯をくみに來たりすると、すつかりいい氣持になつて、私の煙草を差出した。

湯わかしには堂々と火氣がある。だから、戦友たちは火氣嚴禁の軍隊生活の中で、ここだけでは悠々と一ふくやれるのである。

「ブーツ」と煙をふかしながら、班長や古年兵を忘れた表情で目を瞑るのを見て、私は嬉しかつた。

とある雨上りの日の午後、何だかうすら寒い風が吹いて兵隊たちは熱い湯をやけに喜んで飲ん

でいた。

一日に一回は、何とはなしに私の勤務場所である湯わかし場にやつて来るのを習わしにしていた福山が、馬鹿にこくして「おい！」と呼びかけて来た。彼は哈爾濱以來ずっと同じ運命をかこつて来た戦友である。

満洲國の地質調査所に席をおく科學者であるが、山を歩いて鍛えあげたその體軀はがっちりとお互いの個性をさらして話し合う愉しみなどは、全くあきらめていた私たちは、その頃、唯顔を見合わしてにつこり微笑を交すこと——その笑いも決して明るい心からの微笑ではあり得なかつたが——によつて、ほのかな人ごころを感じ合つていたのである。その福山が馬鹿に元氣のいい顔色で近づいて来るのだ。

そして、泥と汗でくさくなつた軍衣のポケットをさぐりながら——

「おい、本物だぜ」と云う。「何だい？」とかすかな期待で彼の指先をみつめる私の眼前で、彼はおもむろに、くしゃくしの紙包みをひろげはじめた。時々彼がせしめて来てくれた砂糖のかたまりとはどうも違う。彼がおもむろに開いた破れ新聞の中には更に白い塵紙の包みが見られた。

「何だい？」私は全く見當がつかなかつた。にやにやつと嬉しい顔で、彼はそのしわくちやの塵紙をひらく。と、どうだろう——その塵紙に丸められて、一つまみの煙草のきざみがあつた茶褐色をしておさまつてゐるではないか。

「どうしたんだ、おい？ 本當の本物かい？」

全く夢のような話であつた。彼は「やらぶ」の枝をちよんぎつたパイプに本ものの煙草をつめた。私は燃えさしの松の枝をドラム罐の下からつまみ出して捧げた。

「やれよ」と彼は先ず私にパイプをさし出してくれる。こうして私は半年ぶりに本ものの煙草をふかぶかと胸一ばいに吸いこんだのである。煙を少しも無駄にせず、みんな腹の中に吸いこもると、私は深呼吸をした。煙がくらく／＼と私の五體中をかけ廻つた。

「ああ——」瞑つていた目をひらいて、すゝつと煙をはき出すと、白いかおりが彼のひげだらけの顔にぶつつかる。彼も満足そうであつた。こうして彼と私とは「やらぶ」のパイプで二ふくすつのほんものの煙草を満喫してから、「もつたない、あした又やろう」と約束した。彼は大事に、又もとのように、きざみを丁寧に二重に包んで、彼のしらみのたかつた軍衣の物入れにしまひこんだ。

彼の説明によると、彼がこの貴重なひとつまみのきざみを入手した経緯はこうであつた。彼は平良の町まで傳令に出かけたのである。平良——それは宮古での唯一の町であり、中學や女學校もあつて、我々の宮古島第一歩がここに印された思い出の港でもある。

中隊で劣等生だつた私には、遙か二里も離れた平良の町まで單獨で傳令に出される機會などは決してなかつたが、彼はたまたま新京の同じ地質調査所で、彼よりは遙か下役として事務をとつていた男が、主客を轉倒して今は彼の直接の隊長という威張れる地位に着いていたので、信用という程ではなくても、まあ運のいい情實に幸いされて、傳令などという重要な役をおおせつたのである。

とにかく平良の町まで出かければ、禁斷の木の實にもありつけるといふので、我々はこの平良の町まで出かける（特に單獨に）といふことを、實に大きな幸運だとوراやましがつたものである。彼は早速禁制の民家に立ちよつて、我々の垂涎おくあたわざる芋や黒砂糖の饗應にあずかつたのである。そして、その親爺が一箇八十圓（昭和二十年の初めにですぞ）でたしなんでいた「あやめ」をあれこれと御愛嬌をふりまいて、やつとひとつまみだけ、せしめて來たのである。

これは、當時の我々の生活では最上級の羨望をかち得るに足る大収穫である。

その時、俺は豆腐汁をおかわりしたんだ！」

と彼は、羨ましそうにまたたく私の瞳を見ながら鼻をびく／＼させたものである。

だが、私は決して彼をねたまはしなかつた。彼は私のために、ほんものの煙草を二ふくも吸わしてくれただけではないか。

陣地構築

私は満洲以來ずつと一冊の小さいメモを持ちつづけていた。毎年正月、總裁名で會社員に配られる満鐵日記と呼ばれるものである。私たちが、満洲から南に動員されることかほぼ確定的に知らされてから、私はこのメモに二三行ずつの日記をしるして來た。だが、それも宮古の苦しい奴

蘇生活が始まつてからは、やつと二カ月半、十月三日の欄に「ああ、今日は軌雄の誕生日」と云う一行を最後として、全くとだえてゐるのだが――。

この小さい満鐵日記の八月五日（昭和十九年）の欄には、「大東亞戦争とは穴を掘ることなり」とそれだけ書いてある。七月二十四日に宮古島に上陸したのだから、まだ二週間とは経たない日である。上陸第一歩から終戦の報を聞く一カ年餘り、私たちに與えられた任務の總ては「穴を掘る」ことであつたといつても過言ではない。陣地構築とか、陣地作業とかいうもつともらしい本名を持つこの穴掘りが、穴掘りの親方とも云うべき將校や下士官とぐるになつて、多くの惜しい戦友を殺し、私の身と心とをむしばんだ。

最初は専ら個人用の防空壕で、直徑七十糧程度の穴を一米も掘れば足りるので、與えられた小さい圓匙と十字鋏とで事足りたが、やがて本格的？な一箇小隊もはいろいろという掩蔽壕や、彈藥集積のために山の横つ腹に大きなトンネルをぶちあけることを要求されるようになってからは、本當にどうしようもなかつた。

「旅順」の東雞冠山が、具體的に私の知つてゐる防禦陣地である。あれが明治三十七、八年である。だのに、昭和二十年に、アメリカを相手として構築する防禦陣地が、小さい十字鋏と圓匙で

カチャ／＼とくじつた穴でいいのか——私は「敵は宮古島にきつと来るぞ！」と眞面目な顔でどなりまわす將校の聲を聞きながら、當然こうした疑問を感じないではいられなかつた。だがいつとはなく、私にはそんな風にものを考えたり、批判したりする力はすっかり消え失せていつた。そして唯徒らに、云われるがままに穴を掘つたのである。「島全體を蜂の巢のように穴だらけにするんだ、そしたらいつ敵が來ても斷じて心配は要らん！ ラバーが嚴乎として不落でいるのは、島全體が穴とトンネルになつてゐるからだ」私のきらいな將校群の中で、まあ嫌惡のパーセントージの一番低かつた山口という小隊長が、こんなことを云つたのを覺えている。

島全體を蜂の巢のようによしようというのに、我々は島の民家に出かけては、大切な鍬や鑿をだまして持ち出さざるを得なかつた。

「一寸貸してくれ！」そう云つていやがる器具をとりあげてしまうのだ。そうしなければ、強制される穴を完成出來ない程、日本の陸軍は貧乏だつた。珊瑚礁で出來上つてゐるこの島に穴を掘るには、それが假令玩具の陣地に過ぎない穴であつても、道具なしでやらされることはなか／＼である。

精神！ 精神！ 氣力でやるんだ。ああ、何と悲惨な近代國家に、二十世紀の日本人は生れあわせたることか。原子爆弾で終末を告げた第二次世界大戦を、竹槍と肉弾とで戦つた民族の爲に神よ、一抹のあわれみを垂れ給え！

宮古の冬は、全く雨の半歳であつた。島の人々に聞くと「今年は特別だ」ということだつたがそれにしてもよく降り続いた。着のみ着のまままで寝る時まで同じ軍衣にくるまつている兵隊は、雨と土とでどろんこになつたまま、しとくと茅の屋根から落ちて來る雨垂にふるえなければならなかつた。そしてうつら／＼と彼等のたつた一つの許された愉しみを夢路にたのしんでいると「起床！」という雷のような絶叫に威嚇される。

夜間作業というやつである。まつくらな夜を、禪にまでしみこむ雨の冷たさに何等の希望もなく、十字鉞を振り上げながら、私はよく古い映畫の一齣を思い出したりした。「奴隸船！」そんな映畫があつたつけ。

私と同じ分隊に、山本という若い満鐵社員出身の兵隊がいた。一選抜と云う言葉で呼ばれた青

年で、斷然中隊の初年兵でトップを切っていた。

同じ満鐵に勤めていたというので、私は彼に親しい好感を覚えていたし、彼も亦老兵の私が、満鐵では彼より先輩であるらしいという臆測から、尊敬に近いものを感じていたようであった。然し、若く逞しい彼が總て兵隊としての任務をテキパキやつてのけて、上官から可愛がられ、同僚から一目おかれていたのに反して、私はまるで正反對の存在であつた。彼は少なからず、私に同情をよせていたようである。私は彼の温かい同情を膚に感じる毎に、自らの哀れな兵隊姿を、つつかれるような淋しさを味わつた。

山本は、よく私と穴を掘つた。東京で女給の周旋屋をやつていたと云う分隊長のTが、我々の穴掘りの指揮者であつたが、なか／＼になまするい男で、御自身は結構でたらめをやりながら、自己の怠慢を糊塗するために、兵隊にはかなりの弾壓を加えたものである。その分隊長にとつて山本の存在は實に大きな力であつた。

將校の巡察のない時間を見計つて、近くの民家に逃避する時の分隊長は、いつも山本に代理を命ずることによつて、彼自身の責務を完遂出來た。しかも、そんな時山本はいつも私を休ませてくれた。

「いいんだ、お前休んどれ！」

そう云つて、彼は逞しいその腕に圓匙をとると私の分までやつてくれた。そして、時々穴の中から私をふりかえつては、満洲と満鐵の話をしかけて來た。私は遠く彼方へ忘れかけていた懐しい大陸の想いに、魂を呼びもどされたように、彼と話したものである。彼が南滿の冷山機關區に勤務し、學歴と年齢を飛びこして既に「職員」の資格を與えられていることを知つたのもその時であつた。

その後私は、穴掘り作業中に分隊長のTから、

「おい、お前は満洲で山本の上役じやつたそうだなあ」

「時々新聞にもものつてたというじやないか」

と、馬鹿にやさしく話しかけられてめんくらつた。山本が勝手に紹介したのだ。

「もさくした使いものにならない老兵」の私に、いつも口うるさく文句をならべていた分隊長のTが、私を特別扱いにしたのは、それからである。

「お前はからだが弱いから、飯あげに行け」そう云つて、私を穴掘りから解放して、中隊の炊事まで晝飯をとりに行く事を命じ、いつの間にか「お前は飯あげ要員だ」といつて、穴掘りの劇務

から離してくれるようになったのである。

戦争の前途に見透しを持つことなど微塵もないTは、漠然と「除隊」とか「召集解除」を豫想して、「こいつ、兵隊稼業をやめたら、何かと利用価値がありそうだ」位の下心を抱いていたようでもあつた。とまれ私は、苦しい穴掘り作業に服しながら、案外苦しくない環境をかち得て、心秘かに若き満鐵青年山本に感謝したことである。

油

個人的な希望をいうことなど、凡そ日本の陸軍とは縁遠いものに考えていたのに、特別錬成隊でマラリアあがりの體力恢復をはかるといふ恵まれた環境におかれた時、錬成隊長の玉木中尉から始めて——そして恐らくそれが最後でもあつたが——「希望を遠慮なく申し出よ、ここの生活の一切に關して不満があれば、忌憚なく書け」と云つて紙ぎれを渡されたことがあつた。

ホホオと思つて、はじめはとまどつたが「忌憚なく」と云われると「上官の命令は朕が命令」でもあり、凝乎とふりかえると、云いたいことが山積している。然しながら、到底かないもしない不満や希望を並べてもはじまらない。常識的に宮古島の生活で、申し述べてさしつかえなさそうな希望を、私は二つ書いた。

「現在の戦局を知らして欲しい」と云うのが第一で、「何とかして、脂肪分を攝らしてもらいたい」と云うのが第二の要求だつた。

丁度比島作戦酣な時で、風の便りに、どうも戦局は不利らしい。本當のことを知りたかつたのである。と同時に、全身を以てする「脂肪分」への激しい慾求は、その時の兵隊の全部が「肉を食わしてくれ」とか「金を出すから、民家から豚を買つて食わせる」と云つた表現で、書き並べた切實な願いだつた。みんな瘦せ果てて、皮膚のどこにも油つけがなかつた。兵隊の寝物語りは「てんふら」であり「すきやき」であつた。兵隊たちはてんふらの話をしながら、本氣でのどをゴキ／＼鳴らし、つばをのんだ。「てんふら」の話をして、笑つたりユーモアをとばしたりするのは全然違つて、せめて話の中からも油つけを吸収しようとするかに見えた。

「てんぷら」の話を最も得意とした男がいた。新京組の一人で、早稲田の經濟を出たインテリ兵隊で近江と云つた。獨身の頃から、臺所でお母さんと並んでいろんな料理をつくるのが好きでよくいたすらをやつたといつて、極めて具體的に「てんぷら」のころものつくりかたから、油の煮え具合について、専門的な話を展開して、兵隊たちののをならさした。彼の話がクライマックスに達して、眞白いころもをかぶつたえびを煮えきつた油におとして、シャツと油のはねあがる場所に到ると、みんなの瘦せた表情は緊張して、くぼんだ眼は異様に輝いたものである。その近江が腹痛を起した時である。軍醫は彼に下劑の服用と絶食を命令した。衛生兵から少量のヒマシ油をもらつた彼は、折角彼の腹の中におさめた貴重なカローリを全部出しつくさねばならぬことと、更にその後三食を完全に断たねばならぬことを、悲痛な面持で考えていた。本當に、食にあぶれていたその頃の兵隊は、絶食を命ぜられることを恐れて、腹痛を申し出ることはひかえがちであつたのだ。ところが、その近江がヒマシ油を口に入れるに至つて、實に驚くべき現象が描き出されたのである。それは近江自身も豫期しなかつたことである。

「うまい！」

ヒマシ油を口にふくんだ彼の表情は實に満足そうであつた。

誰もが眼をつむり、鼻をつまんで、ぐつとのみ下すあのヒマシ油が「うまい」のである。彼は子供がおやつをたしなむようなみ方で、ヒマシ油をじっくり味わいながらのみ乾していつた。

「實にうまい！」

側の兵隊たちも、なるほどうまいに相違ない——と、うらやましそうに「油つけ」を堪能するこの病人の口許をみつめていた。誰も不思議がりはしなかつた。

完全に脂肪に餓えていた兵隊たちには、油つけの總てが、そのまま吸収されるような氣がしてならなかつたのである。

宮古には「やらぶ」と呼ばれる樹がたくさんあつた。丁度ゴムの木によく似ていた。最初私はこれをすつかりゴムの木と信じていた。だからこの「やらぶ」の小枝をポキンと折つては、新島の第一ホテルのピヤホールを思い出して祕かに愉しんだ。ゴムの木はビールが好きである。いい機嫌になると、よくジョッキにのこつたビールを盆栽のゴムの木の根もとに流して、

「おい酒は飲んでも飲まれるんじゃないぞ」なんてなことを云つて氣焰をあげたものだ。その「やらぶ」の實が少量の油を含有している。麻袋に一ぱいの「やらぶ」の實を拾い集めると、丁

度茶碗に半分位の油がしぼれるのである。これは食料油としてではなく、燈火油であるが。

簡単に、我々が試みた製油の経路を説明するところである。きたない麻袋をかついで「やらぶ」の木をさがす。それは主に民家の周りにあつた。木についた實よりは、地上に落ちて腐れかけたのがいい、というので我々は、「やらぶ」の根元をかきわけてその實を拾い集めた。麻袋に一ぱいになると、早速内緒で民家に立ちよる。

「おばさん、芋はないかね」と愛嬌をふりまく。

いつも兵隊の襲撃におそれをなしている慾深い島のおばさんたちは——上陸當初はそうでもなかつたが——大てい不愛想に「ないよ！ 兵隊さん」と云つて斷わつたが、食わんが爲には押しの手である。いくつかの芋にありついてすき腹のたしにすると、我々はその目の收穫を喜びながら歸隊した。そして油の製造にとりかかるのである。先ずこわれ鍋で「やらぶ」の實を焼く、そして一皮だけはぎとると「やらぶ」の實は何とも云えぬ油つばい香を發する。未だに不思議なのはあの魅惑的な芳香にも拘わらず、我々は「やらぶの油は食えぬ」ものと教えられて、その油を食べようとはしなかつた。本當に食料としてはいけなかつたのだらうが、まあ死ぬ程の毒素を含まない限り、何でも口の中にほうりこんだ我々が、よく我慢したものである。

さて、そのふんわりと焼けた實を臼に入れて、きねで搗くのである。三十分も搗いてその實をくたくと、今度は布に丁寧に包んで、上から大きな石のおもしをしてしぼるのであるが、大部分は包んだ布に吸いとられ、たら／＼と落ちる油のしずくを、ありつたけの智慧をしぼつて、無駄のないように採集しても、前記のように、やつと麻袋一ぱいから茶碗に半分程度である。それだけの油を採るのに、大體兵隊二人がかりで完全に一日を要した。しかも決して上等の燈火油ではなくて、事務室と稱する准尉のがんばつてるかやぶきの部屋を、佛壇の燈明以上に明るくすることとは出来なかつた。

とても採算のとれる製油法ではない。だから島の人々は、我々が「やらぶ」の實を拾い集めるのを見て、「兵隊さん、それ、何にしますか」と不思議がつて聞いた。そして「油を作る」と答えると一樣に驚いていた。

この「やらぶ」油が空襲のはげしくなつた頃暗い洞窟の奥でぼんやりと灯りをなげていた風景は、生涯忘れられないものの一つである。

結婚十周年

——妻に遺す——

正子！

この手紙が君の手許に届くとも思われない。だが何故か今日はどうしても書き遺しておきたい。今日——昭和二十年三月二十八日だ。場所は南西諸島の宮古島、鏡ガ原と呼ばれる陸軍病院の裏山である。アダンバの根っこにはらばつて、時々襲つて来る敵戦闘機グラマンの掃射を避けながら僕は遙かに想いをはせる。

正子！

今頃君は、新京のあのささやかな住居で、軌雄と宣子を相手に、何を考へてることだろう。軌雄は八つ、もうすぐ学校だなあ。宣子もぼつ／＼二回目の誕生日が近づいた。元氣に大きく

なつてるだろうか。

あれから丁度十年、君と僕だけが今日の日をはつきり意識しているであろう十年目の結婚記念日——。僕は夢のように、君の花嫁姿を思い出す。

夢——本當に夢だ。

僕は今、僕の死の環境を君に書き遺すつもりである。それは幸福だつた僕の歴史に、君が盡してくれた真心に對する感謝の表現でもある。僕が如何なる環境で、僕の生涯を終えたか、その報告を受取る第一の有資格者は君である。そして君こそ最も本氣で僕のこの最後の記録を讀んでくれるに相違ない。

宮古島——君は恐らくこんな島の名前を聞いたことはないだろう。が然し、極めて近く、君は第二の硫黄島として「皇軍玉碎の聖地宮古島」を耳にするかも知れない。少なくともこの三月末から始まつた敵の南西諸島への攻勢は決してなまやさしいものではない。沖繩本島か？ 然らずんばこの宮古島だ！ 米軍は本土攻略の最後の據點としてそれをねらつている。

今日も、病院の掲示板に、はつきりそうした警告が貼り出されているのを見た。

そしてその宮古島に僕が来ていることを、君は恐らくはつきりは知らないに違いない。僕はこの島に上陸以來、許された範圍で最大限に、君に宛てて便りを書いた。だが冷靜に考えると、君の手許に果してその中の一つでも届いたであらうか。既に去年の秋から東支那海は魔の海と化していたのだ。敵潜水艦の活潑な活動は、この南西諸島の流域さえも日本の制海圏内でないことをはつきり感ずる。僕は僕たちの毎日の食糧だからでもそれを確認せざるを得ない。糧秣の補充は全然絶望らしい。

正子！

僕は今入院患者である。マラリアが原因だが、この半歳の劇勞と食糧不足とは僕の中から思いきり衰弱させている。「榮養失調」それが現在の僕の病名だが、君が見たら恐らく泣くであろう程に痩せ衰えてみすばらしいからだである。何人も何人も同じ病室で、同じ病名の兵隊が死んで行つた。そして死んだ兵隊たちは原隊から迎えに来た戦友につれられて、ここから眞つ直ぐ大野山林と呼ぶこの島の密林に擔ぎこまれて松林の煙と化した。

僕の感傷は「ここでは死にたくない」と希う。

だが状態は僕の願いをいれてくれるであろうか。

正子！

僕は尙且、直感的に「生きる！」と信じている。そして何時の日にか、この痩せ衰えた五體を君の愛撫の中に投げ出すことを夢の様に心に描く。この直感は今僕が生きているこの環境とは全然關係のない超理論的なものだ。

正子！

ほんの二時間程前、僕は僕に向つて眞直ぐ落ちて来る五十呎の爆弾にはつと眼を瞑つてこのアダンバの根元の小さい個人壕の土を握りしめた。幸いに爆弾は十五米程先の丘の頂に大きな穴をあけて、僕は土と石ころの洗禮を受けただけで済んだが、他の一弾は丘の麓にあるこの病院の炊事勤務員の待避壕に直撃弾となつて、七名の顔見知りの兵隊たちは一瞬にして、小さい肉塊となつて飛散した。

中食をとりに行つて、僕はその殘骸を目撃したが、不思議に「やられたな」と思つただけだつ

た。今の僕はからだの衰えと共に神経もすつかりにぶつてゐるようだ。

正子！

日本はこの戦争に本當に勝てるであろうか。僕の應召前に山田が家にやつて来て、彼の本職であるソ連の經濟知識を傾けて「日本敗戦論」をやつたことがあつたなあ。僕が理論的な反駁が出せずに「日本勝たざるべからず」と強調して二人で大聲をあげるのを、君はビールをつぎながらだまつて聞いていたが、何だかあまりに早くあの夜の山田と僕との議論の判決がはつきりと下されそうな豫感がする。

「負けるー」いや、そんなことは考えまい。だが、いつになつたら僕は君の顔を見ることが出来るだろうか。

正子！

去年の七月に、滿洲からこの宮古島に送られて来て、もう八カ月になる。毎日僕は土を掘り、土を擔い、土によごれて、土に寝た。しかも兵隊では最下級の一初年兵として、尊敬出来ない上

官たちからいたためつけられた。三十五歳から三十六歳の僕の人生はまさしく奴隷の生活である。僕はしみんゝと意識しなかつた過去の幸福をおもう。

君と生き、その時代に成して来た仕事や遊びの總ては今の僕には全く天國の思い出である。どつちが本當の人生であろうか。

正子！

君は今僕が病院に居る、ということを心配するかも知れない。軽い肺浸潤で大連の小平島保養院にはいつた時、未だ若い新妻だつた君は、あの大きな眸に涙を一ぱいためた。君は泣き虫だ。然し兵隊稼業では入院生活程有難い時は絶對にない。

こんなことを考える僕は悪い日本の軍人であるようだ。だが本當に僕はマラリアでこの病院に入院出来たことをよろこんでいる。原隊のいやな上官の顔を見なくて済むし、何といつても僕からだと神經には不向きな兵隊の荒仕事から解放されていて有難い。

十周年の記念すべき君と僕の目に、敵の空襲下に在つて「君に遺す」べき鉛筆を握れるのも入院のおかげである。

正子！

僕は今俄鬼のように食い物を欲する。それ程ここでは全部の兵隊たちは飢えているのだ。空襲の合い間を見てはこの丘の下の畑に芋を掘りに下りて行く。それは民家の農作物を荒すのだが、泥棒はいけないと云うような良心は今の兵隊は誰も持つていない。

今日は特に、炊事勤務員の爆死のために、中食はなかつたし、恐らく夕食も食えないだろう。君が、よくやつてくれた「てんぷら」の香がブーンと想い出される……………。

正子！ 僕によごれた雑嚢には、今君の名残りとして、應召の時に作つてくれたお守り袋と哈爾濱の兵舎に宛てた便りとがあるだけだ。軌雄と宣子の寫眞をアダンバの根つこに立てかけて、僕はなぜ君の寫眞を持つて來なかつたかと後悔している。それでも軌雄と宣子の寫眞はいい。二人とも「お父ちゃん、しつかりしろよ」と云つてるみたいなき表情である。僕はこの二人の姿のすぐ横に、正子！ 君を六感する。この寫眞は随分、大事にして來たがそれでも端の方はくちやくでしみがついて色もすつかりあせた。僕の中からはシラミでむすがゆい。

正子！

元氣で生きるんだぞ。

結婚十周年を、宮古島のアダンバの蔭にて、

つぎを

夢

もう高熱はなかつた。みんな作業に出してしまつて暮舎は静かになつていた。四十度五分のマラリア熱の爲に、二晩つづいてほとんど眠ることをしなかつた私は、ぼんやりと松に吹く風を聞いているうちに、うとくとまどろんだのであろう。

畑の中に離れてポカンと一軒ある家は、決して新京の家ではなかつた。それはこの島の平良の

町はずれで見た家にそっくりだったが、二階の部屋の具合など、一寸新京の雪江の獨り居の感じだつた。

「雪江」——僕はこのぼんやりした夢の筋をはつきりさせるために、彼女に就いて一應の説明を試みておこう。

雪江は偶然な機縁で、私と机を並べて新京の満鐵本部で仕事をした女性である。始め彼女は、仕事の連絡で私がよく入りびたつた工理事の部屋に居た。工理事というのは、大陸輸送の權威者であるが、彼女がセーラー服を脱いではじめて職業婦人の仲間入りをした時から、工理事（その頃は一課長であつたが）の部屋づきになつたのである。

唯單にきれいな利口そうなお嬢さんと云う以外には、彼女について何等の知識も持たなかつた私に、「實は家庭の事情と本人の健康の關係で、女の子を一人大連に轉動させたいのだが、あなたの關係に採つてもらえませんか」という相談を、工理事の直接部下にあたる人事擔當者からもちかけられて、私は軽くひきうけた。幸いに私の屬している弘報課の一部が大連に殘留していて、そこに娘さんを一人位入れることは極めて簡單だと思つたからである。

私は氣輕に人事のカードを受けとつて、大連に連絡してこの問題はけりになつた。

それから三週間目位に、私は丁寧な女文字の封筒を手にした。それは大連に轉勤の希望を實現出來た喜びを述べた禮狀に過ぎなかつたが、私が氣輕に仲介した娘さんが「理事づきのあの」きれいで利口さうなお嬢さん」であつたことを知つたとき、私は愉しかつた。

滿鐵の本部機構が、實質的に北進態勢を整えていた時で、大連は名前だけの本社となり、滿鐵の仕事の中樞は既に奉天と新京とに移されていた。彼女が大連生活をはじめて一年足らずで、滿鐵本部が大連に殘留していた機構の全部を奉天と新京とに移すことになつた時、彼女は被害者の立場になつた。男子の社員と違つて働かなければ食えない程でもないのだし、そのまま會社を辭めてしまえばおしまいだつたのだが、その頃彼女の擔當していた仕事が「滿洲グラフ」と云う寫眞雜誌の編輯で、この仕事はとも彼女に氣に入つていたらしい。

彼女は文學の愛好者だつた。だから、滿洲の實狀を内地に紹介する目的を持つこのグラフ雜誌の編輯には、強い未練を持つていたのである。

「家庭の事情と健康の關係で」大連に轉勤した筈の彼女は、その時から新京で私のグループにはいつて毎日向い合つて仕事をするようになつた。

私は初めて彼女を身近かに見るようになった。そして仕事の話の外に、文學や人生やらを話し

合う機会を持つた。

二十五になつて、毎日小説を讀んでいるきれいな彼女に、

「何故結婚しないの？」

と質問したこともあつたが、彼女は笑つて答えなかつた。その後彼女が、私の知つてゐる（やつぱり満鐵に勤めていた）文學青年のWと戀をして、今は離ればなれになつてゐることを、ほかから聞いたことがあつたが、彼女は私に向つて彼女の戀愛について語つたことはなかつた。特に突つ込んで聞くには、彼女は語ることを欲しなかつたようにも見えたので、私はそれをしなかつた。

彼女はよく、私のうちに遊びに来たいと云つた。そして私の妻と仲良しになりたいとか、私の子供たちと遊びたい、そして私の本だから勝手に古い日本の古典などをひつぱり出して讀みたいなどと話してゐた。私はそれを歓迎する旨を答えて、夕餉の食膳で彼女のことを妻に紹介したこともあつたが、實際には一度も彼女は私の家に遊びに来ないうちに私はとうとう軍隊に召集された。

赤い召集令狀をもらつた夜、會社の悪友たちとやけくその酒を飲んだ歸り途に、私は彼女の獨

り居の部屋をたすねて、「征つて來ます」と別れを云つた。

私は酒に酔つていた。だから彼女の部屋でうたたねをしたようである。憂鬱な軍隊生活を想つてかなり感傷的になつていた私が最後に「さようなら」と云つた時、彼女は私のポケットに紙ぎれを入れた。

大君に召されて征くと直立つ君を

凝視めてあれど言もなきわれ

憂いなく征くといいつるひとを思い

何故のこの祈るころぞ

いましばし吾家にいませ征くという

きみ送らむと化粧えるわれぞ

そんな歌が紙ぎれに書いてあつた。

その彼女の名前が雪江である。

そしてその雪江の部屋らしい感じが、宮古の夢の中に現われて来たのである。

そこには妻の正子と、この雪江とがいた。私はやつれたままの姿でできたない軍服をまといつてたが、どうしてかそれを氣にしてもいないようだった。

正子は子供たちのために編みものをしていた。その横に雪江が居て本だから「萬葉集古義」かなんかをひっぱり出して頁をめくつていた。

私は宮古島のアダンバの話をしきりにした。

「パインナップルだと思えばいいさ。あれと少しも違わない實だよ」

そう云つて軽く兵隊の食慾を語るのだが、二人ともだまつて返事をしない。よく見ると眼にしばい涙をためている。

「そうか、どうせ泣くんならんと泣かしてやろう。

僕の軍隊生活は全然うそばかりの連続さ、本当のものを究めようとする力は僕にはもう盡きていた。

僕は自分自身をさえ誤魔化して、その日／＼を暮したので。僕には何故そんなことをやつたか

はつきりしない。生きるため？ そうだつたかも知れない。何とかして誤魔化す以外には生き
伸びる途がなかつたのだから――。

といつて、その頃僕はこのままでは死にたくないとは思つていたが、特に生への強い執着を持
つ程のねばり強さは、既に棄てていたのだ。考えて見てくれ。ひどい栄養失調で、全然養分の
吸収力を失つた戦友、もつと露骨に云えば、糞のたれ流しで自分では動く力もない兵隊が、そ
のままおき棄てられているのだ。苦しんで聲を立てる力もなくなつた兵隊が、翌朝になつて、
隣りの病友から、おい、もう冷たくなつてるぜ、とあたりまえの様にその死を報告されるのが
病院の生活だ。

爆弾にあたつてひと思いに死ぬのならともかく、宮古での病死はとてまたまらん！」

私はひたすら病死をおそれていたようだ。だから熱心に病氣では死なないぞと繰り返し返した。正
子と雪江は相變らずそれらのポーズのまま涙を流していた。私はしきりに、何も云わぬ二人
をもどかしがるのだが、どちらも口をひらこうとはしなかつた。

ふつと立ち上つた私は、窓邊に寄つた。やつぱり二階らしく、下をのぞいてみると、地面まで
に非常に長い距離があつた。どうも地面がかすんで見えないようだつた。どうしてか、私はその

底知れぬ淵の様な深い地面に、二階の窓から飛び下りなければならぬ運命を直感した。

後に居る正子と雪江を強く自覚しながら私は目をつぶつて、窓からジャンプした。

「あつ」と云う二つの女の絶叫を聞いたようだった。

唯それだけだった。

私は空にういた私のからだの不安をどうすることも出来なかつた。

そして眼が醒めたのである。

衛生兵の山岸が「おい検温だ」と幕舎の入口からどなつていた。私はびつしより汗をかいていた。マラリア菌が、夕方の熱を三十九度三分にまでひき上げていた。

飛行場設営

宮古島の兵隊の手で成された飛行場の建設作業は私の精神史に大きな一線を劃した。

幕舎の近くにまで握り拳大の岩の塊が飛んで来た。私はその音を聞くと、「あゝ又午後の作業が始まる」と思つた。どうかしてその音がなか／＼響いて來ない時があつた。恐らく爆破を擔當する工兵隊側の何かの手ちがいからだろうが、その音響が濟むまでは、幕舎の横の甘蔗の殻の上に寝そべつて居れたので、その音響は地獄へのベルでも鳴らされたような恐怖に響いた。

南島の宮古の九月は炎暑にあえいだ。午後の太陽は、いささかの容赦もせず、瘦せた兵隊たちを苦しめた。大ていの兵隊は禪だけになつていた。その禪は土と汗とでどろ／＼になつては乾き又どろ／＼になつた。然し洗濯どころか我々には、のどを醫す水が足りなかつた。

湯わかし場と云うのがあつて、一日に二回程、水筒に湯を配給してくれたが、それも五人に一本か七人に一本かの割合で、もらつて來ると、とたんに空になつた。

灼熱の陽がジリ／＼と照りつけるある日の午後、一緒に「モツコ」をかついでいた大木が「向うの地方人の假宿舎には水があるかも知らん」と云い出したことがある。なる程、いい所に氣がついたと思つて、彼と「便所へ行く」脚を延長して、それから百メートル餘り先の地方人の宿舎を訪ねた。

男たちの大部分は作業に行つて空だつたが、五六人の島の娘さんがキャツ／＼と笑いながら芋

この誤謬が平然として實際に行われたのである。

ゲートル（軍隊では巻脚絆と云う言葉の代りにゲートルとでも云おうものなら、ひどい暴力の懲罰を受けなければならぬが）を、つけたままゴロツと横になつた兵隊は、午前四時に野獸の咆吼にも等しい「起床」の聲に起された。

そのまま岩をくだき土を運ぶ現場に走らされるが、そこで約二時間餘り小隊長Oの蠻聲に追い立てられるのが、先ず朝食前の「間稽古」と云うやつである。

古年兵たちのはしたない監視と言動の中で食事が終わると、愈々午前の作業である。作業は之を大別すると、「十字鋏」と「モツコ」と「鑿」である。十字鋏は勿論岩をくだき土を掘る。「モツコ」はその土や石を約百米位離れた凹地にまで運ぶので、これは二人で組む。鑿は、大きな岩に「ダイナマイト」をつめるための穴を掘る役目を果す。

このダイナマイトで岩をふつとばすのがこの飛行場作業での謂わば唯一の科學的手段で、その他は一切は太古の土木事業そのままと云つて過言でなかつた。

豊臣秀吉が大坂城を建造する時でさえ水力を利用したりして、もつと科學的であつたような氣

つた。集合が遅れたりして、他の中隊が先にひきあげたりすると、猛烈なスピードで追い立てられた。私は十字鋏と圓匙とを七つ程一緒にかつがされてのかけあしで、小さい石につまりたところがある。後から来た分隊長のTが「何をぐずぐずしてゐるんだ！」とどなつて私の尻のところを蹴つた。「畜生！」と思つたとたんに元氣が出て、やつと列に追いついたことを覺えている。

食事は餓えを満たしてくれるという意味だけで、嬉しいものだつた。暑さと過労とでおそらく食慾は減退していたのであるが、與えられる食事の量は食慾の減退を知らされる程充分ではなかつた。

それでもこの島の生活では、未だ曾つてない肉のきれなどが時々まじつていたのは、この作業の過重な負擔を補うための特別な心くばりがあつたのかも知れない。それに時々夕食のあとなどに「金鵝」やら「岩盤」と呼んだ黒砂糖のかけらが配給されたことは、人心地を失つた兵隊たちにかすかな微笑を湧かした。

夕食のあと、直ちに作業は開始された。殊に二十日間の豫定日が迫ると、夜間の作業は時として十二時頃までぶつ續けにやらされた。

作業用のライトがどこからか、私たちの土にまみれた群像を照していた。

ものなら、すかさず頭の上から罵聲がふつ飛んで来た。

「野郎ども！ 何をつつたつていやがる」

これが常に「上官の命は朕が命ぞだ」とおしつけて来る帝國將校の常用語だった。

「馬鹿野郎、そんなことで戦争に勝てるかつ！」

と手の鞭をふりあげては無雑作に兵隊をぶつたいた。

兵隊は黙々と牛か馬のように手と脚を動かした。物を云うものはなかつた。中隊によつてちがつたが、私の中隊では午前中に一回だけ十分間の正規の休憩が與えられた。

「作業やめ！ 十分間休憩」の號令がかかると、私は大ていその位置で腰を下し、長く寝そべつた。思わず「ああ」と云う嘆息が出る。

それが自分の聲を自分で意識する唯一のものであつた。

ダイナマイトの穴が掘られて、それが充填されるのが、十一時半か十二時頃になる。するとダイナマイトの爆破を避けるために幕舎まで駆け足で逃げなければならぬ。

これが我々の晝食の時間だった。

晝食の最中に「ドカン」「ドカン」と砂煙があがり、どうかすると現場から三四百米も離れた

作業の時でも、軍規正しい(?)日本軍隊はきちんと不寝番を立てた。それは極めてあたりまえのことでもあつた。若しその不寝番に三年兵と一緒に立つことになつたりすると、

「貴様一人でやれ。俺は寝るぞ!」とあつさり獨りにされる。

これは然し、私の場合極めて有難いことだつた。たつた一人、幕舎から離れて甘蔗穀の上に横になつた私は、星の一ぱいちらばつた夜空を仰ぎながら靜かに想いをはせることが出来る。

私は星明りをたよりに、私の小さいノートを出してこんな文章をかいたことがあつた。満洲に残した七つの吾子に宛てたのである。

軌雄よ。父は今北斗星を見ている。あの方向がお前の寝ている方向だ。父は日本が勝つために今からだをすりへらしている。然し父は將校ではない。父は將校にならなければ力を出せないように育つて來たのに、日本の軍隊では、穴を掘る土方の仕事だけを強いる。こんな戦友が何人も父と一緒に苦しんでいる。こんなやり方で日本がうまく勝てばいいが――。

ひよつとすると、父はこのままでへたばるかも分らない。自分の力を出しきらずにへたばることは残念だが仕方がない。

を切つていた。夕めしの準備だつたらう。私と大木は、例のどろ／＼の禪姿だつたが、そんなことを氣にする心は全然なかつた。

「水をのまして下さい」

單刀直入な斬込みは、あつさり功を奏して、なみ／＼とたたえられた炊事用の樽から思いきり水をあふることが出来た。息がつけなかつたようだ。島の娘の一人は、大木と私とのぼう／＼にのびた鬚面と如何にも老兵になりきつた衰えぶりを見まわしながら、

「兵隊さんいくつですか」と特有のアクセントで聞いた。その質問の中に、如何にも同情に満ちたものを感じた。

「同情される！」そんなあわれな自らの姿を今まで考えたことがなかつたし、同情してくれた島の娘の姿そのものが、決して豊かなものでなかつただけに、私は殊更強く自分の衰れた姿を見せつけられたような氣がした。

我々の夕食も亦、晝食と同じように、爆破の合間の待避時間だけであつた。困憊の身と心とは夕食にありつける喜びよりは、夕食にまで、かけあして追われて行かねばならぬことがいやだ

つて、やつと完成した。假設された幕舎を撤收して中隊の原位置に復歸すべく、重い軍装で歩き出した時、ふりかえつた松林の間に白い滑走路が浮び上つているのを見た。私は胸の熱くなるのを覺えた。十月四日の晝過ぎだった。

その時ふつとこんなことを思い出した。激しい作業の末期に、大隊長の中島少佐が絶叫した言葉である。猛烈な勢で馬を馳つて來た長身の中島は、へとくになつていた兵隊たちを見まわしながら、

「もう少しだ。いいかッ！」

兵隊の眞價は、疲労困憊の極に達した時、始めてはつきり分るのだぞー」としほり出す様な涙聲で叫んだのである。

私は、私の上官では、中島少佐だけに好感を持ちつづけていた。

だが、それから六日目の十月十日には、歴史的な米軍最初の南西諸島空襲が行われて、この滑走路にも穴があいた。

それでも、夜間作業は晝間に較べてずつと氣分が樂だつた。小高い岩の上からどなることを役目にしていた小隊長の方は、全員の「掌握」がしにくくて困つたに違いないが、掌握されてにらまれ通してゐる側の兵隊は、太陽のないことによつて助かるわけである。

「怠けよう、怠けよう」とねらつてる程、我々は非國民的な兵隊だつたわけではない。唯あまりに苛酷であり過ぎる作業の爲に、からだも心もまいり過ぎていたのである。

「精神が出來てないからだ！」

「たるんでいやがるんだ！」

そう云つて將校や下士官は兵隊を責めたが、寢食を充分に與えられることなくして、人間の活動が續くものではない。はりきつてこの劇勞に堪えている少數の者は、最も要領よく上官の眼をかすめて民家に出はいりし、何とか「食」にありついている者だけだつた。だから、これの出來る兵隊は初年兵ではない。二年兵や三年兵の元氣のいゝ兵隊が居ることは、初年兵の苦勞を二重にする。

僅かな睡眠時間も、兵隊たちには決してその全部が安息の時間ではなかつた。こんなはげしい

「兵隊さん、御苦勞ですわね」

そう呼びかけて、薩摩芋のふかしたやつを小さいざるに一ぱい持つて来てくれたのが、私のこの島での「芋と兵隊」の生活第一課だった。埠頭から三百米程離れた平良神社の下のアダンバの蔭に重い軍装をおろして、ぼつとした時だった。

平良の港を一望におさめながら「ああ、へんな所に來たもんだ」と思いながら芋を頬張ると、小さい練習機が海面をすれすれに飛んでいた。

島の畑の大部分はこの芋でうすめられていた。そしてこの芋が宮古の兵隊の命だった。如何にして芋を食つたかによつて、生き延びた兵隊と死んで行つた兵隊とが分れたといつてもいい。

陣地作業をしているそばを、芋を入れたざるを頭にのせた島の女が通る。兵隊は例外なしに、
「小母さん、一つ頼むよ」

と挨拶する。初めのうちはどの小母さんもどの娘さんも、氣持よく「どうぞ」と云つて芋のざるを頭からおろしてくれた。それは大てい野良に働く家族への晝飯であつたが、お國のために働く兵隊さんへの心づくしは、當然のことと考えてくれた様であつた。

軌雄よ。

お前は父と同じように軍隊を嫌うかも知れない。だが是非將校にだけはなつておくんだぞ。父の頃には「一年志願」と云う制度があつて簡単に將校になれたのに、父は愚かにもそれを避けた。

そして今苦しんでいる。

絶対に、どんなに軍隊が嫌いでも、將校の資格だけは確保しておくんだぞ。軍隊では將校だけが人間だ。

私がそんな不寝番を勤めている夜中の十二時から一時までの間中、隊長のS中尉の小さい幕舎からはかん高い笑聲がもれていた。

恐らくこの島の特産「泡盛」をくみかわしていたようであつた。例の私の小隊長Oの聲も時々混つていたことは勿論である。

二十日間で完成しなければ帝國の作戦に重大な影響をもたらす筈の飛行場設営作業は四週間経

——中隊である（食わせることを軍隊ではこう云つた）ものだけを食べ居れば充分だ。お前たちの榮養を考えての上でやつている！

などと准尉から何回も厳しく云われていたが、實際は腹がへつて仕方がなかつたし、正直にその通りにして居れば、誰もが極めて急速度に榮養失調に陥つて行くのであるから、兵隊は總てと闘つて芋を食ふことを考えた。

夜、不寝番に立つと近くの芋畑のつるをたどつたし、少し活潑な兵隊は民家の炊事場を襲つてざるの中の芋をポケットにしよばせて歸つた。

この島の習慣であらうが、芋のはいつた大きなざるは必ず炊事場の土間にぶらさげてあつたので、だまつて失敬して來るには全く好都合だつた。

然しそうしたことが續くと、島の人々は當然警戒をはじめ。私は一度、芋を買うために訪れた民家で、十二、三の女の子が、私の顔を見ると反射的に芋のはいつたざるをかかえて奥の方にかくしたのを見た。何とも云えぬ憂鬱さが、いつまでも私の頭を去らなかつた。

顔見知りでない家では、大ていこうした不愉快な目に會つたが、或る程度永く幕舎の位置を動かさずにいると、やつぱりお得意が出來た。

芋

「完全軍装」——それが宮古島に上陸した時の私たちのいでたちを表現する簡単な軍隊語である。これを具體的に並べると、軍衣袴、編上靴、巻脚絆、軍帽、執銃、帶劍というのが先ず下着のようなもので、帶革には前後に百二十發の實弾がおしこまれ、被甲と稱する防毒面と水筒をぶらさげ、別に實弾を三百六十發おしこんだ彈囊を肩にさげる。更に背中の背囊には、日用品と被服食糧などをぎっしりつめて毛布を巻きつけ、飯盒、圓匙、地下足袋、擬裝網をくつつける。

これが一番輕裝の私のような小銃兵の軍装で、機關銃などを持たされる兵隊は更に過重な負擔があるわけだが、小さい木造船にゆられ通して漸くこの島にたどりついた私には、全く持てあます重量の完全軍装であつた。軍装の重量に堪えかねて腰をかがめ、全身から湧出する汗が軍衣をすつかりぬらしている老兵の上陸姿は、恐らく戦いを身近かに感じていなかつた島の人々には、同情の種になつたにちがいない。

南西諸島が米軍の大々的な襲撃を受けて完全に日章旗をおろした前年の秋のことだつた。なだらかな起伏のある丘と畑とが續いて、ところ／＼に珊瑚礁からなるこの島特有の岩が突き出ていた。

初年兵だつた私には、どんな飛行場が作られるのか、滑走路がどつちの方向に伸ばされるのか見當もつかぬままに、「十字鉞」と「モツコ」だけの日ははじめられた。數千名の兵隊と、數百名の島の人々がこの作業の爲に動員されていた。臨時に建てられた天幕がすらりと並んだ。

作業の初日に、雨に降られながら、その幕舎を建て終ると、隊長のS中尉が、

「本日より二十日間の豫定を以てこの作業は行われる。若し作業の進捗にいささかでも齟齬を來すようなことがあると、帝國の作戦に重大なる影響をもたらすのである。お前たちは、寢食を忘れてこの事業の完遂に努力してくれ」と訓辭を残して行つた。

簡單に「寢食を忘れる」と云われ、我々はそうした言葉に馴れつこになつていたが、これを額面通りに實行させられるとき、如何に仕事に重大な影響を來すかと云う事實を考えなければならぬ。人間は生きてゐる、だから若し寝ることと、食うことを放棄して國家の存亡に關する重大事が成就出來ると思つたら、これ程大きな誤謬はあるまい。ところが宮古島の飛行場設営では、

中には副食の味噌やさかなまで快く提供してくれる小母さんも居て、あとで一圓札を出してもどうしても受けとらなかつた。

サイパンが陥ちて未だ日の浅い頃で、この宮古に多數の兵隊が上陸したことを、頼もしがつていたのだろう。島の人たちは我々に充分好意を持つてくれていることにはつきり掴めた。

然し兵隊の駐屯が二カ月も過ぎ、つき／＼に上陸する兵隊がこの小さい島の隅々にまで行きわたつて、もう島の人よりは兵隊の姿を見ることが多くなつた頃には、島人の態度は變つていた。

私は「芋」によつて、それをはつきり知らされた。毎日甘い顔をして、芋を分與するには、兵隊の数が多くなり過ぎたのである。

通りがかりはおろか、わざ／＼穴掘り作業の最中に、上官の眼をのがれて「少し賣つてくれませんか」ときたない民家の炊事場からのぞきこんでも、

「うちで食べるのに足りない」といつてあつきり斷わられるようになった。

——民家に入入りしてはならぬ！

——民家の不潔なものを食うと傳染病の因になるんだ！

がする。作業の末期になつて、工兵隊の鑿岩機があたかも科學兵器の模型でも示すかのようになり、臺お目見得して、鑿と鎚と小さいダイナマイトだけでやらされた穴掘りの、加勢をしてくれた時には、兵隊たちは「日本にもこんな近代兵器があつたのか」とたのもしがつた程に、誰もが、人力だけのがむしやらな土木事業に馴らされていた。

私は何となく「モツコ」をかつぐことを好んでやつた。よく考えると、僅か百米程度ではあつたが、小高い岩の上で片手に鞭を持ち、片手を腰のところにあてて兵隊たちの動作を一寸でも見逃すまいと頑張つている。小隊長の視野を離れ得ることがその原因のようであつた。私はよく大木と組んで「モツコ」をかついだ。彼は新京で經濟部事務官をやつていた男で、なか／＼抜け目のない男だつたし、彼よりはずつと體力を消耗していた弱い兵隊の私の要求をよくいれて、一時間に一べん位ずつ「便所に行く」ことをつきあつてくれた。「便所に行く」ことがその時の兵隊に與えられた唯一の休息だつた。正規には勿論分隊長の許可を必要としたが「モツコ」をかついで百米も離れたついでに、脚を便所まで運ぶことは露見しても何とか云い譯が立つたので、私たちは「便所に行く」ことを、實に大きな祕密として、休息の時間にあてたのである。

小隊長の視角の範囲内で、一寸でも腰をのばしたり、圓匙を持つたまま立ちんぼうでもしよう

私は、一年半の宮古島の生活で、二軒だけ本當に親しくしてくれた得意を持つことが出来た。

七〇

一つは西原にいた頃である。水波みのためのつるべを借りたのが機縁で、その娘さんと言葉を交した。二十位の娘さんで、機織りをやっていたが、

「兵隊さん、靴下はないでしょうか」と云う。島の生活にも、愈々戦争の翳が厳しくなつて、着物が買えなくなつていた。兵隊の靴下の糸をほぐして織物にしたり、縫い糸の代用にしたりするのである。

私は、分隊長や古年兵に見つからぬように、配給されていた新しい靴下を一足持つて行つた。それからは私はその家を得意にして、よく谷田部と二人で出かけた。作業の合間や點呼後の一寸の隙を見て出かけるのであるが、兵隊が民家への立入りを禁止されていることを知つて、なかなか要領よく手早やに芋を分けてくれたり、時にはさかなのはいつた味噌汁を御馳走してくれたりした。

私は、その頃戦時手當とか云うのを含めて月に十八圓をもらへることになつていたが、その中の大部分は強制貯金をさせられて、給料日には大てい二圓程度をありがたく頂戴していた。だか

ら、まさかの用意にと云つて、應召の時に妻がお守り袋や腹卷きに縫いこんでくれた何枚かの拾圓紙幣もほとんど使い果して、毎日芋を食うために、代金を支拂うことも出来なかつた。然し、娘を通じて話すようになったその老夫婦は、そんなことを問題にはしなかつた。時たま、二圓ながしの給料をもらつた時に金を差出すと、「とんでもない」といふ表情でおしかえすので、私は小さい子供に「お菓子でも買つてもらいな」といつて渡して來た。もうお菓子など賣る店は、西原にはおろか平良の町にさえも、全くなくなつていたのだが――。

もう一軒の私のお得意は、添道と呼ぶ部落のはすれの家だつた。「下地まつ」と云うのがその小母さんの名前だが、夫を空襲の犠牲にささげて老婆と三人の子供をかかえて獨りで畑の仕事から家の内の一切をきりまわしていた。部落の井戸端で、水を汲む順番を待つている時などに、よく顔を合わしているうちに、いつの間にか軽い挨拶を交すようになった小母さんである。

何回か、井戸端で會つているうちに

「兵隊さん、うちにも遊びにいらつしやい」と誘つてくれた。こんな風な近づき方をしたので、お互いに感じがよかつた。少なくとも顔さえ見れば挨拶がわりに、

「小母さん、芋をくれよ！」と云うあつかましい兵隊や、畑に出た留守をねらつて、釜の中の芋を食い逃げする兵隊とは違つたあつかいを受けた。添道には、終戦後もずつと私の中隊が位置したので、この小母さんの家では、随分永いこと、ほとんど毎日芋を食わしてもらつた。

愈々私たちが宮古島を離れる前には、さかなと「泡盛」とでお別れの晩餐までやつてくれた。この「下地まつ」さんの小さい子供たちに、私は東京に歸つたら靴と帽子を送る約束をした。だがいつになつたらこの約束を果せることか——たとえ東京に歸つても、子供たちの望んだ靴や帽子が入手出来るかどうか——

芋の話が泡盛にまで進展し過ぎたようだが、これは、上陸以來、宮古島の兵隊の生活が終始一貫芋と深い連繫を持つ確實な證左にもなるであらう。

沖繩本島の攻防戦が始まつて、宮古島へは近い臺灣からでさえ食糧の補給が出来なくなつてから、あわてて「自活」ということがやかましくなつた。中隊單位で、自ら食うだけを生産して自活しよう、というのである。いつまでこの孤島に立て籠らなければならぬか分らぬ。——沖繩本島のあとはこの宮古にも敵は上陸して來るに違ひない——そうなると思はなくては戦にならぬ

というわけで、急に「自活作業」がやかましくなつたのである。

自活を負擔した工准尉は、點呼のあとで自活作業の重要性を熱心に説いて、

「お前たちは、陣地作業と同じ熱意をもつて、この自活作業に全力を擧げてくれ！」とも云つた。

この自活作業の主流をなすものは、勿論芋の栽培であつたが、次々とビタミン缺乏で斃れる兵隊のために野菜も加味された。

「この貴重な野菜の種子は、特攻輸送を以てこの島に届けられたものであることを、お前たちはしつかり心に銘じておけ！」とも云われた。

何と云つても、飢えていた兵隊たちには、役に立つかどうか分らぬ穴を掘つて、陣地だ陣地だと騒がれるよりは、「お前たちの食いものを作るのだ」と云われた方が働きがいを感じた。

民家の畑は徵發されて、芋が植えられた。

こうして用意周到に兵隊たちの腹を満たしてくれるために準備された自活作業であつたが、中隊の芋が實つて、兵隊の口にはいつたのは、残念ながら日本がボツダム宣言を受諾してからだつた。

兵隊たちは、終戦を聞かされる前の最も苦しい間中、芋はおろかその葉つばさえも個人では公然とは食えず、「ああ、芋が食いたい」と悲痛な聲を残して死んで行つた戦友さえあつた。

鏡方原の陸軍病院で、同室の兵隊が死んだ時だつた。全然部隊も違ふし、私も未だマリアアの熱で苦しんでいた時だつたので、全然言葉を交したことの無い兵隊だつたが、彼の遺品の中に小さいノートがあつたのを、同室の戦友があずかつていた。

「こんなことが書いてあるぜ」と、その戦友は朗らかに読みあげてくれたのである。

三月〇日

食いたいのもの。かきフライ、えびの天ぷら、すし、すき焼にねぎと豆腐を入れて――

三月〇日

今日は無性に支那料理を思い出す。ごて〜と油のういたあの支那料理を――

三月〇日

家に歸つた夢を見た。母が芋のきんとんを作つてくれた。

そうだ、芋を腹いっぱい食いたい。

「なんだ、食うことばつかしじやないか」と誰かが云つた。

「その次を讀めよ」と他の一人が催促した。するとノートをあずかつた戦友は「これが最後だよ」と明るい調子で答えたのである。

私はだまつて、毛布を頭からかぶつてしまつた。

マ
ラ
リ
ア

満洲から愈々出動すると云う時、いかめしい軍装の中に防蚊覆面と防蚊手套——何れも正規の軍隊用語ですぞ——と稱する奇怪なしろものがまじつて渡された。

「こいつあ一體何だ!? 魔除けかい?」まことに無恰好な二つの防蚊用具を手にとつて、私たちは笑い合つたものだつたが、宮古島に上陸すると早速最初の夜から、私たちは日本陸軍の深慮?に舌を卷いた。圓筒になつた丁度つるし提灯みたいな蚊帳と、劍道の小手みたいな恰好の手套で、これを身につけると、假裝行列に出てくる人造人間そっくりの愛嬌のある風采が出来上る。

分隊毎に、大きい蚊帳に入つて寝に就くが、不寝番などで單獨行動をとらされる場合には、この防蚊用具が絶対必需品になる。

「蚊にさされるな、マラリアになるぞ」

夕方になると必ずそう注意された。不寝番の申し送り事項の中には、「防蚊覆盖面・手套をつけること」と云う一項が必ずつけ加えられた。

「防瘡」と云う難かしい言葉を教えられる頃には中隊の戦友が既に二、三マラリアの疑いで寝ていた。

「南方作戦では防瘡は第一の条件である。今後お前たちの嚴守すべきことを教えておく！」と點呼の時に云われた時、私は何のことか分らなかつた。その時に教えられた内容が、(1) 午後四時以後は作業中と雖も繻絆を着用し、袖をのばすこと(2) 夜の點呼後は、蚊帳をつる前に幕舎の蚊いぶしをすること(3) 不寝番は覆面と手套をなすこと等々だつたので、「防瘡とはどうやらマラリアにかからぬようにすること」らしいと考えた。

激しい飛行場作業が終つてから、中隊の作業の中に防瘡作業というのが加わつた。私は一度だ

けこの難かしい作業にふりあてられたことがあつたが、行つて見ると至極のんきだつた。各中隊から五、六名ずつ出て来た兵隊たちが一團になつて溝掘りをやるのである。

その後錬成隊に入つたときマラリアの話聞いたが、感じのいい衛生曹長の名塚が「防瘧には土木技師が必要だ」といつた言葉が實にピンと来たことがある。蚊の発生を防ぐために、水溜りをなくすれば、マラリアは撲滅出来るわけである。

だが實際は、理論とははるかに遠かつた。兵隊はつぎ／＼とマラリアにたおれた。私は宮古に來て三カ月目の十月中頃、工兵隊の援助作業で海岸に大きな洞窟を掘つてゐる時に、急激な悪寒に襲われてマラリア患者の仲間入りをした。作業場から中隊の幕舎までの約四軒ばかりの路を夢の様な氣持で、五十米毎に草の上に腰をおろしたりして歸つたことがある。四軒の道に三時間餘りかかつた。中隊で檢温器をはさんだら、四十度七分の熱だつた。

治療には「硫規」と呼ぶ錠劑を與えられるだけで、あとは熱にうなされながら、寝ている以外には處置がない。そんな時によく、たわいのない夢を見た。滿洲に残した子供が宮古の洞窟の中で遊んでいた、妻がひよつこり枕もとに天ぶらを運んで來たり、中學校時代の友人と一緒にカフェーでビールを飲みながら、そのテーブルの上に蛇を焼いたつまみものがあつたりした。

マラリアのあとは、體力の恢復するまで二、三カ月は休養をとらねばならぬというのが、醫學上の定説であることも、鍊成隊で聞いたが、實際にはそんな贅澤は戦争中の軍隊では許されないのが普通だつた。幸に私のマラリア就寝中に、我々の豊五六二三部隊に鍊成隊が創設されたので、私はそこで體力恢復をはかり「弱兵から健兵へ」の道を歩む好機に恵まれた。私の鍊成隊生活は一月から二月中旬までで、この一カ月半が、私の宮古島生活で最も幸福な時代だつた。隊長の玉木中尉と、前述の衛生曹長名塚、それに私たちの班長になつた召集兵の鐵指伍長が揃つて私には好感が持てた。私の中隊では隊長以下どうしても親しめなかつた上官ばかりが揃つていたのに、鍊成隊では短い期間に、忘れられぬ上官を三人も持ち得たのである。みんな鍊成隊の事業に熱意を持つていた。それは小さい施設の上にも現われて私たちは乾草をふんわりつめた布団の上で寝ることも出来たし、上陸以來味わつたことのない入浴のすが／＼しさも満足することが出来た。名塚は、夜中によく廻つて来ては有熱患者をみたり、蚊帳からなげ出された兵隊の足を靜かにおしこんでくれたりした。朝必ず齒をみがき顔を洗うことを日課にしてくれたのも、宮古ではこの一カ月半だけだつた。

「アノフェレス」と云うマラリア菌をばらまく蚊の名前や特徴も、錬成隊で教えられた。この島の地圖を示しながら名塚は「マラリア地帯は島の地名で大體判別出来る。底原だとか山田とか云う凹地で水のたまりそうな地名は警戒を要する」と、なか／＼いいことも教えてくれた。

その底原や山田、更にこの島で一ばん大きな密林をなしている大野山林の中に、私の八中隊は次々と幕舎を移動しては障地を作つてまわつたのであるから、如何に形式をやかましく云われても、兵隊は「アノフェレス蚊」の襲撃をまぬがれることは出来なかつた。上陸後半年もたつた頃には、中隊でマラリアの経験を持たぬものは隊長と二三の兵隊だけになつていた。そのマラリアは「三日熱」と「熱帯熱」とに大別されていた。私は血液検査で「熱帯熱」の宣告を受けたが、これはちよい／＼熱を出してたちが悪いとされていた。確かに私はちよい／＼發熱に苦しんだ。だから分隊長からも「貴様は役に立たん」とあつさり弱兵あつかひされていた。私は學校での劣等生の心境をしみ／＼味わつた。いつも陰にかくれて、なるべく先生の眼にとまらぬようにだけ氣をくばる引込思案で姑息な生徒の氣持である。

激しい陣地作業の最中に、晝時になると「飯あげ」を命じられて、戦友の飯盒を集めて中隊の炊事場まで飯をとりに行くような安易な仕事で、大てい私に命じられたのもその爲だつた。

私は積極的に力強く働くことも出来なかつたかわりに、あまり悪いことも出来なかつた。「飯上げ」の歸りに戦友の飯のうまえをはねて、腹を満たすような、その頃の兵隊たちの常識的な悪事さえ、私にはどうも出来兼ねた。それが、弱兵をもつて自他ともに許した私のたつた一つの良心であつたかも知らない。

中隊の兵隊で、こんな風な弱い老兵の私に、顔を見る度に温かい思いやりを示してくれる若い戦友が二人居た。二人とも私と同じ初年兵だつたがどちらも優秀で一選の上等兵になつていた。一人は前にも出たが満鐵社員の山本で、もう一人は湯河原の温泉宿にいたという渡邊だつた。

「おい大丈夫かい？」

「氣をつけろよ！」

作業の合間や點呼の時などに、一寸顔を見るとそんな言葉をなげかけてくれた。たつたそれだけが、劣等生のこの老兵の心には、ジーンとしみこんで来る温かさに感じられた。

他の總ての兵隊が、みんな飢えや疲労に原因されてゐるとは云え、我利々々でいがみ合つていた空氣の中では、人の情は魂の髓に觸れる思ひであつた。

「おい食えよ」そう云つて黒砂糖のかけらを、マラリアの餘後で休んでる私に投げしてくれたの

は山本だつたし、小隊長の當番をしていた渡邊は、小隊長用の特別食としてふかした飯盒の芋を私にわけてくれたこともあつた。

マラリア豫防のために、私たちは中隊の周囲の藪を焼きはらつたこともある。蚊の撲滅を期したのである。點呼の時に「キニーネ」の錠劑を配つてもらつて連服したこともあつた。

だがマラリアの爲に兵隊は次々と斃れた。終戦になつてから、米機がすばらしい低空を飛んだことがある。それが煙の様に「D・D・T」の尾を曳きながら、蚊や蠅の征伐をやつたのを目撃した時には、敵を知らずに戦つたことの愚をはつきり見せつけられたような氣がした。

敵

私は宮古島で二度だけ、はつきり敵を意識した。

それは、決してはげしい空爆にさらされて私の近くに大きな爆弾の穴があけられた時でもなけ

れば、沖繩本島が陥ちて神経質になつた上官から、次のようなへんてこな呪文を強いられた時でもない。

考えるとおかしな話だが、「今に敵が上陸して来るぞ」とさかんに緊張させられた空気の中で、兵隊たちはその決意を表明するために、毎日の點呼用として一つの文句を暗誦させられたのである。

- 一、我ハ陛下ノ股肱ナリ
- 一、我ハ必ズ十敵一戰車ヲ擊滅ス
- 一、我ハ水際ノ陣地ヲ死守ス
- 一、我ハ中隊一ノ勇者ナリ
- 一、サア來イ米敵早ク來イ

點呼の最後に或いは指名されて一人で、或いは一齊に口を揃えて、兵隊はこの五項目を高唱する。時には、順番を間違えて週番士官からひどくお叱りを受ける兵隊もあつた。兵隊たちは機械的に「サア來イ米敵早ク來イ」と大聲をあげながら、夕飯の量を気にしていた。

雨の夜に、する／＼とすべる山路を歩いて陣地作業に向いながら、

「一尺でも一寸でも壕を深く掘つておかないと、今に敵が来るんだぞ」とどなられても、私はどうも敵をはつきり意識出来なかつた。その私が、はつきり敵を意識した二つの場合——その一つは飛行場設営作業が終つて間もない十月十七日の朝で、他の一つは沖繩戦の最中にその餘波をくつて思いがけぬ艦砲射撃の音を聞いた時だつた。

十月十六日の夜半、私たちは疲れきつた體をたたき起こされた。何のことかわけのわからぬままに、武装して整列させられた時、隊長のSがやつて来て、

「中隊は海軍飛行場に向つて直ちに前進する！」

と叫んで劍を抜いた。どうもはつきりしなかつた。はつきりしないまま、暗い泥濘をがむしやらにいそいで千米も歩いた頃だつたらう。全員停止を命ぜられた私たちの前に、猛烈なスピードで姿を現わした一頭の馬があつた。そして馬上から闇を通して血をしぼるような大隊長中島の聲が流れて來た。

「今次の空中戦は、帝國の存亡に關わるものである！」

友軍機の航空にいささかの支障なからしむることがお前たちの任務である！

敵弾によつて滑走路に穴があいたら、身を以て之を守れ。埋むべき土がなければ、お前たち

の五體を以て穴をうすめろつ！ 滑走路を死守して友軍機を飛ばすんだぞ！ いいか！！

行つてくれつ!!! 命により大隊長は残るがあとから行く!! 必ず!!!」

齒切れのいい言葉だつた。中島の姿はまだ夜のとばりに包まれて全然見えなかつたが、彼の言葉とその調子とで、彼の泣いている表情がはつきり分つた。私ははじめてその日の任務を知り、身のひきしまるものを覺えた。本當の緊張が身内から湧いて來るのを感じた。

だが、この戦いは實際には、私に敵の影さえ見せてはくれなかつた。あとで「臺灣沖航空戦」に赫々たる戦果を挙げたということだけを報らされたが、私は海軍飛行場の片隅で、膚寒い一夜を過しただけの自分を、何だか物足りなく感ぜざるを得なかつた。

翌年の五月四日、宮古島は初めて艦砲射撃を受けた。

鏡ガ原の裏山で、沖繩本島の熾烈な戦いに就いて谷田部と話している時だつた。敵機も飛んでいないのに大きな爆發の音響を耳にして、私と谷田部は思はず顔を見合した。

間もなく、遠くで「艦砲射撃だあ——」と叫ぶ戦友の聲がした。戦友が一人私たちの横を走つて行つた。あわててついて行く氣にもなれず、私と谷田部はだまつたまま山の頂の方に歩いて行つた。戦友が十名餘り松の木の間から伊良部島の方を指さしていた。口々に何かあわただしい調

子でしゃべっていた。

遙か伊良部島の方に、見馴れない軍艦が六隻並んでいるのがはつきり見えた。

「おい！」と谷田部がふりむいた。

「ほんとうに來たなあ」と私は應えた。二人とも特に落着かぬ様子も感じなかつた。敵は上陸の前には必ず艦砲射撃によつて島をたたくというのが、その頃私たちの頭にしみついていたので、私たちは當然、上陸して來る敵を豫感した。愈々敵が上陸する！

「そうか、愈々來るか」谷田部もそんなことを繰り返かえた。「敵が上陸して來たらやるさ」そう云つて二人で顔を見合した時には、どつちもかすかに微笑んでいた。私はふつと「死」という言葉が出かけたのをおさえた。

だが、艦砲射撃は三十分位であつさり軍艦の姿と共に絶えた。通りがかりに一寸悪戯をした程度のものでつたが、これが宮古への最初で最後の艦砲射撃だつた。然し、この三十分は私の宮古島生活では精神的に最も緊張した時だつたかも知れない。これ程はつきり敵を感じたことはなかつたからである。

私は、私の案外鈍感な神経に安心した。この調子だと、私はきつととり亂したりせず死ねる

わいとも思つた。

終戦を聞く

—— 老父に宛てて書く ——

父上——

「わしは死なない、この戦争の結末を見届けるまではどうしても死ねない」と口ぐせのように云つて居られた父上——。

この二三日、父上はどんな心境で居られるでしょうか。それを思うことが、今の私には一ばんつらいのです。八月十七日午後、湯わかし當番という任務を與えられて、掘立小屋の中でドラム罐の下に松の小枝を燃していた私は、非常召集の命を受けました。もうこの一週間程、ほとんど敵機の影を見なかつた時でしたから、私は不思議がりながら、中隊の點呼場に急ぎました。

何かしら不吉の豫感がしないでもなかつたのですが、「よもや！」と心に否定しながら、かけ足をしました。私は手製の草履をはいていたのですが、雨あがりの泥に重くなつた草履が、ブツン

と切れて、やむなくはだしのままで整列しました。隊長のS中尉が、いつもに似ぬ沈んだ顔で、「隊長には全く信じられないことをお前たちに傳達しなければならぬ」と前提して、大命により戦争は終結した旨を語りました。そして「終戦の大詔」を拜聴して、私は今私の仕事場に歸つたところです。ドラム罐の下に紅い炎が燃えさかっています。

父上――

日本は敗れました。神國日本が負けたのです。父上はどこでどんな氣持でこの終戦の大詔を聞かれたでしょうか。西南の役以來、日清・日露・滿洲事變から太平洋戦争と、日本の戦争發展史を身をもつて感じて來られた父上は、いつも世界に君臨する祖國日本を夢見て居られました。大東亞戦争の緒戦に赫々たる皇軍の戦果を知らされた時、父上は「永生きをしたかいがあるわい」と鼻ひげをビク／＼させて居られました。その後戦争の前途に一抹の暗翳がただよい、私が私の仕事の一部分として知り得る悲觀的な材料などをほめかして、父上の戦争禮讚に横槍を入れたりしたこともあつたのですが、父上は昂然として息子のいたらなさをたしなめたものです。私は父上の「必勝論」に何とかして同意するためには「特攻精神」と「神風」とを頼りにするより仕方なかつたことを思い出します。

父上——

八十四歳まで生き伸びて、祖國の全盛を見届けるかわりに、又もとの木阿彌にかえらされる日本
本の現實を直視して居られるであろう父上——

私はドラム罐の下に、やけに松の青葉をたたきこんでいます。もや／＼と煙が立ちこめて、私
の眼に鼻に、痛い程の強い刺戟をおしこんで來ます。

父上——

私は昨夜、屍衛兵という役目で、夜半の一時から三時まで燃えさかる戦友の死骸を見守りまし
た。大野山林の一隅で、じつと凝視めた戦友の焼けて行く姿は私の心を嚴肅に緊張させました。
瘦せ細つた病友でしたが、松の樹を積み重ねて少量のガソリンをふりかけて焼かれたその死骸
は、勢よく火をふくのでした。私はゆうべのあの炎を想い浮べながら「誰が一體、本當の幸福者
だらう？」と考えています。

父上——

私には未だ、敗戦と云う現實が少しもピンと來ません。

「一體、戦に敗れた日本はどうなるだろうか？」そんなことを突つ込んで考える餘裕を持ちません。

そして、(こんなことを云うと父上は、ふがいない息子だと歎かれるかも知りませんが) 今私を支配している感情は、全く「ほつとした」様な力の抜けたもので一ぱいです。「ほつとした」全くそうです。勝つたとか、負けたとかではなくて「ああ、終つた」と云う氣持だけです。

これはきつと、私が直接敵と弾丸をうち合つた經驗を持たないからでしょう。既に終戦の大詔は二日前に煥發されていたにも拘わらず、さつきそれを知らされるまでは、この島の生活の中には何らの變化も意識出来なかつたのです。敗戦を聞いてから急にあたりの風景や上官の姿がしょんぼり見え出した様な氣はしますが、實際にはこの宮古島では何等の變りもありません。負けることによつて、日本人の總てが生存權を奪われるように云われて來ましたが、よもやそんなこともないでしょう。

とまれ、私は今はつきり「生き残つた」ことを感じます。「生き残つてよかつたか、悪かつたか？」それは別問題です。生きる爲にあらゆる努力を續けて來た、今までの島のくらしをぼんやり思い浮べるだけです。

父上――

この一年間に、私は蛇を食うことまで覚えました。本能的な生への努力だったのでしよう。蛇をとつて皮をむいて、その内臓までも平気でむさぼつた私です。バッタを追い、かたつむりを探し、蛙を焼いたのも、みんな食う爲でした。そして生きるためでした。それが終つたのです。

父上――

父上はきつと祖國日本の大きな後退をなげいて居られるに違いありません。そして「永生きしてひどい目にあつた！」と後悔されて居られるかも知れません。八紘一字の理想を達成して世界に君臨する日本を描いて居られた父上が、あまりにも早く、その反對の結末をみせつけられたことを私は心から悲しみます。

私には、今そのことだけが悲しいような氣がします。日本が敗れたと云うことよりも、敗戦を聞いて涙を流されている八十四の父上を想うことの方が、今の私には悲しみなのです。

今から極めて近い將來に、私の身の上にも具體的に、敗戦の鞭が加えられるに相違ありません。それがどんなかたちで現われて来るか、今の私には想像出来ません。それによつて私は改め

て日本のために敗戦を悲しむ立場におかれるだろうと思います。

父上――

南海の孤島で、ただに苦しみ抜いた私は、その報酬として今敗戦を聞かされました。私は唯啞然と「空」になつています。私はぼんやりと掘立小屋の中にうずくまつて、燃え上る炎の色を凝視めています。

昭和二十年八月十七日

星のある夜空

終戦の大詔を聞いてから三カ月餘り経っていた。この三カ月間は、さすがに戦時中とは違つたものが醸し出されていた。兵器返納と呼んで、實は我々の武装も米軍の命によつて既に解除されていた。命より大事に扱うようにしつけられて来た小銃の菊の御紋章をけずらされた時は、やっぱり兵隊の感慨がこみあげて来たこともある。

その頃戦友の一部には埠頭作業と稱して、米軍の指揮の下に、各部隊から集積された兵器を海に棄てる仕事をしているものも居た。機銃も小銃も帯剣も被甲も、鐵帽も彈藥も我々の手によつて沖に運ばれ、波の中にほうりこまねばならなかつたのだ。

更に大隊の企畫で農業の講義も開催されていた。歸國すれば、みんな土に根を下して祖國の再建に邁進しなければならぬと云う、大隊長中島の意圖の具體化されたもので、農學校出身の玉中尉が、あまり要領のよくない農業の連續講座をひらいて兵隊たちを居眠りさした。

そうした終戦以後の風景の中には、當然戦争中の反動が惹起した。

——七中隊では隊長が袋だたきにあつた

——機關銃中隊では、兵隊が結束して〇〇軍曹をたたきのめした

そんな噂がどこからともなく耳にはいつた。随つて中隊の風紀や秩序に責任を持つI准尉は、さかんに氣をくばつて、「事故の絶滅」を強調した。そして兵隊たちの心を和らげる手段として演藝會を開いたり、その頃實を結んだ自活作業の收穫で飯盒に山盛りの芋を食わしたりした。ぼつぼつ臺灣から歸つて來たと云う島人がふえて、臺灣産の煙草が一本四圓の闇値で兵隊たちの心を誘惑した。敏捷な兵隊は、糧秣監視の衛兵に出たのを利用しては米俵や砂糖俵を賣り飛ばして、

闇の煙草をブカ〜とふかした。

そんな一夜、私は軍醫の馬場大尉と話したことがある。

馬場は本来は大隊づきの醫官だったが、私の中隊の隊長Sと同期で、気が合うらしく、ずつと私の中隊に居候していた。馬場とSとがどうして仲がよいのか、兵隊の立場から見ると納得出来なかつた。それ程に馬場はおつとりした所謂いい男だつたが、Sは膽の小つちやい度胸のないお粗末な隊長に見えた。案外、兵隊が期待する隊長としての資格の缺除が、人間性を貧弱に見せる大きな原因だつたのであろう。だとすれば、Sのためには氣の毒な話で、隊長などという地位を與えた日本軍隊が責任をとるべきであるが………。

馬場はドラム罐の風呂にふか〜と肩までしたつていた。

——いい風呂だなあ

そういつて馬場は、ドラム罐の下にうすくまつて薪をくべている、入浴當番の一等兵の私に話しかけた。

——どうだい？ 兵隊の感想は？

随分苦勞したなあ。

— はつ！

— もうどうやら終りさ。郷里はどこだい？

— 本籍は大分です。然し自分の故郷は満洲といたいのですが。

— 満洲か？ 満洲もとられたなあ。

— 家族も満洲か？

— そうです。自分は、自分の總てを満洲にうちこんで來ました。

— そうか……お互いにやり直しだなあ。

— 軍醫殿はどちらですか。

— 俺か、俺は福井だが、今度は田舎で百姓でもやりたいと思つてる。醫者は副業にしたいのだ。

— 私は、ドラム罐の下に松の幹を一本おしこんだ。紅い炎が氣持よくあがつた。

— 湯加減は如何ですか？

— ううん、丁度いい。ドラム罐の風呂もあと暫くだなあ——

— はあ、歸つて故郷の温泉にしたる夢が、いつか實現してくれるでしょう。

——温泉はいいなあ。その時は俺が背中を流してやるよ……

——よくも生き残つて來たと、この頃時々考えます。

——そうだなあ、中隊でも大分死んだなあ……

——この前數えた時に二十九名でした。

そう云つて私は夜空を仰いだ。澄みきつた星が無數に輝いていた。そしてその時ふつと私の頭をかすめた戦友の顔があつた。日根だつた。私よりは三つ年長で、私よりは更に更に老兵だつた彼は新京の三菱支店で參事として縦横に腕をふるつた曾つての面影などはどこにもなく、榮養失調でしなびるように死んで行つたのだ。

あまり話したこともない男だつたが、妻と死に別れて一人の息子を大連の親戚にあずけて來たことを聞いたことがあつた。

——これからは仲良くやろうなあ。

頭の上のドラム罐の中から、馬場の聲がした。

その翌日、中隊では、二十九の遺骨を並べて、ささやかな慰靈祭が行われた。よく古年兵から

なぐられたことのある點呼場で——。
これが中隊としての宮古島での最後の行事だつた。

第二篇 鐵柵の生活



船 上

昭和二十一年一月一日、アメリカ船ノリス號は、南海の小島沖繩の西海岸に、その船脚をとめた。甲板には、きたなく疲れきつた一群の人像が、ものにおびえたような表情で、凝乎と、何かを凝視していた。

故國へ歸れる！ たとえ敗戦にごつたがえしているにしても、「日本の土」を踏めるんだ！ と心を躍らして宮古島から乗船した私も、その中の一人であつた。

甲板ではいろ／＼のデマが飛んだ。

「俺たちはここで米軍の捕虜になつて、酷使されるんだ」

「米軍は沖繩を第二のハワイにする。その土木事業をやらされるのだ」

「こここの要塞構築が終つたら、俺たちは、みんな原子爆弾のテストに使われるそつだ」

ころした悲觀説が、おびえた人々の間から湧くかと思ふと、一方では――

「なあに、米軍はここで日本の軍人にデモクラシーの教育をやるんだそうだ」

「船の二世が云つてたぜ、沖繩は米軍上陸後やつと一年しか経たないのに、日本だつたら三十年かかる大建設をやつてのけたそうだ――それを見せるんだよ」

「いや我々を映畫のエキストラに使うんだ。捕虜のニュースを撮つて、アメリカで宣傳するんだ」

「毎日うんとうまいものを食わせて、日本人をアメリカびいきにさせるんだ。そして米ソ戦争に日本の兵隊を動員するんだ」

といつた話が出る。

喧騒の話題の中で、私は唯「ああ又、宮古の軍隊生活がここまで続けさせられるのか――」と深いためいきをついていた。

宮古を發つ時に、將校と下士官は我々の團體から隔離されていたが、それでも未だ古年兵という一連の虫の好かぬ連中が、この船に行を共にしている。彼等と一緒に生活が、たとえ米軍の支配下に於てとは云え、この上強いられるかと思ふと、私は眞直日本に上陸出来ない悲しさをつく

づく思つたのである。

私たちは沖繩沖に停船してから、三日二晩、ノリス號の船倉に起居した。そして、その貨物船の船倉での迎春という、私にとつては正しく劃期的な正月を迎えたのである。正月の感傷が、誰にも雑煮を思い出さした。然し我々はこの船倉で、雑煮にこそめぐまれなかつたが、およそこの一年半の宮古島の戰場生活では、想像もしなかつたトルーマン給與にあずかつていた。

「C」レーション、それが我々の正月の給與だつた。「C」レーションと云う名前も、その後、上陸して覺えたのであるが、船倉で我々に與えられたこの米軍の罐詰は、所謂米軍の野戦用のもので、小さいミルク罐大のものが二つで一組になつてゐる。一つの軽いやつには、ビスケット、チョコレート、コーヒル、角砂糖、アメダマなどがつまつて居り、重いやつには、二三種變つたのがあつて「ハム・エグス」だの「スパケチー」だの「ミート・アンド・ヴェジタブル」などと書かれてあつた。

宮古島で芋ばかり食つて生き伸びて來た我々は、始めてこれを食べたとたんに、「ああー」と誰かが嘆聲をあげた。あまりに簡単に一年半の願望がかなえられ過ぎて、あつけにとられたのであ

る。ブーンと香りの高いコーヒーを飲んでみたいと夢の様に思っていた私も、「C」レーションにはいつているコーヒーが戦争中新京のどこでも味わえなかつた馥郁たる芳香を放つてくれるのに「がつかり」した。思わず「ああ、ヤマトホテルだ」と叫んだ程だつた。

野戦での食糧といえは、乾パンを水と一緒にかじることしか知らなかつたのだから、「がつかり」するのも當然である。

私たちは、毎食分配されるこの「C」レーションに、あくことを知らず喜び合つた。そして、兵隊の中には既に、もうそれだけの理由で何となくアメリカに對して今までとは違つた親しみさえ口に出すものもいた。

船のデッキから望む沖繩の夜景は、何だか想像のつかぬ風景だつた。晝の間は、白くむき出しになつた山肌を指さして、「艦砲射撃でやられたんだな、ひどいなあ」と云つて話し合う普通の戦跡に過ぎなかつたが、一たん夜となるとまるで神戸か横濱の夜景を沖から眺めている様な錯覺に陥らされてしまうのだ。

船から望む島全體が、明るい電燈にかがやいているのである。一體沖繩はどうなつてるのか？

誰もが唯驚異にだまりこんでいた。

宮古島では、電燈どころか、蠟燭も時々思い出した様に、小隊に一本ずつ分配される、灯のない生活を續けて來た我々である。島全部が不夜城に見える眼前の沖繩は、それが一年半前に一寸立ち寄つたかすかな記憶が残つていただけに、全く想像に難い風景である。

一年半、そうだ、あの時の那覇は質朴な南國の船着場として、私の印象に未だはつきり残つてゐるのに――。

何か、今から後、我々の上に覆いかぶさつて來る米軍の下での生活が、兵隊としての私の常識では諒解出來ず、暗い想いが胸一ぱいにこみあげて來るのをどうすることも出來なかつた。

僅か半歳前に、祖國の運命をはつきりと決した血戰の島、沖繩！

映畫のスクリーンのように今眼前に展がる夜の風景と、決戰場としての沖繩とは、どうしても私の頭では連繫出來ない。

そうした感慨を内に秘めた私たちの船の上でのいでたちをふりかえつて見る――。

一年有半の宮古島生活を泥と汗にまみれて、本當に一張羅で着くすした軍衣は、いたましくふ

せをあてられ、軍靴には大きな膏藥をはりつけ、ぼろ／＼の巻脚絆はふさをたらしているのだ。

すつと乞食のような餓えた生活を續けたおかげで心までいたましくおちぶれ果てて、何等の精彩もないどころか、いたみつけられたその名残りは、ものにおびえたように卑屈になつてゐる。

唯魂のどこかの隅つこに、「畜生！ 何とかしてこの大きなマイナスをとりもどしてやらすにすむもんか！」

といつた反抗の面魂が陰險に萌芽しているのである。

終戦後復員の準備として作らされた、べらぼうに大きな袋には、誰も彼もが慾張つて、きたない日本軍隊の使い古しの殘滓を藏いこんで所持している。

例えば、汚れ果てた毛布だの、縋絆袴下だの靴下だのの被服類や、残りものの米や砂糖を手製の布袋に包みこんでいるのであるが、一寸要領のいい古年兵たちは、經理室とやらから、未だ新品の被服をせしめて來たり、規定以上の糧秣をふんだくつて來て、その横暴ぶりを遺憾なく發揮しているのだ。船倉にはそうした復員荷物が山積されているのだが、宮古島で必要以上に權力を振つた古年兵たちは、いじめつけた部下の兵隊から「ようし、船に乗つたら反動をとつてやる」とにらまれていてびく／＼している者も居た。

力のないものの反動は、陰險である。慾深い古年兵が虎の子のようにしている一装の編上靴を海の中にほろりこんでやるとか、苦しい兵隊生活の代償に苦勞して入手して持ち歸ろうとしている新品の襦袢などをひつこ抜いて海にたたきつけてやろうといった隠謀である。

戦争に敗けて、軍隊もくそもあつたもんか、という兵隊たちの心の底とは別に、何とか表面だけは秩序を保つて軍規嚴正な團體行動をとらせ、同時に自己保身に役立たせようと、上官たちは躍起だつた。よく考えると本當に四六時中寢食を共にし、命をかけて一年半以上も一緒に過して來たもの同志が（特別の心の交わりを持つたものは別として）今度こそ思いきり復讐してやる！と反目し合うなんて、恐らく人間のまともな生活ではあり得ない。

インチキのかたまり——形式だけの權限と命令だけで繋つて來た日本軍隊の弱點を、はつきり暴露しているのである。

こうした日本軍隊の形骸が、米船ノース號の甲板と船倉に充滿して、あれこれと思ひ思ひの憂鬱を、變り果てた眼前の沖繩本島に向けている。

そしてそれ等の兵隊のからだには、一人のこらすむすくとシラミがうごめいていた。

一〇六

上 陸

近づいて来る異様な舟艇に——それが「L・S・T」と呼ばれる米軍の上陸用舟艇であることは後に知つたが——今後の豫想し難い運命を心もとなく感じながらしよんぼり乗り移つたのは正月三日の午後だつた。

「米軍は、俺たちの糧秣を全部引き上げるそうだ」

どこからともなく、そんな不安に満ちた聲があがつた。襤褸をまとひ、シラミの巣窟と化した兵隊のなれの果——しかも歸ろうと云う郷里には、家があるのか家族が生きているのか、のぞみを失つた兵隊に残されたたつた一つの命の綱、それは虫のついた少々の白米と、ポロポロにくだけた幾ばくかの乾パンとであつた。貴重品のようにそれを懐いて來た兵隊たちは、米軍が眞珠灣

の報復手段として、何をもつて我々に當つて來るか、小さい膽つたまをふるわしては、各々の不安を流言としてばらまくのである。

舟艇の機關室に頑張つてチューインガムを噛んでいるアメリカ兵が、誰の眼にも威嚇的に見えたらなかつた。

ノーリス號が錨を下した位置は、海岸から五百米も離れていたろうか。舟艇は、兵隊たちの心を全く無視して、至極簡単に、景氣のいい白波と共に砂濱に着いた。そこは、那覇の西北數軒の地點で、曾つてのすさまじい上陸攻防戦を偲ばせる風致で充たされていた。猛烈な砲火でうちひしがれた裏山を背景に、今は残骸と化した戦車や舟艇がぶざまに散亂している。

何か未だ血なまぐさいものを感じながら、私は深呼吸をして砂を踏んだ。「祖國日本の最後のあがきを、まぎろくと今この脚で踏みしめる」「これが、これが、忍従二九年の宮古生活の報酬なのか」「しかも、この土の上で、今から、我々に直接課せられるであろう、軍國日本への懲罰は？」

そうした感慨は、沖繩の一月の海風を殊に身にしませるのである。

砂濱にしよんぼりたたすんだ我々の一群を監視するために、いつの間にか、三名の米兵がつつたつていた。

のんきそうに小さい銃を肩にひっかけて煙草をふかしている。

「一體どこにつれて行くんだらう？」かなり永いこと砂にうすくまつていた我々の不安に、誰かが「トラックで迎えに来るそうだよ」と答えた。無理にこしらえた軽い聲で——。するとその周りから低い笑いが起つた。「冗談云うな、そんな馬鹿なことがあるか」といつた否定の笑い聲であつた。そして誰もが「この俘虜の大群をトラックなんかで運んでくれるわけがないじゃないか」と思いきつていた。それ程、みんな貧乏な日本軍人になりきつていたのである。

三時間も、そうしていたらうか。我々はけたたましいトラックの騒音にふりかえつた。凡そ三十臺もが、流れるように、我々の前に並んだ。運轉臺にはまつ黒い顔の人が極めてあたりまえの表情でやつぱりチューインガムを嚙んでいた。

「おい、本當にトラックで行くんだなあ」

誰もが狐につままれたような顔で、大事な背囊を捧げながら、トラックに乗つた。

トラックはすすばらしい舗装路に飛び出した。と、どうだろう！ 京濱道路か旅大道路（旅

順、大連間のドライブ・ウエー）みたいな舗道が、山を縫い、畑を横ぎつて、遙か彼方に通じているではないか。而も、丁度曾つての京濱道路のそのように、小型の乗用車や——小つほけな實用本位のジープ、それがすばらしくスマートに見えた——大型のトラック、時には大きなタンクを備えた超弩級のガソリン車などが、シュツ／＼とすれちがつて行く。

「すごいじゃないか」みんな心でそう思いながら、何も云わなかつた。トラックは超スピードだつた。この二年餘り、誰一人として味わつたことのないスピード感。それは凡ゆる文明と完全に絶縁されて來た人間に久々に蘇つた近代的な快感でもあつた。

本能的に感覺する爽快さが、身内から湧き上つて來るのであるが、誰も何とも云わなかつた。そして何かしら泣きたいような氣持だつた。愛する日本のために苦しみ抜き、そこでは夢でさえも味わうことの出来なかつたものを、簡単に實にあつさりと味わされた氣持の中には、口惜しいとか残念だとか云うような言葉では云い盡せないしんみりさが含まれている。

縦横にひろがつたドライブ道路の分岐點に立てられたM・Pのペンキの小屋がとも印象的だつた。外國映畫のスクリーンの中に飛びこんだような自らを、何かしらくすぐつたいようにも感

じた。随分永いこと走つたように思えた。沖繩本島はこんなに大きい島だつたらうか、と思えた程に――。

鐵柵

「石川俘虜收容所」――それが、宮古島から憔悴の身と心を運んで來た我々に與えられたその夜のねぐらだつた。

トラックが急にスピードを落して、グツとハンドルを横に切つた時、その場の風景が、トゲのある鐵條網に溢れているのを見て「ああ、やつぱり――」と私はがっかりした。

バラ線の柵は極めて嚴重で、その外形を見ただけで、今から始まろうとする我々の俘虜生活の内容がはつきり分つた様な氣がしたからである。二米位の高さで二重に張り廻らされた鐵條網の間には、更に丁寧に螺條のバラ線が敷き詰められてある。

「牢獄」——これは確かに牢獄である。完全に形式を完備した牢獄である。

日本の軍隊で経験した總ては、内容的には立派に牢獄的價値を包藏していたが、そこには牢獄としての形式が不足していた。今度こそ完全に備わつてゐる。私は私の過去に、二度程持つたことのある獄舎の感觸を思い出さずには居られなかつた。「二・二六事件」の時だつた。新京で大同學院に席をおいてた友人のMが容疑者としてひつぱられた。四週間位で出されたが、彼の女房が揃えてくれた襦袢や禪に、ささやかな食い物を風呂敷に包んで訪ねた新京の獄舎は實に寒々とした印象だつた。その後、太平洋戰爭華やかな頃、例の「ゾルゲ事件」で滿鐵調査部に左翼檢舉の大旋風が巻き起された時である。總帥尾崎秀實に私淑してゐた滿鐵調査員の中には幾人か私の親しい友人がまじつてゐた。尾崎秀實その人は、滿鐵弘報（それが私の仕事だつた）と滿鐵調査と云う業務の關係で、二三度會つたことがあるだけだが、尾崎さんの弟子の中には、同窓やら飲み友達やらと云つた關係の近しいものがあったのである。尾崎さんが、冷たく死の宣告を受けたあと（それは明らかに軍閥日本の犠牲であつたが）次々と、私の友人たちも呼び出しをくつて、そのまま歸つて來なかつた。旅順の憲兵隊獄舎に訪ねたWもその一人だつた。

家に残つてゐる愛妻が胸を病んでいて、夫をとられた心の痛みに病勢は日に日につゝのるといふ

筋書通りの悲劇の最中だつた。面會所で向い合つたWは、のびた髭にそのやつれを倍加させながら小さい聲で「日本は戦争に負けるぜ！」と繰り返かえした。そして彼の獄舎の生活を「俺は房舎の隅つこに張つたくもの巢をとつても愉しく眺めて暮してる」と話していた。

ああ、MもWも今はどこでどうしているやら――。

私は石川の鐵柵を凝視めながら、何だかもう闘志のなくなつた自分を思わざるを得なかつた。私は日本の永い軍隊生活に、心のありつたけをすり減らしていたのである。

翌朝の事、ごろ／＼とキャンバスの舎に一夜を明かした我々は、ぼんやりしていた。ここでは誰も「起床！」などとかん高い聲を出すものも居なかつた。日本の軍隊で聞き馴れた「起床！」と云う咆音は、實に兵隊たちにはぞつとするいやな響きである。

私は、ふつと幕舎を出た。と、鐵柵越しに我々とはすつかり服装の違つた日本人が、悠々と齒をみがいている。うすぎたない私自身のみなりに較べると、小ざつぱりしたスエーターをまとつたその男は、私にはどこかの山峽のキャンピングにでも來ている學生のように見えた。

「どこから來たんです？」突然、その男から柵越しに話しかけられて、私ははつとした。永い

こと聞いたことのなかつた軍隊以外の話の調子である。

「宮古から——ゆうべ着いたばかりです」

「そうですか、大變だつたでしょう」

「——」

「僕は（私は随分久しぶりに僕と云う言葉を聞いた）もう半年もここで暮しているんですが」

「半年も？」

「そうです。終戦一寸前にP・Wになつて——」

その男の語調は極めて普通であつた。その時の私にはP・Wと云う意味は決してはつきりはしなかつたが、それが米軍に捕われたのだらう位の想像はついたし、「終戦一寸前に」を淡々として云うこの日本人を、改めて見直したりした。そうした私の態度に氣づいた様子もなく、彼は齒磨粉で眞白くなつたものを口からプツとはき出して続けた。

「早く來ればよかつたですね、ここは日本の軍隊から思うと全く天國ですよ」

「えッ？」

「アメリカ人は人間を人間扱いしてくれますからねえ」

スエーターとズボンに大きくPとWの二字をしるしたその男は、まるで戦地から内地に歸つて來た兵隊をなぐさめる時の様な調子でそう答えた。それから私は、彼と三十分位立ち話をした。そして今日から始まろうとする、俘虜としての私自身の生活についての、豫備知識を得ることが出來た。

漠然としてではあつたが、この生活が、決して私の豫想していたような獄舎の囚人生活ではなさそうだと云う概念を興えられて、私にはどうもうなすけなかつた。

鐵柵越しに聞いた鐵柵生活が、案外「鐵柵のない生活」らしいと云うことは、日本の軍隊生活でかたくなに固まつて融通のきかなくなつた私の頭では諒解出來なかつたのである。

P
・
W

今か今かと復員船を待ちわびている宮古生活も終り近い頃だつた。全員集合を命ぜられて隊長のS大尉からわけの分らぬ話を聞いたことがある。彼は終戦後、終戦の前日の日附かなんかで、中尉から大尉に昇進して如何にも新しい三つ星のために威厳を保つように氣どつた調子でしゃべつた。

「恐らくお前たちの復員の日も遠くはない。然しながら特に誤解のないように——唯今から部隊長殿の注意事項を傳達しておく。

お前たちは捕虜ではない。帝國は、お前たちを捕虜としては取扱わないのである。然しこれは——このお前たちを捕虜として取扱わないのは、かしこくも——氣を付け！（彼はここで號令をかけた）

大元帥陛下の有難い大御心から出たものであつて、特別に米軍がお前たちを捕虜と見なさないと言明したのではない。

いいが！ お前たちは、米軍から捕虜に非ずと保證されたのではないのだ」

一年有餘を軍隊での家庭だと稱する中隊で、その家長だと自稱しながら、少しも本気で兵隊たちの心の中に飛びこんで來なかつた大尉である。兵隊たちから「あの隊長と心中が出来るかい！」といつも陰口を云われていた彼は、例の形式的な威嚴だけで、何とかして復員の日までの軍規を維持しようと、努力していた。若しその努力が不成功に終るようなことになる、彼は直ちに家族であるべき兵隊から鐵拳の復讐を受けなければならない。

そこで、彼は、部隊長注意事項の最後に、とつてつけたように、

「終戦にはなつたが、未だ日本の軍隊は解散したのではない。我々は最後まで、陛下の股肱としての本分を忘れてはならない。いやしくも軍規を紊すようなことがあれば、斷乎たる處置をとる！」

と威嚇的な自己保身論を述べて「終り！」と結んだ。

兵隊たちは解散を命ぜられたが「何だい？ 今の隊長の話は——」と雲をつかむような表情を

していた。その頃は、誰一人として、我々が沖繩本島につれて來られて俘虜生活をやらされるなどとは思つていなかったからである。

「捕虜」！ 何といまわしい響であることか。永い間軍國日本は人の世の最大の恥辱、罪惡として「捕虜」の文字を、日本人の骨の髓にまでたたきこんで來た。だからこそ「戰に敗れた！」と聞かされても「ああこれで助かつた」と心安いものさえ感じた兵隊たちも「貴様は捕虜になつたんだぞ」と云われては、猛烈な反逆の意を表明するのである。

私が、石川收容所で最初に逢つた男から「終戰直前にP・Wになつた」と聞かされて、微妙な心の動きを現わしたのも、そうした日本人的なわだかまりに原因されていたのは明らかである。

だが、私はその日の内に、極めてはつきりとP・Wの字義を知らされてしまつた。それは、誰かが拾つて來たアメリカのグラフ雑誌を見る機會を持つたからである。シャツとズボンに大きく「P・W」と記したナチス獨逸人の捕虜生活を、寫真入りで報道したそのグラフには、極めてはつきり「Prisoner of War」と云う文字が印刷されていた。「戰爭の囚人」か、これではどう善意に翻譯しても捕虜以外の何者でもない。

然しそれから五日間、我々宮古組は、豫期に反して全然米軍の重壓など感ずることなく、幕舎にごろ／＼して徒食させられた。時々柵向うの廣場でベースボールをやつてる米兵のはしやいだ。聲を耳にし、夕方一回だらしなく並んで、人員點檢（それは決して日本軍隊の點呼と云うような神がかりのへんてこなものでなく、必要から生じた員數の勘定だつた）を受ける時に見る米兵以外には、ほとんど米軍の存在をすら忘れさせられた程だつた。

従つて服装もよくれた宮古のそのまま、それに隣柵の沖繩組がやつてるように大きく「P・W」などと書くことも要求されなかつた。

「P・Wつてのは、捕虜のことだそうじやないか。おかしくつて、あんなことがでかかど書けるかい！」

そんな聲も耳にはいつた。

中には、

「アメリカは、終戦前に捕つた本當の捕虜と、終戦後に武装解除したものとを、はつきり分けるそうだ。沖繩でも終戦まで山の中で頑張つた者には、特別の待遇をしている」と云うようなデ

マを、まことしやかに傳えるものも居た。

みんな「俺は捕虜じゃないぞ！」日本は敗れたが、俺は違う！」俺は陛下の命令でおとなしく生き残つたのだ」と云う意味のことを無理に聲を出して話し合つていた。

どうしても捕虜という言葉は、兵隊たちの良心？にひつたりすぐわなかつたのである。

ところが四日目に施行された身上調査で、總てはあつさり取扱われ、それ以來特に聲に出して「捕虜論」を云うものは少なくなつた。

それはこうである——アメリカ生れの日本語の話せる二世たちがどつかと腰をおろしている前に順番に呼び出されて、年齢や家族のこと、宗教や教育程度など簡単な質問を受けたのだが、その身上調査の始まる以前に、通譯らしい男が椅子の上に立つて「一言御注意申上げます」と前提してしゃべり出したのである。彼は勿論P・Wの二字を體の前と後そして腕にまで派手に書き並べていた。

「我々は捕虜であります。我々は今後國際捕虜取扱規約によつて、待遇されるのであります。だから——眞面目な態度で質問に答えろだとか、相手に悪い感情をいだかせるなとか、決して僞名を使うなと云つた注意を、なか／＼能辯に聞かしてくれた。そして一人一枚ずつ「P・W

調査カード」といつた意味の見出しのついた紙片を渡してくれた。その紙片に、調査員の二世は横文字で次々と我々の答えたことを書きこんだ。

愈々調査テントの出口で

「君の捕虜番號！」そう云つて數字を書きこんで紙片を渡された。

私の紙片には下手な數字が「173900」と書かれてあつた。

私は實にはつきりと捕虜第一七三九〇〇號と云う代名詞を頂戴したのである。

小野山の一 夜

那覇の埠頭から千米ばかりの所に、入江に圍まれた小高い丘陵がある。老松に覆われたその丘は縣社護國神社の跡である。曾つては風光明媚な神苑であつたこと疑なしで、おそらく若い人人の愉しい夢をのせて、入江にはボートなど點々と浮んだに相違ない。この地區の名稱が小野山で

ある。

四十軒ばかり離れた石川から、この小野山に移つて來たのは正月七日だつた。

我々がこの小野山に幕舎を立てることによつて、沖繩に於ける日本軍のための第四俘虜收容所が成立したわけであるが、七日の夕方我々のトラックがこの丘陵の下の一吋した廣場に、エンジン止めた時には、例の嚴めしい鐵柵の圍いががっちり作られて、その柵の中にボツンと水槽タックが高く設備されただけだつた。

「おい、どうするんだらう？」

「こんな石ころの廣つばに寝せられるんかい？」

とみんなが不安がつてるところへ、「M・P」の腕章をつけて眞白いヘルメットをかぶつた若い米兵がぞろ／＼とやつて來た。

しきりに何か話しかける。

「おい、誰か英語の分るやつはいないか？」

會つての曹長で宮古からここまで我々の中隊長をやつて來た村山が大聲をあげている。

ぼんやり、夕陽の反射する入江風景に見入つていた私と福山のところに來て、古年兵の誰かが

云つた。

「お前たち、話せるだろう？」

福山と私は顔を見合せた。全く自信のない表情が眼と眼で何か語り合つた。

「駄目です」

然し、それから二分も後には、否應なしに、福山と私とは村山と一緒にM・Pの前に立たされていた。

はるか——本當に遙か昔のことである。學校の教室で英語というやつを教わり、試験のたびに苦しまされ、ロンドンつ子の人のいいヴェッセル講師の時間には、屢々失敬して席を外すか、そうでなければ後の方で芥川龍之介などを耽讀した私である。

「經濟」と「教育」を原書でやらされた時には、全くまいつたにがい經驗も持つている。

そこに行くと、福山は専門が科學であり、新京で地質調査所に席を置いた研究人としての生活だつたので、横文字は彼の社會生活にも從屬していた。にもかかわらず彼は「俺の英語は本だけだよ」と云うし、何といつても二カ年近くの兵隊生活で、英語どころか日本語さえまともには話す自信がなくなつていたのがその時の二人だつた。

だが事態は、そんなことを云つて餘裕を與えなかつた。若いM・Pは（それが私たちの直接接した最初の米兵であつたが）、極めて明朗な男で、盛んにゼスチュアアを混ぜながら話しかけて來るのである。福山と私とは、懸命に耳を傾けざるを得なかつた。

村山は村山で、一應その場のけりをつける責任者の立場から、一群のP・Wの噂や食事について必要な質問を、盛んに連發するのである。福山と私とは、或いは首をひねつたり、或いは相談し合つたり、或いは又六感を働かしたりして、世にも奇怪な通譯の役をつとめたわけである。

若いM・Pはその性格の明るさからであろう、いろ／＼の指示を與えるであろうとの豫想を裏切つて、

「お前たちは、どこから來た？」といつ捕虜になつたんだ？」「アメリカ兵を何人やつつけた？」といつた突飛な話題ばかり出す。専ら彼一個人の興味と好奇心である。だが、我々の懸念するその夜の噂や翌日からの食事、更に飲料水や作業などについての質問を、あやしげな單語の羅列で質問すると、彼はなか／＼熱心に説明してくれた。巧妙な手ぶりと表情とが彼の話を諒解する上に役立つて、我々の完全に近い程忘れ果てた英語の實力を助けてくれた。我々が斷片的に諒解出來たM・Pの話を綴り合はして村山に報告した内容は、

- 1 今から直ちに幕舎を建てること
 - 2 その天幕は既に用意出来ていること
 - 3 便所は未完成だが、穴だけは掘つてあるから、それ以外の場所をよごさないこと
 - 4 飲み水は、トラックで運んで来るが、明日までは間に合わせぬこと
 - 5 今後毎日、夕食には米のめしを食わすこと
 - 6 作業には二三日後から出されるであろうこと
 - 7 だが、その作業は決してひどいものではないこと
- 等であつた。

「我々はいつ頃歸國を許されるであらうか？」

という質問を出す時には、福山と私とで一應英作文をやつてからであり、相手の米兵が非常にフランクに明朝に話してくれるので、そうした質問を出しても日本の軍隊のように、ひどくおこられる懸念のないことを見てとつたからだつた。

だが、我々の一番切實なこの質問に對しては、その米兵は、

「僕は一兵隊だ。そんな問題については未だ何も知る機会を持たない」という意味のことを答

えたようであつた。

小野山での最初の寢に就いたのは、その夜もかなり更けてからだつた。幕舎の建設に時間をくつたからである。我々は砂と土ころの土間に毛布を敷いて、ともあれここでの第一夜を持つたがその時の我々の軍衣には未だムズ〜と宮古以來のシラミの運動は續いていた。

彈痕のある風景

小野山の一夜が明けた。南海の冬の風が爽やかな冷たさを感じさしてくれる朝だつた。

昨夜おそくまでかかつた急造の幕舎から、抜け出して觀た一帶の風景は、私の心にまぎ〜と現實の「日本の姿」を想わせるものがあつた。

丘の下と、その中腹に、未だ新しい鳥居が立つている。そして丘全體に、如何にも神苑にふさ

わしい老松が聳えているのであるが、その三分の二は完全にひきむしられて膚をむき出しにした幹だけで、中途からボキンとへし折られた大木さえあつた。大きな樹全體がまつかになつて、少しの緑さえとどめていないのは、恐らく火焰放射器か何かで眞紅の火をはいたのに違いない。

その日のうちに、私は、M・Pの幕舎を建築するための作業にひっぱり出されて、鐵柵の外に出た。つく／＼とその松の樹膚に觸れることが出来た。人間だつたら總身焼けただれて、見るかげもなくなつたであらうに、松は無数の彈痕と、火焰の跡をとどめながらも、だまつてつたつていた。

柵内から遠目に新しいものと見た鳥居も、近づいて見ると、決してそうではなかつた。「昭和十八年建之」と刻まれた文字の間にも機銃の彈痕がはつきりそれと分る様に散らばつていた。未だ建造されて新しいだけにその鳥居の純白な姿が、私には二十代で未亡人になつた綺麗なひとの喪服を聯想させた。

鳥居

一、ぼんやりと唯ぼんやりと

ふじざき・つづ

大きな圖體で

によつきりと

雨に打たれ風に吹かれ

ほこりを浴びて

それでも平氣な顔をして

動くことなく

歩こうともせず

別にくたびれた様子もなく

毎日毎晩

お前は何の用あつて

其處に立ちんぼするのか

二、お前は答えて云うであらう

「そうではない」と

私もそうは思わない

お前は何時も

何事かを考えている

だから私は

お前と話してみたい

そして何もかも知り盡しているであろう

お前に

いろ／＼な事を聞いてみたい

三、惨たんたる敗戦の地

山河改まりし此の沖繩で

硝煙彈雨の中に

嚴然と生き残れるは

只お前のみ

神の尊嚴と 恵みのシンボルとを

あくまで守りぬかんとせし

英雄！

それはお前だ

四、すめらみくにの

運命をかけた此の地を

あくまで守りぬかんことを

お前は祈っていた

然し物質文明の前に

此の地この人々は

如何なるすべも知らず

あまりにも弱かつた

私はお前を見る度に

口惜し涙にむせんでいるように思えてならない

五、あの水際陣地で

勇敢なる攻防戦を

じつと見つめていたのも

お前だし

毎夜の特攻機の活躍も

涙たたえて見ていた

そしてあちこちの陣地の戦闘に

勝つてくれと祈りながら

たおれ行く人々を

涙ぐんで見て来たお前だった

六、お前の股の下を通り過ぎる

敵の戦車や軍隊を

齒ぎしりしながら

それでも

どうすることも出来ず

お前はじつと

七、可憐な乙女や
見つめていなければならなかつた

いたいけな學童が
ただ祖國の勝利を

念じながら

爆雷を抱いて

戦車の下敷を選んで

飛んで行つたとき

又母親の屍體にかじりつき

泣き

呼んでいる 乳のみ兒を

見なければならなかつたとき

お前の胸は

一番いたましかつた

八、戦火過ぎて彈痕にも花は咲き

そして人々も

惨虐の阿修羅たりし昔を

忘れんとするとき

ただお前だけは

追憶の情を

静寂の額に寄せて

建設たけなわの

此の地

この人々を

凝つと視つめている

これは、我々の小野山生活がかなり経つて、文藝活動が始まつた時、若い學徒出陣の一人が文藝投書箱に投げ入れた作品である。

スミ ス軍曹

P・Wとして我々に課せられる作業が、如何なるものであるかは、我々にとつては重大關心事であつた。

味方であるはずの日本の軍隊生活で、死ぬ目に逢わされて来た思い出が「作業」と云えばその作業自體の持つ厳しき以上に、作業を監督するものの態度の冷酷さが、想うだけで我々の心を疲れさせるのである。

アメリカ兵が小銃や拳銃を擬しながら、監視するであろう作業を想像しては、みんな身をすくめた。

ところが——私がP・Wとして最初に正規にふりあてられた作業場の印象は、至つて明るいものであつた。それは「四七」と呼稱される技術部隊に屬する作業で、かなり本格的な建築作業を

やつていた。

我々は、そこで地均しやセメント運搬などに使われたが、我々の監督にあたつた若い米兵の軍曹のスマートさが、凡そ私の豫期したP・W作業とはかけはなれたものを印象づけてくれたのである。彼は名前をリチャード・スミスと云つた。歐洲戦線からこの沖繩に來たのだと語つていたが、技術部隊なので、常に後線にあつて、闘いの慘烈さを知らなかつたことも、彼の日本の兵隊に對する態度を和らかいものにした原因であつたようだ。彼は私の下手な英語によつて、初めて日本のP・Wから直接、ものをきけるといふめずらしいチャンスを得たらしい。そして、私以下の捕虜たちのその日の態度に、興味さえもつたように思えた。

彼は私が、入隊以來約二年間、完全に家族と絶縁状態にあり、その生死さえお互いに知ることが出來ないと云うことに對して、全く想像しかねると云うような驚きを示した。

私がポケットから出して示した子供の寫眞を見ると、子供の年齢や名前をくわしく知りたがつた。そして彼の許婚者だといつて丸顔の可愛い娘の寫眞を私に示した。

「週に二回、彼女に宛てて書くことは、私の愉しい行事である」と語つて、その寫眞に接吻して見せる彼でもあつた。

私たちは、晝食として例の「C」レーションを携行していたが、彼は私たちのためにコーン・ビーフの大きい罐詰と「コココラ」と稱する紅い色をしたサイダーを一本宛、用意してくれた。更に、午後の作業が始まる以前に、私たちの前に現われた彼は、

「まだ作業の時間ではない。ゆつくり休んだらいい」と云いながら、二十本入りの「ラツキーストライク」を一箱ずつ我々五人に配つてくれた。

スミス軍曹は二十三歳だと云つたが、日本式に数えると二十五にはなつていたろう。が、體格の大きさや、社交的な態度、更に立場の相違などが、何だか彼をもつと年長者であるかのように思わせてならなかつた。彼が我々に物質的な好意を示す場合に、少しも恩恵を感じさせないでくれる態度が、私には特に嬉しかつた。

「お前は可哀そうな敗戦國民だから」とか「俺はこんなに豊かな人間だぞ」と誇示されたのでは「ラツキーストライク」の味もしない。

私は、私自身の汚れた日本の軍衣を忘れて、何か彼の好意に報いるものはないかと考えた。そして同僚にも相談してみた。すると、我々の中で最年長者だつた福住が、「こいつはどうだ？」といつて、彼の腹巻の奥から「お守り」をとり出した。成田の不動さんのお守りで、小判型の金

屬に、佛さまと經文が浮き出ている。「こいつは素晴らしい！」私たちは、私たち共同の感謝の象徴として、スミス軍曹にそれを贈つた。

彼は大満悦で、「これは日本の貨幣であろう。金色に輝いているところを見ると、相當な價のものであろう？」と質問した。私は適當な説明の言葉に苦しんで「これはマスコットだ」と答えた。そして「日本の軍人は、みんなこれに類したマスコットを所持して居り、これは宗教的な信仰のシンボルだ」とつけ加えた。すると彼は、

「信仰？ 日本にもキリストが居るのか？」
と怪訝そうに云う。

「勿論！ 日本にはクリスチャンも居る。だが多くの日本人は佛敎を信じ、このマスコットも佛敎に關連したものである」

と答えた。

彼は一應満足の意を表したが、すぐ思い出したように、

「では、日本にもゴッドがあるだろう？」と突つ込んで来る。

ゴッド！ 神！ 私の頭にすぐ天皇と云う言葉が浮んだ。そしてそれ以外には、神社の鳥居が

浮び上つただけである。しかも、明治神宮や伊勢の神廟や新京神社の鳥居にまじつて、我々の小野山でまざり、と見せつけられた弾痕のある鳥居が思い出されて来るではないか。

私は躊躇した。

すると、スミス軍曹の追究は急であつた。

「君はヒロヒトをゴッドだと信じている一人ではないか？」

「ヒロヒト？」

「そうだ、僕はそれを雑誌で讀んだよ」

「ああ、そうか。エンペラー・ヒロヒトですね」

「さよう。日本人はみんなエンペラーをゴッドだと信じてるそうじゃないか」

「……………」

私は何と答えようかと迷つた。そしてこの折角のチャンスをのがさないために、

「日本人は、エンペラーをゴッドの象徴だと教えられている。小さい子供の頃から——」
と答えた。

彼は氣色ばんで、

「君はそれを信じたか？」

と云う。

「僕も日本人の一人です」

と應じると、この若い米兵は、頑迷な日本人の思想をもてあましたような表情をした。そして非常に熱をこめて、ゴッドとは決してそんなものではないこと、ヒロヒトは單なる人間ではないか、君や僕と少しも違ふところのない普通の男なのだと言葉を展開した。

私はこの年若い米兵の熱烈な辯論をうなずいて傾聴せざるを得なかつた。

内容としては極めてあたりまえのことである。そのあたりまえのことを、永い間決して口に出して云えなかつたのが我々日本人であつた。神がかりと云うか、氣狂いじみたことと云うか――

經濟を無視し、理論をひつくりかえして逆立ちして來なければならなかつた今までの生活を思いながら、私は朗らかであつた。

リチャード・スミス軍曹とはその後屢々逢ふ機會を持つた。彼は「四七」の作業場に出かける多くのP・Wの群の中に、私の姿を見出すとニコニコ微笑みながら近寄つて來て、私を彼の擔當する作業員としてひつこぬいてくれたからである。

「I・D」と「P・O」

我々の作業の初期は、みんなフリーランサーだった。

前夜のうちに、翌日の作業をふりあてられる。ところがいつの間にか、評判のいい作業場と、不評の作業場とはつきり分れて来たために、作業のふりあてが勞務係から通告されると、幕舎の中から歡聲があがつたり、悲觀の聲がもれたりした。

いい作業場と悪い作業場の判定の規準は、概して仕事の内容よりは、その仕事を監視する米兵の人柄やら仕事場の環境によつたようである。

その頃最も評判のいい作業場に「I・D」と呼ばれる箇所があつた。「In-transit Dump」の略號であつた。船から陸揚げされた各種の荷物の中間集積場で、ここには食料品から被服類、醫藥から各種の機械が山積してあつた。これらを整理したりトラックにのせたりするのが仕事の全

部で、この監視には黒人があつてゐた。

作業の合間に、失敬する甘いチョコレートや晝食の不足を補う罐詰類などが豊富に積まれてゐるのだが、何よりも「I・D」が好評を博した重大原因をなしたのである。

勿論作業員たる我々P・Wに勝手に集積貨物をひつこ抜くような役得が許されてゐるわけではなかつたが、監視の黒人たちは至つてのんきに、P・Wと一緒になつてチョコレートを味わつたりした。しかも時々この「I・D」の廣つばにはビールの山が築かれることがある。ビールのはいつてゐる箱の特長はP・Wの全員が極めて早くのみこんだ。横文字の讀めぬ者も、一人として間違える者はなかつた。チョコレートのつもりであけたら、ベーキング・パウダーだつたり、桃の罐を豫期してあけたら料理用の未だ味の無いグリーン・ピースが飛び出す様な喜劇は毎日何十回となく繰り返えされたが、ビールだけは誰もが、その箱の特徴をはつきり知り、あの型の箱は罐詰のビールで、この型のやつは瓶詰などと、なか／＼細密な知識をもつてゐた。

永い間、「歩兵操典」をたたきこまれた日本の兵隊たちには、時々巡視に來る白人のM・Pの眼をかすめてビールの箱をこわすこと位は實に易々たるものであつた。命をかけて敵中にしのびよつてその情勢をさぐつたり、糧秣をかつぎ出したりすることを訓練されて來た逞ましい日本の

兵隊たちである。M・Pの中にはもうP・Wがビールやチョコレートを失敬するのには、手の出しようがないとあきらめているものも居た。

そして我々の小野山キャンプでは、誰云うとなく「I・Dデパート」と云う言葉が流行りだした。「I・Dデパート」にあたれば、その日はほんのりといひ機嫌になつて鼻唄まじりで作業を愉しめると云うのだから「I・D」に人氣が集中したのは當然である。そして「I・D」で活躍する人々は實に簡単に、きれいな身なりにもなつた。米國本土から着いたばかりの包装から氣に入つた被服類を帽子から靴に至るまで、とり出して着用に及ぶのである。この被服の方は、後には嚴重な達しがあつて、殊に復員の際、内地に持ちかえることを禁止されたので、一通り着るものが揃えば、誰もそれ以上手出しをしなくなつた——。

「P・O」——これはPier Operationで、埠頭の作業だが、我々小野山のP・Wに最も關係の深い作業場であつた。

どこの作業場も、トラックで迎えに来るが、この「P・O」だけは數百のP・Wが列をなして歩かされた。それ程大量の作業員が要つたわけだし、我々のP・Wキャンプを埠頭に近い小野山

に設けたのも、この「P・O」作業のためではなかつたかと思う。米軍が沖繩の將來に如何なる設計を持つていいのか知る由もないが、少なくとも那覇の埠頭を通じてこの島にあげられた物資をおもうと、決して一時の間に合せ政策でないことだけは確實である。

那覇の埠頭は、我々がここに通つてゐる間に着々と築港工事を了えて、入江の兩側に、相當の巨船が二十隻近くはびつたり横づけになれた。我々はこの「P・O」作業では主として荷おろしをやらされたのであるが、かたつむりのようにその角をのばして來る無数のクレーンの林と、走り廻る「ハイ・リフト」とトラツクの間にもまれながら、つくづくと敗戦をおもわされた。

總てが鐵と機械と油である。人間はその物質を適當に監理すればいいのだ。

ここでは「神風」を待つたり、肉の塊だけで鐵を砕こうとするような非科學性は、みじんも存在しない。「鐵骨のある風景」——學生の頃そんな創作を書いた友人があつたが、沖繩は本當に鐵骨の島になりつつあつた。將校と兵隊とはお互いに職域を守りながら、それ／＼人間らしく動いていた。

私はここでも一人の軍曹と親しくなつた。

彼と知り合つた動機が一寸變つていたので私には忘れられない。

「君は軍隊に入るまで何をやつてた？」それが彼のなげ出した最初の言葉だつた。そんなことを聞かれたことがなかつた頃だつたので、私は「滿鐵弘報」の仕事を思いうかべながら、

「僕はプロパガンジストだ」と答えたものである。

「なに？ プロパガンダ？ 君も東條のプロパガンダをやつてたんだな」と來た。

私はすつかりとまどつた。

そう云われると、滿鐵の青年社員や、滿系従事員に「時局宣傳」と銘うつて、時局認識の徹底を目的とした宣傳に、困り抜いたことがある。これは彼の云う「東條のプロパガンダ」に屬しないであらうか。

私は苦笑しながら、

「東條のプロパガンダ—— そんなものは僕はきらいだつた。僕のやつたのはパブリシティ (Publicity) だよ」と云つた。

「そうか、そうか。ニュース・ペーパーだな」と和らいで來た。

それ以來、私は職業を聞かれる度に「ニュース・ペーパー・マン (News-paper man)」と

答えることにした。しかもこの職業は極めて通りがよく、或る種の尊敬に似たものさえ含めて彼等の總てが接してくれた。

私は私の非常に愛した滿鐵の弘報業務を根こそぎにされて、恐らく三年ぶりの日本に歸つたら
ルンペンとして街頭にほうり出されるであろうが、出来たら新聞社の仕事にありつきたいと思つ
ている。

そんなことを「P・O」の作業場のクレーンの下でしみじみ考えた晝休みが、何回もあつた。

檢 査

作業から歸つたP・Wはトラックから飛びおりとそのまま入口に整列してインスペクション
を受ける。形式は嚴重で、一人々々ポケットやズボンの折り返しにまでさわられるので、P・W

たちは帽子を脱いで両手を高くさし上げなければならぬ。そしてそのインスペクションの目的は、勿論作業場から禁制品を持ち込むことを防ぐのである。「I・D」や「P・O」の作業に行つて、そこに陸揚げされるものの中には、時としてウキスキーがあつたり、高級の萬年筆があつたりするし、又煙草やライターの様なものゝ魅力のあるものがしばしばある。それをすばしいP・Wに荒らされては、如何に物の豊かなアメリカでもかなわぬと見えて、この検査も「I・D」や「P・O」にいいものがあがつた時には、なかゝ綿密にやられるのである。それだけではない。P・Wたちは、配給の少ない煙草を入手するためには或いは晝の休憩時間に洗濯の奉仕をやつて、その報酬に煙草をもらつたり、デイシャガールの繪を描いて煙草をせしめたりする。ところが一日に二十本入りの煙草を一つ以上の持ち込みは規定によつて禁止されている。

ここに、検査を受けるP・Wと、検査をするM・Pの間に、無言の知能戦が展開される。この戦いは時として心理戦でもある。

無造作にポケットの中に、五つ位のラッキーストライクをなげこんでおきながら、検査の瞬間にっこり笑つて軽く「ハロー、マイ、フレンド」などとわか覺えの挨拶をなげかけて、さつさと通過するのもあれば、丁寧に規定以上の二箱をM・Pの眼の前につき出して「O・K？」と

やる。勿論規定以上だから「ノウウ！」と斷わられて一箇をひき上げられるのだが、何と彼氏は他に十箇も腰の腹巻きにしまいこんでいると云つた曲藝である。

そして、よく「アメチヤンは、ぬけてるからごまかすのはわけはないさ」と得意がつてるのを聞かされた。確かに日本人の抜けめのなさに較べると、米兵の多くはのんびり鷹揚だつた。簡単にP・Wたちの術中におちてくれたのである。だが私はそんな聲を聞きながら、よく考へた。簡単に術中に陥ちてにこ／＼微笑んでゐるあの米人氣質が、島國根性に凝り固つた日本人を完全にたたきのめしたのだ、と。

「あいつ等はお馬鹿さんだ」と小さいことに得意がつてるP・Wの方が、どれだけ「お馬鹿さん」であるかをじっくり反省することなしには、日本人の本當の立ち直りは出來ないのではないかと、と。

そののんびりしたM・Pに、時としてかくして持ち込もうとして見つかることがある。すると多くのM・Pたちは極めてあつさり笑つてとり上げるだけであるが、中には規定通りに罰を課するものもある。

日本の軍隊で罰と云えば、すぐピント（こつびどくぶんぐるあいつだ）を思い出すが、米軍の罰は穴掘りか立ちん坊、時には石ころがしといったところである。みんなが作業から歸つて來る門の入口に、ほかんと立ちん坊させられるのは一寸こたえる。P・Wたちはこの罰則を「スタングアップ」と呼んだが、立つてるすぐ横にベンキの立て札が立つていて、それには日米兩語ではつきり「私は作業場で品物を盗りました」、「I stole from using unit」と書かれてあるから笑いごとではすまされない。

こうして毎日作業歸りに受けねばならぬのが云わば小検査で、他に時々大検査の嵐が吹く。作業に行つて留守中に所持品全部を、ふい打ちに調べるのである。これをやられると、毎日々々検査をされて、柵内には何等の禁制品もない筈なのに、双物（これはとくに嚴重に禁じられていた）が出たり、酒の入つた水筒が出たり、煙草などはきまつて何百箱も出た。

それ等をひき上げながらM・Pたちは初めは舌を巻いて驚きの表情をしていたが、後には検査にそなえて極めて巧妙に隠匿した煙草を簡単にさがし出すようにさえなつた。

「つまらぬことを教えるもんだ」とため息をつきながらも、私は宮古島で一ぶくのきざみに涙

したことを思い出したりした。

○・B・C

P・W生活が一カ月以上経つて、みんなこの鐵柵の中の生活にある程度なじんで來ると、ぼつぼつ諸種の集いなどを持つようになった。縣人會はその最たるもので、柵内のスピーカーを通じて「神奈川県出身の方は本部前の廣場に夕食を携行してお集り下さい」などと、よく大聲で放送された。西郷さんの勇ましい魂をうけついで薩摩隼人たちはさかんに三州人會を聞いていた。

そこに行くと、私とその周圍の男たちは、毎夜よく集つてはくだらぬことをだべつたが「縣人會なんておよそ意味ないじゃないか」と云うことに意見が一致していた。三州人會の呼び出しがあつても出て行かない鹿児島縣人が、私の横によく寝をべつていた。

我々が縣人會をつまらぬと結論づけた根據は縣人會の立脚する所は島國根性にあると斷じたか

らである。同じ縣に本籍をもつていと云うだけの理由で、趣味も思想も全然異つたものが集つて、一體何を語ろうと云うのだ。これこそ所謂古いセクショナリズムであり、落閑思想の延長ではないか。徒らに閑を作り、他を排していれようとしなない日本人の偏狭さが、祖國を敗戦の奈落に陥れたことに、はつきり氣づかなければならない。

そう云つて賺人會をくさしまくつた私たちのグループが、いつの間にか一つの集團にまとまつて來た。「O・B・C」それが私たちのグループの固有名詞である。

誰がこの名前をつけたか、O・B・Cのメンバーの誰にきいてもはつきりしない。たま／＼一緒に集つてだべり合つてた連中が、年齢的に兵隊としては年長者ばかりであつたので（三十から四十までだ）「オールド・ボーイ」の集りだなあ、なんてなことを云い出したのが、そのもとをなしてゐる。「O・B・C」は、"Old Boys Club"を略したのである。

「O・B・C」のメンバーは、私の沖繩生活の人的中心をなすものであり、この拙ない「沖繩俘虜記」にも屢々彼等の名前が登場するのであるから、ここに極めて簡単にその一人々々を素描

しておこう。

二見利節——彼はO・B・Cの最年長者で三十九歳。本職は畫家である。春陽會の會員、文展の無鑑査組で、ここではP・W演劇のために背景描きをやつてゐる。一寸もつたない話であるが——。流石に彼は藝術家らしい、ものの考え方をもつていて、我々のグループの中では、どうやら一番早く抜けきるらしいものをもつてゐた。年長者の故をもつて、O・B・Cの會長に推したが、誠にO・B・Cにふさわしい會長ぶりで、何一つやらす無責任にものをはつたらかしてゐた。しかも「會長」と呼ぶと、當然のような聲で「おお」と返事をした。

福山賢藏——これは、どうした悪縁か三年間、ずつと一緒に兵隊生活をやつて來た男である。どうやらこの悪縁が一生涯續きそうなので、私も彼もそれをなげいてゐるわけである。帝大で地質を専攻した科學者であるが、その風采にも似ず學生時代に戀愛結婚をして、召集されるまで新京にいた。従つて、彼の戀女房は、私たちが兵營の圍の中で知り合うとほとんど同時に、私の女房と知り合つて往き來をやつてゐたらしい。

私の娘の寫眞を見て（未だ滿一歳にならぬ私の入營前に撮つたやつだが）彼の次男坊の嫁にしようと思ひ出したことがあつた。息子と娘が、あと十七、八年後に惚れ合つたら、それも仕

方なからうと私は観念している。

松本寛二——同盟の姉妹社で、まだ日本が強かつた頃滿洲で華やかに活躍した滿洲國通信社の記者である。同志社出身で無茶苦茶に音楽——といつてもあのくるく／＼廻るレコードだが——その好きな男である。新京で、滿蓄の重役さんに惚れられて、そのお嬢さんと結婚（？）したが、ノータッチのままだと云うビュリタン。

酒も飲めぬと云うし、P・Wの生活で、みんなが昂ぶつて女の話をするとすぐ顔をあからめる新聞記者である。よくもまあ、激しい新京で新聞記者がつとまつたものだと思議である。割合に？ 男ぶりがいいから、大分女には惚れられたと思うが、惚れきれぬ男。世の中はおかしなもので。

武田 茂——滿洲の協和會に席をおいていた強い男である。人生觀のたしかな點では、二見と好一對。滿洲では吉林で前述の松本と仲よくレコードを聴いて、ゲーテの詩集を讀んだと云うが、私はこの男には「詩」はないと思つている。彼に直接そう云つたら彼自身「詩なんて無用物は俺にはないさ」と肯定していた。そしてそれから三日程経つて「詩の本質を究めようじやないか」と云い出した。べらぼうに酒を愛する男であるらしいが、不幸にしてP・Wの社會

にはそれがない。彼は酒への不満を専ら食欲に向けていた。

決して環境に負けない男である。

福島安雄——背の低い男だと云つたら彼は怒る。少なくとも物さしではかつたら低くても、感覺的には低くない、と云つて頑張るのである。彼は「ミス・滿洲」を女房にしていることを愉しんでいた。そして實にあげすつばに「俺の女房は綺麗だぞ」と繰返した。全く驚くべき器用さでP・Wの芝居の脚本を書いた。何も資料がないのに「太陽の子」「淺草の灯」「宮本武藏」「一本刀土俵入」などの昔の映畫を再現させるかと思うと、現代物でも時代物でもお好み次第に、オリジナルの脚本を書き下した。彼は芝居好きのP・Wたちから「先生」と呼ばれて得意だった。

高等商業を出て新京の商事會社で若い重役をやつていたのだが、彼の物の觀方には私は大てい共鳴出來た。彼がもう少し謙讓の美德をわきまえていると好きなのだが、そんなものは彼は輕蔑していた。そして彼の人生觀は概して性慾に立脚していたようである。

木須 貞——宮古島での兵隊生活で、最もよく私に似ていた男である。肉體的にはすつかり疲れ果てていて使いものにならぬ老兵であり、精神的には軍隊嫌惡症が最高度にまで嵩じていて

どうにもならなかつた。従つて同病相あわれんで、木須と私とは顔を合わせると、それだけでよく和んだものである。

やつぱり新京組の一人で國際運輸に勤めていたのだから、これ又滿鐵人の私とは親戚みたいなもの。沖繩に来てからはどつちも昔のからだどころに立ちかえつて、はからずもここで二人が中心になつて「短歌の會」を持つた。宮古では豫想だにしなかつたやさしい歌を詠むので初めは驚いた。

會津若松に歸つて百姓をやると決心しようだし、ぐにの家には柿の木がたくさんあると云うから、私は滿洲で苦勞しただろ女房と子供にめぐり逢つたらすぐこの木須の家を訪問するつもりである。彼は、私がおしにかけてアルコールで氣焰をあげるよりは、その方を百倍も喜ぶ男である。福島とよく議論して負かされていた。私は理論的に福島に賛成しても、感情的に木須に加勢した。

宇都宮英男——めずらしいほど氣分のいい男である。競馬が好きで、今度も復員したら大阪でブローカーをやるんだと頑張つてゐるが、ブローカーとしてはきつと失敗するだろうと思う。何故ならばこの男は骨の髄からよい男でありすぎるからである。

入隊する前に若い女房を亡くして、嬰兒をかかえて泣かされた話をしても彼の場合「ものあわれ」などは相手に感じさせなかつた。母を求むる嬰兒をあやしながら彼は「ホラお馬だ！ 速いだろう？」と喧騒の競馬場をかけずりまわつたのである。

爾來、彼の愛兒は、如何なる玩具よりは「お馬」を愛したそうである。

近江通貴——宮古島の弱兵が集つた特別錬成隊で知り合つたことは前に書いたが、その後ずつと會う機會がなかつた。ところが小野山に来て幾何もなく、彼は全P・Wから「あの野郎！」と蔭口を云われるにくまれ役になつてしまつた。通譯というM・PとP・Wの間に立つて、互いに反撥する要求をとりもたねばならぬのであるから、彼はすつかり憂鬱がつていたが、なまじつが英語をしやべる術をのみこんでいたのが、運の盡きだつたとしても云おうか——。

三十一で、O・B・Cの最年少者である。早稻田で經濟を勉強した頃が、既に日本の全體主義華やかな時代だつたので、彼の行き方はぐつと壓えると云う方針。P・Wが事故を起したりするとあつさりやつつけて罰を課する。甘い同情した態度などは、微塵もない。それが彼のうらまれた素因をなしていた。

伊良原良人——私が兵隊になつた時、彼は四カ月だけの先輩として、やつぱり星一つで哈爾濱

の一七七部隊の十中隊にいた。その四カ月に物を云わして、彼は軽く古年兵面をした。その後宮古島の初期まで（私は宮古生活幾ばくもなく十中隊から八中隊に轉屬した）彼は私の好ましからぬ古年兵の部類に屬していた。中央大學を出て、年齢も私に近くせに、簡単に威張る男として、私は彼をにくらしい男の一人に加えていた。その伊良原と、私はP・W生活で仲良しになつた。もし私たちが捕虜と云う忌まわしい汚名を冠せられる機會がなかつたら、私と彼とは東京でひよつくり出あつても「あの野郎」と横目で蔑視し合うだけで、決して愉しい友だちのひと時を持つことはなかつたに違いない。「心の通つた友とのひと時」というやつは、大臣になつたり、（昔風に云えば）大將に昇進したりしたひと時と較べものにならぬ程、高いものであることを、しみじみ思う。

毒説家として彼はO・B・Cで君臨したが、彼は結構やさしい男であつた。私は鐵柵の中で彼と碁を打ちながらそれをはつきり知つた。

滿洲を憶う

滿洲から歸つて來た地方人の話として、私の耳にもさまざまの情報がはいつて來る。

——女は全部、斷髮男裝で、顔には墨をぬつたり傷あとをつけたりしている

——それでも、ロシア兵は乳房のところをさぐつて、女と云う女は全部ひつぱり出した

——汽車がとまると、ドヤ／＼とはいつて來た支那兵のために、公衆の面前で辱かしめられた

——支那兵の中でも、國民軍が無茶苦茶だ。共產軍は軍規厳正である

——滿鐵社員とその家族だけは、生命と財産を保證されて、昔のままの仕事にたずさわつてい

るが、本部は總て支那人でおさえている

——子供たちは、飢えと寒さで一日に數十人ずつ死んでいる

——新京の街は、國共兩軍の激しい戦いでその八割を灰燼に歸した

——在滿邦人の男子は、全部ソ連につれて行かれてゐる

いい話、悪い話——そうした話の一つ一つが、滿洲に愛するものを置いて來た私にとつては、すき／＼と骨にこたえるのである。そして、私と同じ境遇の友人たちは、誰もが滿洲の話になると特に熱心になり、聞きかじつた情報を持ち寄つては、いろ／＼と想像をたくましくして、悲しい表情をした。

さんとんと荒らされた新京の情報に、最もしおれたのは木須だつた。彼はその日は飯さえ食べなかつた。そして、丁度宮古島で一緒に苦勞した時のようなやつれをさえ見せた。

いろ／＼の情報のだこまでが眞であり、どこまでが偽であるかの判断は、鐵柵の生活ではなかなか難かしかつた。一週間前に沖繩にひき上げて來たと云う地方人から直接聞いたのだ、その女の斷髪はやつと一寸位伸びていた、と云う非常に正確な話を聞かされた時には、「なるほど、やつぱりひどい目にあつたんだな」と淋しく觀念させられたが、東滿の開拓地から、のがれ／＼と生き伸びた女であることを聞き出して、新京に残した女房は大丈夫であらう——否あつてくれ、と靜かに自ら慰めたりもした。そしてしよげきつてゐる木須に、

「情報と云うやつは、これを綜合して、情勢を判断する一資料にしか過ぎないのだ。ソ連が滿

洲を完全に祕密境にしているのだから、我々の耳にはいるものは、極めて小さい局部々々の事例であり、時として例外だけを聞かされているのかも知れない」と云つて慰撫の言葉をなげかけたりもした。

こんな話題の時に、最も強いのは武田だつた。

「戦争じゃないか。ひどいことがあるにきまつている。日本が會つて支那でやつたことを、滿洲で敗戦のどさくさにやりかえされても、それはあたりまえさ。女房や子供がどうなつていようと仕方のない話さ。殺されて居れば、それまでで又新しい道を拓くまでだよ」

と淡々としていた。

然し、

女とは妻をひとりと守り來し

十年おもえば

心昂ぶる

こんな歌を詠んでいた木須は、なか／＼淡々としてはいなかった。

滿洲に十數年住みついて、社會人としては滿洲以外を知らず、滿洲に全生命をうち込み、滿洲で戀をし、滿洲育ちの女房を持ち、滿洲で二人の子供を成した私にも、滿洲の悪い情報は決して淡々としてなどは居れないのである。日本が夢に敗れた、と聞かされた時にも、私の頭に最初にピンと來たのは「滿洲はどうなる？」と云うことだつた。そしてどんなに甘く考えても滿洲に再び歸れそうにないと結論した時には「日本の敗戦」と云う言葉では流れなかつた涙を意識した。滿洲を再び見ることが出來ない——

それは、私の大人の戀を棄てさせられることだ。大連、奉天、新京——私の住みついたのは、そうした南滿の都市に限られていたが、歩きまわることの好きだつた私には、次々と繰り展げられる滿洲のあちこちに淡い感傷の思い出がある。

丁度今頃は、紅葉に彩られているであろう横道河子——さやかな風に流れて來る哈爾濱の寺院の鐘——雪にとざされた開拓地千振——興安嶺で見た花の絨毯——ゆつたり下つた松花江の哈爾濱丸——等々々。

いな、そうしたものよりは、私にはもつとく、大切な滿洲の人々への追憶がある。滿洲に住む人々こそは私に仕事をさせてくれ、私を愛してくれ、私の生命を育んでくれた。

私は、滿洲を離れて、私の生活を考えたことはなかつたのだ。

軍隊に入る前の年だつた。社用で東京に出張して、久しぶりに兄と水入らずで飲んだ時に、こんな話をしたことがある。

「内地は、時々遊びに来るにはいい所だが、こんな空氣の中で毎日仕事をやつてる男の氣が知れないなあ。日本は、せいゝゝ年に一回ずつ休みに来る保養所だ——」

「お前は、日本を知らんからだよ。いくら貧乏しても、僕は東京を離れたくない」

「そりや違ふ。兄さんこそ大陸を知らんからだ。僕はいくら偉くしてくれても、日本に住まされるのはご免だなあ」

兄は、私より十六歳上である。兄の青年時代までは、私の家はかなり裕福だつたらしい。だから兄は金持のお坊ちゃんとして育ち、その後父が田舎の役人をよして馴れぬ商賣に失敗する頃には、華やかに藝者と惚れ合つたりして、親を泣かせたという、云わばのんびりした伸びかたをしたのである。私は、家の没落期に孤々の聲をあげ、小學校を出ると直ぐ義兄の家の居候として小さい心を抑えながら中學校に通い、中學を出る時には、どうかして學資の要らぬ學校をと苦勞し

てさがして何とか自分で道を拓いて來た。そのためか、私は私自身ではつきり氣づく程、青年の霸氣や血氣を表に現わせない人間になつていた。自分では、その性格が嫌で嫌でたまらず、何とかして自我を嚴然と主張したいと念じながら、それが出來なかつたのである。

そうした兄と弟とが、どつちも一人前になつて、一は日本の島に住み、一は大陸に住み馴れて時々邂逅する。弟の私はよく神経質なものにこだわる兄を發見して、「おや？こんな筈はないか」と思つたものである。恐らく十餘年間の滿洲が、私にしみこましてくれた鷹揚さではないかと思ふ。

因習のない廣さ、總てが建設への力で溢れていた——それが滿洲であつた。

再び出來ないことを知りながら、私は滿洲の土と人とを夢に描く。否出來ないことを自覺するが故に、一層強く未練を感じるのである。昨夜も鐵柵の中のカンパスの家で、公主嶺の牧場の一隅で、ジンギスカン鍋をつついてゐる夢を見た。親しい友人とその家族、それに私の女房と子供とが、はつきり夢の中で笑つていた。

娯
樂

・宮古から着いたばかりの、石川の收容所の一角に「星都劇場」と命名されたステージがあるのを見た時は、實にへんな氣がした。「捕虜」が「鐵柵」の中で芝居をやる。私はとたんに奉天の同善堂を思い出した。同善堂というのは滿洲にはめずらしい慈善事業で、病みついた老人やみよりのない孤兒を集めて、彼等を救濟すると共に、組織的に教育をやつたり、生産事業に働かせたりして、なか／＼行き届いた經營を續けていたが、その孤兒たちが煉瓦塀の中で石蹴りをしたり、歌をうたつたりして自ら慰めている姿を、一入哀れに感じた記憶がはつきりと私の頭に残っている。

大きな重壓と束縛の中で、それを拂いのける力もなく、あたかも満ち足りたかのように唄をうたい踊りをおどることは、齒をくいしばつて泣くことにも増して「物のあわれ」を感じるのだ。

その星都劇場で、私たちは沖繩生活三日目の夜、華々しい芝居を見せていただいた。丁度正月だったので「初笑い清水港」などと大きく書かれたポスターなどの前ぶれよろしく、賑やかに喜劇風のもものが上演され、豫想よりはずつと上手に見せてくれたが、私は何故か心からは笑えなかつた。

然し小野山に移ると、ここでもすぐに芝居小屋の建築が始められた。私自身は、どうしても石川での印象が抜けきれず、この芝居小屋にたいした關心が持てなかつた。

一カ月も経つと、この小屋には「能面」のような氣のきいた圖案を描かれた引幕がつけられ、廣場のあちこちで夜おそくまで芝居の練習が続けられるようになった。ステージの上の方には、装飾文字で「那覇劇場」とがづちり書かれた。

三月の中頃だつた、華やかな那覇劇場第一回の公演が、軽い流行歌と共に欄内のスピーカーを通じて報ぜられたのである。

何等の公的な娛樂を持たぬP・Wたちの人氣はすばらしかつた。作業の歸りに少しずつ持つて来た色ペンキで、女形の着物に綺麗な花模様を描かれ、帯には金色さえ塗り散らされた。

何で作つたのか、なか／＼手際のあざやかな「かつら」も出来る。

そうした雰圍氣の中で、柵内の我々P・Wたちは、少しずつ今までの軍隊生活とはちがつたものが、各々の心の中に芽生えるのを自覺した。

そして、あるものは將棋を作り、あるものは碁石をつくつた。將棋の駒も最初は罐詰の紙箱をレザーの刃で切つて、鉛筆で王將だの金だのを書いていたが、いつの間にか、がつちりした木材に文字を彫りこんで赤いペンキを流しこんだ。碁石だけはどうも名案がないらしく、最後まで厚紙を切り抜いて白と黒のペンキで化粧したやつを使つた。従つて一寸風が吹きこんで來ると、苦心慘愴して築きあげた石垣を無雑作に吹き飛ばされて形勢の悪い男を喜ばした。

驚いたのは麻雀である。材料は寢臺の脚やベニヤ板だつたが、これを克明に同じ形に切斷して一つ一つ紙やすりで磨きあげ、そして丁寧な模様を刻みこむ。更にいろ／＼の色彩をほどこしてなか／＼氣分の出た麻雀牌が作られた。一組出來ると、みんなこれに眞似た。そして六、七月頃には涼しい夜の夜風をうけながら、廣つばの電燈の下には五つも六つもの麻雀臺が並んで、かん高い聲で「ボン」だの「チー」だのと歡聲があがつた。

我々のグループO・B・Cにも、麻雀の天狗がいた。自稱初段が新聞屋の松本で、一時は彼に

率いられて、あちこちのグループと對外試合などやつた。伊良原は、この生活で初めて麻雀を覺えたが、その凝り方は一通りではなく、度の強い近視眼の眼鏡の下から並んだ牌をにらみながら左利きの腕をふりまわして、大聲をあげた。

「麻雀に人生あり」そんなことをうそぶいたのも彼だつた。八月頃、彼が碁の手ほどきを受けてから、すっかり轉向したが、それまでの彼は、復員したら麻雀荘でも開業しそうな熱意で、牌をたたき、そして勝てばきまつて昔の流行歌の一節「あの娘はダンサーか、氣にかかる——」と調子外れの唄をうたつた。

さて芝居の方はどうなつたか。初期は好きな連中が集つては昔田舎芝居でやつたことのあるようなテーマをひき出して那覇劇場に脚光を浴びた。「國定忠治」や「森の石松」が舞臺にあがつては切つたり切られたりした。

我々のM・Pたちは、長い銀紙の刀を幕開く毎に振りまわしてはうめき聲を上げる芝居の連続におそれをなして、二三回だけで観に行くことをよしてしまつた。然し若いP・Wたちの喝采はそう簡單にはおさまらなかつた。回を追う毎に、衣裳は綺麗になり女形はうまくなつた。

「お光」と呼ばれる女形は、いつとはなく柵内の人氣女優？に成り上つて、彼女？は知らぬ男たちから、さかんに煙草をもらつたり、果物の罐詰にありついたりした。P・Wの間に「いかれ」と云う言葉が流行り出したのはこの頃からだつた。女に飢えた男たちはせめて女形でもいい舞臺の上で黄色い聲を出し、色氣のあるしぐさをしてくれた小男に、その不満を慰めようとするのである。作業場で一緒に圓匙を握り、レーシヨンの箱をかつぎながら、彼女？の舞臺での姿が幻のようにつきまといつて、離れないのか——手をとつたり肩を組んだりしてやるせない心のやり場を見つけていた。

いかれた男たちは、その愛する女形のために、花輪を作つて舞臺に捧げたり、M・Pの眼をかすめ無理をして柵内に持ちこんだ貴重な煙草を五つ箱も七箱も、舞臺の彼女？に投げたりして、奇聲を上げた。

こうした那覇劇場の初期の姿に、變革を與えたのがO・B・Cの福島安雄だつた。彼は、學生時代に朝鮮映畫のシナリオみたいなものを書いて入賞したことがある以外には、何等そうした經歷を持つていたわけではないが、生來の鋭敏な感覚と、實演のラヴ・レターとで鍛えた筆力とで

演劇の脚本に手をつけたのである。どうしても「チャンバラ」を演らねば氣のすまぬ役者？ たちのために、幕末もの「黎明以前」を書いてやつて、何かしら内容のあることを演るものに自覚させ、観るものに感じさせた。

その頃、柵内には「ひよどり劇團」「おしどり劇團」「青空俱樂部」「新生劇團」「むらさき劇團」「黎明劇團」等々、昔の日本軍隊の同一中隊だとか、現在毎日同じ作業場に通つてるとか云う縁故を單位にして、十人から二十名位の芝居の集團が出来上つていた。福島は機關銃中隊で、青空俱樂部がその一黨だつた。だから福島の脚本で成功すると、青空俱樂部のメンバーは意慾的に何か内容のある作品を演ろうとしはじめたのである。

福島は調子に乗つて書きなぐつた。「太陽の子」でそれが最高調に達した。古い映畫の再現だつたが、ぼんやり筋を覚えていたと云うだけで、總ては彼の創作だし、しかも實にうまく北國の教化院を描き、そこに苦しむ人々の心をうつし出した。これ以來、小野山の芝居は、田舎廻りの旅役者の芝居から「新國劇」や「前進座」風な演劇に移行して、「つまらない」と云つて土曜日の夜までも幕舎にひっこんでいた人々を大分觀劇に誘い出すことに成功した。

「日本は戦敗れて、武力戦は終結した。戦争継続中よりも激しい自己革命が、凡ゆる分野に於て闘争を續けている。文化面に於て又然り。このことを看過してP・W演劇が、いつまでも過去の日本の歌舞伎・新劇或いは映畫等に影響された一種の模倣を主とする演劇に終始することは再考を要するのではないか。私は復員則ち日本再建と考えたい。何としても日本を再建しなければ吾々の存在はないのだから。従つてP・Wの演劇もその意味に於て再建日本の方向に指針を向けるべきではなからうか。敗戦の不幸、その悲劇的感情、それ等を取り越えようとする意慾——これ等を大きな思想の糧として再建日本へのメインコースに副つて獨創的な歩みを進めてこそP・W演劇の意義があるのだ——」

これは九月中頃の福島自身の言葉であるが、小野山の鐵柵の中の芝居が、その後どんな方向をたどつたかを暗示するものと見てよからう。

私自身も遂に書かされて「日本人」「陸軍最後の日」など氣の向くままに二、三脚本みたいなものを書いて見たが、ここの劇團？の人々からは嫌われて、そのまま那覇劇場の隅つこの柵ではこりをかぶつていた。

P・W 社會

鐵柵に囲まれた束縛の社會がここに在る。實に面白い独自の個性を持つた社會である。この社會を形成する人々は、日本の軍隊生活から眞直ぐに飛びこまれたので、はじめは誰もがとまどつていた。本當にP・W社會が、その個性を確立するには、二カ月近くを要したと思う。

鐵柵のトゲが、やけに氣になつていたので、各人が、それらの個性と力とで、生きて行けることが分つた時、私は歡聲をあげた。箸の握り方にまでおせつかいされた日本の軍隊生活からは豫想出来ない自由の獄舎——それがP・W社會だつた。

地位だとか、名譽だとか、金錢などの利害關係が、全然伴わないところに、大人の集りとしては絶対にめずらしい特徴がある。誰もが素裸で暮してゆける。氣にくわなければ、從來の經緯や

お義理で、物を云う必要など全くない。反對に、氣に入れば、誰にはばかることもなく、心をなげ出して交ることが出来る。ここは、そうした意味では、純真な子供の世界の延長だった。

私は、曾つての上官や古年兵たちに、お義理で物を云うことを一切やめた。それは故意にはないが、痛めつけられた日本の軍隊生活への反抗でもあつた。

この柵内の生活をじつと視つてみると、何だか現在の日本人の姿をあり／＼と見取ることが出来るような氣がした。敗戦後の祖國の縮圖が、祖國とは隔離された沖繩の片隅に芽をふいていたのである。

私はP・Wたちの生活を二つに大別出来た。何かを積極的にやつてる者乃至はやろうとしている者と、消極的にちじこまつて何もやらないもの、換言すれば、再建日本の意欲を持つものと、徒らに敗戦の虚脱状態を低迷しているものである。

そして何時の間にか、建設的な意欲に燃ゆる者たちが、この社會を動かすようになって、日本軍隊の殘滓とも云うべき昔の階級などはひつこんでしまった。

小さいP・W社會であつても、一つの秩序がくつがえされて、新しい型を作り上げるまでには

或程度の時間と事件とが必要だつた。小野山の初期には、そうした舊秩序打破の爲の反撥事件が
あちこちで惹起した。あまりに無茶な暴威をふるつた下士官や古年兵たちは「反動をとられる」
——軽い復讐を兵隊はこう表現する——ことをおそれて悪夢に悩まされた。曾つての初年兵であ
り、軍隊生活の被害者たちは、その反動をとるために、與えられたこの機会を逸せず、暗い幕舎
の蔭に昔の上官を呼び出してたたきのめした。既にもう日本軍隊の星の数がものを云わなくなつ
たこの場合、腕力が總てを解決したのである。なぐられた古年兵は、星の数でものを云つた悪歴
を、だまつて悔いただけで、すつかりおとなしくならざるを得なかつた。それはP・W社會を確
立するための小さい革命事件とも云うべきものであつた。そして一人々々が個性を發揮するため
の素地がつくられたのである。

あるものは野球に熱申した。あるものは芝居の人気者になつた。文藝活動に頭角を現わすもの
も出た。地味に英語の勉強を志す青年もあれば、何か技術を體得しようと思つて進んで運轉手を志願す
るものもあつた。

私は、福山や松本と計つて、熱心な青年たちのために基礎英語の講習を開いた。どうせ思いつ
きだろう、すぐ嫌氣がさして生徒がなくなるだろうと思つていたが、實際はそうでなかつた。遠

くの離れた幕舎から、是非たのむと云つて眞面目な青年が集つて來た。

O・B・Cの連中と「常識講座」を企畫して、政治や經濟・文化等々廣範圍のテーマをとりあげて、座談會形式の講座を初めた動機も、この社會の良き青年層の動きに心をひかれたからだつた。何かをやろう！やらなければならぬ！とはつきり心の定まつた青年たちは、時間が足りないといふほしていた。英語の時間の最中に、

「今日の常識講座は誰ですか？」と話の聞けるのを愉しんでいるものも居た。

ところが、本當に何もやろうとしないで、いつも幕舎の隅つこで寝ころんでいる青年もかなり居た。時々起きて騒いでると思うと、せいゝく頭髮の伸び方を問題にして、ボマーDのかわりに 그리스油をぬることを研究しているといつた状態である。

「どうだ、野球でもやつたら——」と云うと興味なさそうに話題をかえて、今日作業場で逢つた沖繩娘のことに觸れて行く。といつて、沖繩娘と本當の戀をすることなど決して出來ない男たちである。

私は遙かに敗戦の故國に想いを馳せた。

「敗けたんだ！ やぶれかぶれさ！——國家も民族もあつたもんか」といつて、總てを否定し自分自身さえも奈落に陥れている人々がきつといるに違いない。

日本人の總てが、何らかの意慾を持つことと、その反對とは、日本の將來を決定するのだ。永い間、自らの意志で生きることと、壓えつけられて來た日本人は、今急にその天井をのぞかれても、生きる術を忘れてとまどつているのではないか。

食うための心配の全然ないこのP・W社會は、與えられた自分の時間を、何かやろうと、寢て居ようと誰からも文句の出る筋がない。それだけにはつきりと本當のすがたをむき出しにする。

小野山タイムス

沖繩には俘虜收容所が七つあつた。嘉手納・屋嘉（これは私たちが最初に入つた石川收容所の本名である）・楚邊・牧港・小祿・オバスカム（これは後にライカムと改稱された）それから私た

ちの小野山で、沖繩の兵隊と宮古島から来た我々を合して約一萬二千名位居た。この七つの收容所が、お互いに連絡をとり、ニュースを知り合うために新聞を出そうと云うので、その頃七つの收容所の元締めをやつていた屋嘉から連絡があつた。小野山では松本が本職だから、というので彼が柵内に残つて通信員をつとめることになつた。作業を免除されて週に一回だけ小野山通信を送ればよいという、なか／＼贅澤な役目で、彼も一寸氣がひけたのか、小野山には小野山だけの壁新聞を作つたらということになつた。

丁度文藝部が生れて、その作品發表も問題になつていたので、一石二鳥をねらつて松本は氣のひける思いをせずに新聞屋を本業とすることが出来た。

彼は本部の幕舎の一部に、堂々と「オノヤマ・タイムス」の看板をにかけて、自ら社長と名乗つた。

先の七つの收容所共通の新聞も「沖繩新聞」と銘打つて、週に一回ずつ小型のニュースが、謄寫版印刷で土曜日配布された。

「小野山タイムス」は壁新聞だから一枚作ればよい。どこから探して来たのか、松本は丁度新聞一頁大の模造紙を手に入れて、それを克明に彼の學生時代から十數年離さなかつたという愛用

の萬年筆でうすめて行つた。

社説から隨筆欄、寫眞、文藝欄等々、一寸した大學新聞風な體裁と内容とで、第一號を出した時は、彼はすつかり満足していた。ニュースの材料は主に米紙「スターズ・アンド・ストライプス」からとつたので割合に新鮮だつたし、誰かが持つて來てくれる米軍の雜誌や畫報から寫眞を切りとつたりして好評だつた。福山は「日本空軍は何故敗れたか」と云う米將校の論文を翻譯連載して初期の小野山タイムスの聲價をあげた。

社説は社長の松本と、通譯の近江と、私とが手分けをして主に書いた。初めは何も日本の資料が入手出來ないので困つたが、それでも共產主義を論じたり封建思想を截つたり、文化日本の建設に氣焔をあげたりしては、每晚おそくまで議論した。七月頃になつて、沖繩の人々が内地から引きあげて來るようになって、時々内地の雜誌を見ることが出來、更に内地新聞の海外版が配布されるようになったが、

「おい、内地の思想も、俺たちが鐵柵の中でだべつてる以上には進んで居ないぜ」

と笑つたことがあつた。だがその笑いは決して嘲笑ではなかつた。終戦後一年にも垂んとして尙混迷の中にうろめく祖國を感ずることは、何だか淋しかつたのである。

讀みものに飢えた人々は作業から歸ると、掲示板の小野山タイムスにたかつた。タイムスへの關心は、柵内のP・Wたちの投稿によつてもうかがえ、作業場で何か變つた材料が手に入ると、よく届けてもくれた。

私が「宮古島の記」を連載していた頃、次のような投書が舞いこんだことがある。

「叱りながら、心の中で泣いていた上官のあつたことをどうして見ないのか。そうした人々がこの柵内に居ることを知らないのか。

善とか悪とかは、誰が何を根據に定め得るのか」

私があけすつばに日本將校や下士官を誹謗したのに對する抗議であつた。

私はこれでいい、これでいいと、その投書を大切に私のノートに挿んだ。

私たちが、小野山タイムスで主張した根本思想は、あらゆる角度から總てを「日本の再建」に指向することであつた。

次の二つの隨筆は五月初めと中頃に第十號、第十一號に掲載されたものだが、小野山タイムス

と小野山生活を語る何等かの資料にならないだろうか。

「祖國に還る」は福島の手になり、「頭の再きりかえ」は私の拙稿である。

〃 祖 國 に 還 る 〃

ふくしま・やすを

終戦の聲を聞いて喜んだのは勝つた國ばかりではなく、敗けた日本でもホツとした氣持になつたと思う。國民はもう戦争の繼續を望んではいなかつたであらうし、其の力もなかつたに違いない。

満洲事變以來、息つく暇もなく戦いに戦い續けた日本である。國民の疲勞も相當強いものであつたと思われる。

敗けてみて、國際法規にうとい一般國民も亦其の經驗のない政府の役人も、どんなにひどい目にあうかと内心甚だ不安であつただろうが、進陸軍が來てみるとそれ程でもなく、こんな事であ

つたら、まだ日本が全滅的打撃を受けない前に降服すればよかつたと思ふ様な不心得な人も尠くなかつただろう。戦争責任者達は、東京で或は夫々の現地に於て銃殺されたり、國際裁判にかけられている模様だが、あまり良い氣持のものではない。日本人が日本人を裁いて銃殺する分には何も特別感じないのであるが、人種が異ると時として耐えられない様ないやな氣持になる。日本の軍部が攻撃の的になるのは當然であるが、それを支持し迎合した一部の官僚や議會人或は文化人達が掌をかえした様に、その軍部を正面攻撃したり、反動的な言説を發表したりする事は敗戦民族の最もいやらしい一面を見せつけられる様でたまらない。

又戦争をひどく無駄なものであると、それに超然として來た自分を何か特別高い精神に生きた如く吹聴し、米國あたりから來た文化人達との會話に於て、得々として、如何に戦争に無關心であつたかを語っているものがある。虫が走るとはこの事である。

何處の國民でも、自分の祖國に公民的愛國心を持たない者に、一個の尊敬をすら拂わない事を此の人達は銘記すべきだ。

共産黨は延安から歸朝した野坂參三氏を中心に大々の活躍を開始している様だ。天皇制云々も此の黨が最も盛んにやつている。何をやつても構わないが、いやしくも國民に迷惑がかかつたり

より一層の困難を國民に與える様であれば大いに自重して貰いたい。

日本から共產黨がなくなつても日本はつぶれもしなければ、格別困る譯でもなさそうだから、今の日本にどうしても必要でないものはどん／＼後廻しにして貰いたい。

食糧難がどれ程深刻か、實際の處は歸つてみなければ判らない。戦争に勝つた國でも、食うや食わずであるから、日本も決して並大抵ではなからう。茲三、四年は都會人はまず滿腹する事はなからうが、それでも六大學リーグは盛大にやつているし、何萬かの人々は聲をからして應援しているところを見ると、萬更新聞に發表された通りでもなさそうだ。日本の新聞は茲十年ばかりあまり本當の事を書かないので、戦争が終つてもまだ其の辭がついている様である。

進駐軍の兵隊が日本の女を連れて歩いてみると、日本の少年がその女を殴り進駐軍の兵隊が又其の少年を殴り倒したとある。

被害を蒙つたのは日本の女と日本の少年である。そして最も英雄的行爲を示したのは進駐軍の兵隊である。これが我々の祖國の土地の上で現在行われているのである。進駐軍は非常に自由で思いやりがある、これは誠に結構である。

然し日本は自分のものが自分で處理出来なくなつているのである。思いやりがなければ大變で

ある。そして進駐軍が我々日本人に對して爲す行爲を、我々日本人が進駐軍に對して行爲すればどの様な結果になるかと考える時、戦争に敗けた悲惨さを痛感させられるではないか。戦争は矢張り敗けるものではないのである。六大學リーグ戦の嘗つての宮様席は進駐軍の兵隊によつて占められている。

こうした祖國に吾々は還るのである。

〃 頭の再きりかえ 〃

みやなが・つぎを

太平洋戦争未だはなやかだつた頃——我々の大部分が「必勝の信念？」に燃えていた頃、盛んに「頭のきりかえ」と云う言葉が流行つた。戦いに總てを捧げる爲に、日本人の安易なもの考え方が本當に一つのものに向つて凝固出来ないと云うのである。どうしても勝たねばならぬ、勝つ爲にはあらゆる自由主義的、個人主義的な、ものの考え方を放擲して、總てを戦力増強の一

點に集中させることが必要だつたのである。そして「頭のきりかえ」が日本のインテリの間での
 合言葉みたいに叫ばれたのであるが、尙且「頭のきりかえ」の實踐は非常に至難であつた。誰も
 彼もが、口では「必勝への道」を唱えながら、なか／＼そこに徹しきれなかつた。お役人は相變
 らずその夜の宴會の酒の入手にその職權を濫用したし、徴用工は貴重な飛行機の部分品で私物の
 シガレットケースを作つて満足感をたのしんだ。「闇は利敵行爲だ」と云いつつ「俺だけは」と
 平氣で闇をやつた。製産工場からの公的な報告はそして石炭や鐵の生産高は堂々とよそ行きの數
 字が並べられた。責任ある大臣たちは机上の計畫だけで戦力の増強が實踐されつつあると確信？
 する自己催眠に陥つていた。恐らく、太平洋戦争の最中に、心身ともに凝り固つて、完全に「頭
 のきりかえ」を必要としなかつたのは、特攻をめざす若い青年たちだけではなかつただらうか。
 とまれ、戦は敗れた。完全に世界の一等国日本はその檜舞臺からひき下された。それまでの日
 本の方向の正邪は別として、祖國を愛する我々に、我々の前進停止は悲しいことである。否前進
 停止どころか、我々は百年も後退させられ、決して去年の今頃まで内藏していた夢を、再び夢み
 ることは不可能になつてしまつた。だが、私は今ここで徒らに敗戦を悲しんだり、その原因や責
 任の所在をとりあげようとは思わない。

我々が今直面する一番大きいテーマはこれからの日本に就てである、これからの日本！ そうだ、これからの日本だ。

例を、毎週の演劇に採つてみよう。演技の巧拙や、その娛樂價値の高低については、ここでは問題外である。何を演じ、それを如何に観たかが問題である。「忠臣藏」が演じられる。脚本をかいいたもの——これを演じるもの——演技の爲に働く多くの人々——これを観るもの——そしてその後に来るものは果して何か。「仇討ち」が登場し「やくざ」が繩張りを争う。（斷つておくが私はここで演劇批評をやつてゐるのではない。従つてここにとりあげたものは、何も個々のシナリオ・ライターや劇團に就てではない。）唯單に「仇討ち」や「やくざ」の上演が悪いと云うのではない。その内容に何等の批判も反省も加えようと考えない人々に對して「頭のきりかえ」が新しく要求せらるべきだと考へるのである。新生日本の方向は、あくまでも今までの日本や日本人の思索に、大きな方向轉換を求めらる。

「物量だけに負けたのだ。今に見ておれ、今度は勝つぞ」と簡單に考へてゐる人々が、實に多いのではないか。果してそれは正しいのであろうか。

私は否定する！

滿洲事變を契機にして大きく立ち上つた軍人や「さくら會」のメンバーの中には、日本の伸展を、或いは私慾拔きに考えた者もいたであろうことは認める。だがその「日本」の進み方は決して正しい方向ではなかつたのだ。今靜かに考えてみても、若しこの戦争に勝つたとしてみても、我は我々の上にのしかかつて來る軍閥的思想とその特權をかさにきた重壓とに、堪え得たであらうか。重苦しい精神的負擔と、束縛された考え方の爲に、私たちは精神的奴隸に化し去られたにちがいない。

人間はその本性として明るい太陽の世界を欲する。蠟燭の燈がランプになり、電燈になり、少なくともせまい部屋の中だけは明るい晝でもあるかのような錯覺を與えられたとしても、夜は夜である。一步ふみ出せば、暗い闇の世界である。電燈は停電という故障によつて、總てを夜の闇にさえかゝすではないか。

新しい日本は、あくまでも太陽の世界に生きるべきである。何もアメリカがその理念に於て人類の最高であるとは思わぬ。過去の日本の思想を放棄し、アメリカをのり越えて、人類の文化と幸福とを直指す至高への平和の道——それこそ再建日本と、日本人に與えられた使命ではない

か。難かしい——たしかに難かしい。然し、この方向に眼を向けて、軍國的に「きりかえられた頭」を更に正しくきりかえることなくして我々の生きる道はない。

歌の集い

バラ線の柵が續いて、その四隅には機關銃をそなえた望樓がある。入口はたつた一つで、そこにはいかめしいM・Pの番所がある。

その門のすぐ横、P・W事務室前の、電燈の具合のいい一寸した廣場、ここが私たちの「短歌會」の定位置だつた。

棄てられたレーションの箱を一つずつ持ちよつて、我々はその廣場に輪をつくる。雨が降らない限り、火曜日の晩が短歌會のためにあてられた。

文藝部が生れて、最初の文藝募集の打ち合せをやつた時、私ははからずも短歌を擔當させられたのである。實に大それた話で苦笑どころではなかつたが、第一回の投稿歌を讀んでから、私は枯れ果てていた詩心をよびもどされた。特に、沖繩組の前原が嚴しい戦いの歌をものしてくれているのを見て、どきつとした。そうだ、今こそこの二年間の苦闘をみんなの魂からひき出す唯一の好機ではないか。

誰もがじつと臧つてゐる歴史をあからさまに記録しておくには、この機を逸してはならない。私自身は宮古島で戦わざる苦闘をなめつくして來たが、ここには皇國の生命と共に死闘した戦友も居る。彼等が如何に苦しみ抜いたか——敗戦日本の最後の姿がそこに在る筈だ。私はここで文藝作品を讀ましてもらう立場になつたことを、しみ／＼喜んだ。そしてそのことにむら／＼と湧き上る興奮をさえ覺えた。

かなしさを腐れ果てたる今もなお

銃とる指をひらかざる人

前 原 繁

戦いの跡にそよぎて紅の

血をすすりしか佛桑華の花

木 須 貞

山すそにひろがる麥の一叢は

人なきままにやせて黄ばめり

荒 田 愁 虹

これが第一回に投稿された佳作であるが、私はよし俺も一緒に歌をやろうと、何年か前の一途に詠んだ頃になりきつていた。

投稿歌の中には勿論、全然初めてらしいのもまじつていたが、どれもみなこの特殊な環境で、特殊な経験を描き出そうとする苦心が見えた。

私ははつきり「歌の集い」を定期に開く決心をした。

幸いに「四七」の作業場でプリントをやつている下村という内氣な青年がいて、彼も歌作を志していた。彼はよろこんで我々の「歌の集い」のためにプリントを引きうけた。

週に一回ずつみんなで投稿するので、歌の集いにもつてこいの材料が豊富にあつた。若い人々は私を「先生」と呼んだ。歌の難かしさをぼんやり感じている程度の私は、面はゆいものを感じながら、さかんに技巧のない眞面目な作歌態度を強調した。

そしてこの千載一遇の経験と環境をあますところなく詠みまくるようになつた。

門番のM・Pが時々我々の集いをのぞいた。一人々々何か紙ぎれをもつて熱心に語り合つていゝる我々の姿は彼等にも通じるのか、

「何だい？ 學校かい？」と云つた質問を投げかけて来るものもあつた。

「そうじゃない。日本のボエムの研究をやつてるんだ」と答えると、

「ボエム？」と變な表情をした。

「日本人は詩を愛する國民だ」とつけ加えると

「そうか、そうか。ボエム！ ナイスー O・K」

と手をさし出して笑うのである。

若いM・P——彼が詩を解するかどうかは、私には何等の豫備知識もなかつたが、少なくとも「詩を愛する國民」は「戦争を愛する國民」よりは、いい印象を與えたい。その後も二回程「おおポエムの研究だな」とにこ／＼して我々の集つた横を通り過ぎたM・Pがあつた。

「歌の集い」では、木須が斷然うるさかつた。彼はひげのある瘦せた容貌にも似ずなか／＼せん細な歌を詠んだ。役員が永びくとヒステリックにまで昂ぶつた感情を露出して女房の歌をうたつたが、若い初めての青年たちには實に嚴しい歌評をなげかけた。私は彼からくさされ過ぎてしよげきつてゐる原作者の激勸役をやらされたことが幾度もあつた。この歌の集いで私はよき友を得、よき青年を知つた。開拓地出身の越野、菊田、竹島や、學徒出陣の紫野、更に堀江、小林、野田など忘れられぬ友が多い。「奥多摩の百姓」と自稱する黒山もその一人である。彼は農道の行者とも云うべき男で、彼が土にうちこんだくさぐさの經驗とともに私は彼の「妻」を聞かされたP・Wの社會で、誰もが「女」に腹を減らしている時、従つて話題の終結が常に「女」に墮落して行くのに、彼黒山は魂の妻をつつましやかに語つた。

麥熟れて入手もなきに刈入れの
梅雨に艱める妻を想えり

ひさびさに積る稻穂を掌にとりて
愛撫しむ妻の面影おるがむ

こんな歌を黒山は詠んだ。最後の「歌の集い」で私は「のろけられた話」をしてみんなを笑わした。歌を通じて公然とのろけた男として、私は木須と黒山を東西の横綱に推したのであるが、そののろけ方はかなり違つた雰圍氣だつた。木須の作を拾うとこんな調子である。

月の野を妻・子と行けば草わたる
風かぐわしきよき夢なりし

そと妻のまねくに寄れば吾子今し
夢に笑いぬ眸と眸微笑む

沖繩娘（アンガー）

宮古でも年頃の島の娘を「アンガー」と云つた。

私が、沖繩で最初に「アンガー」を見たのは、石川の收容所から小野山に移轉するトラックの上からだつた。疾走するトラックが、戦災をうけた島の人々の部落を通り過ぎた時である。そこには米軍の天幕や、トタン板やらをかき集めて急造したベラックが、昔の屋敷跡の石垣の上にあつたりした。私たちの移轉トラックは二十臺餘りも並んでいたし、それに私たちが日本のよごれた軍装をしていたので、直ぐ沖繩本島への新参者であることが分つたからだろう、部落の人々が大勢路傍近くにまでベラックから飛び出して來て手を振つてくれた。

部落の周邊は、形式的ではあつたが、鐵條網で區劃されて、そのバラ線には二十米おき位に、「Keep Off」（出入禁止）と書かれた板ぎれがぶらさがつていた。

今から俘虜生活を始めようとする私たちである。バラ線の中から手を振つてくれる娘たちの姿を意識した時、私はぐつとこみあげてくるものを咽喉のあたりに感じながら、靜かに右手を舉げただけでどうしても軽い気分にはなれなかつた。勿論若い兵隊たちは、

「おい、アンガーだ、アンガーだ」と絶叫しながらその歡聲でトラックをふるわしていたけれど、時速三十哩のトラックは、あたりの風景を黙殺して通り抜けてしまつた。

その後、私は作業に出ても、なか／＼沖繩の女性と會う機會を持ち得なかつた。唯作業場に通うトラックの往き復りなどに、荒らされた畑で芋掘りをするアンガーの一群を遠目で見たり、やつぱり米軍の作業場に通うらしいアンガーのトラックとすれちがうことはあつたけれど。

アンガーの滿載されたトラックに往き會うと、P・Wたちは遠慮なく奇聲をはり上げて呼びかけた。アンガーたちも、ほとんど例外なく愛嬌をふりまいて手を振つた。何と云うことはない、唯お互いに聲をはりあげて手を振るだけであつたが。

ところが、我々の作業が三カ月も續いてから、あるものはその技術を作業場の米軍から見込まれ、あるものはその作業場が氣に入つて積極的に頼みこんだりして、専屬としてきまつた作業場に

通うようになってから、つぎつぎと甘い話を耳にするようになった。同じ作業場で、部落から通つて来るアンガーと、毎日顔を合わせる幸運に恵まれる人が出来たからである。

私と同じ幕舎にいた横濱の青年Kもその一人だつた。彼はいつの間にか、P・Wの服に白い襟をぬいつけたり、洗濯したズボンを敷いて寝て折目をつけたり、作業場からもらつて来た短靴に油をぬつてエビカ／＼光らしたりして作業に出かけるようになった。

そして、時には、男手ではなか／＼出来そうにない人形を持つて歸つたり、米軍の敷布を材料にしたワイシャツを縫つてもらつて來たりした。

地方人と話することは作業場では禁止されているようだつた。従つて米兵の眼をぬすんではあわただしい會話を交し、お互いに前の晩に書いた手紙を交換するらしかつた。

私は、Kが作業場でビールを飲ましてもらつたといつてとても朗らかに歸つて來た夜、懇望して彼女からの手紙の一つを見せてもらつたことがある。是非その手紙をうつつさしてもらいたかつたのだが、一讀さしてもらうだけが精一ぱいだつた。だから次の手紙文は彼女の文そのままではない。

「K様

あなたは今日の作業場での出来ごとを御存知でしょうか。わたしたちの便所事件です。

誰かP・Wの方が非常に荒い言葉で書いた手紙をわたしたちの便所に置かれたのです。その手紙には「お前たちはそれでも日本の女か！ ヤンキーだけにチャホヤしやがつて！ 俺たちは男だぞ、日本の男だぞ。お前たちの便所の掃除までさせられるのは眞つ平だ。今後は絶対にお前たちの便所の清掃はお前たちでやれ！ 賣女共！」

と書いてあつたのです。千代ちやんがその手紙を持つて来て、私たちは斷然憤慨しましたわ。そして千代ちやんが代表で返事を書いたのです。

K様、私は今日私たちの總意で、千代ちやんの書いた手紙が、あなたまでもおこらしているのではないかと心配で心配でたまりません。

沖繩の女と、P・Wとが、對立してつまらないいさかいを起す事によつて、K様、あなたと私との間にもひびがはいるのではないでしようか。

K様、私は何もかもあなたに――。

はげしい戦争で、父にも母にもはぐれて、小さい弟とたつた二人だけの淋しい私――

K様、どうぞ私を、この妙子を誤解しないで下さい。はげしい戦争で、何もかも奪いとられた

妙子に、たつた一つの光は、K様！ あなただけです。

あなたはこの前「僕はP・Wだ。近く内地に歸らねばならないからだだ」とおつしやいました。妙子はよくその意味を考えました。だけど、K様！ 今の私にはそんなことをつつこんで考える餘裕がありません。もし出来たとしてもそれは怖しいことです。戀愛と結婚——それはつきものでしょうけれど、今の私たち沖繩の娘には未來のことなど考える心の餘裕がありません。現在！ それだけが私の命です。

K様、私はK様とお会い出来るだけで幸福です。十八日夜」

私は、この沖繩娘の戀文を見せられて愕然とした。Kはずつと私と同じ中隊にいた青年で、輕薄な色男だつたし、きつと私は單なる一時の相手として彼女と遊戯の戀をたのしんでいるに過ぎないだろうことを知っていたからである。

千代ちゃんが書いたと云うアンガールの總意によるP・Wたちへの返事と云うのは、Kから聞いたところによると次の様な内容である。

「沖繩の娘を侮蔑しないで下さい。私たちは戦つて來たのです。それでもあなた方は日本の軍人ですか。

日本の軍人なら軍人らしく、ずつと前に何故戦死なさらなかつたのでしよう。

P・W！　なんて恥かしいとは思ひになりませんか。

P・Wは米軍の命令を守ればいいのです。たとえ命ぜられた仕事が女便所の掃除でも――。

それがいやだつたら日本の男らしく腹を切つては如何です。」

この手紙は、その後「五三の便所事件」として小野山の話題を賑わした。「五三」というのは、Kたちやその彼女たちの作業場の固有名詞である。

お　喜　代

「那覇劇場」が第五回目の公演をやる時、華々しくデヴェューしたのが「お喜代とその楽団」だつた。

作業場から一つずつもらい集めた楽器をよせて組織されたと云うが、ドラム、アコーディオン、

ギター、ヴァイオリン、トロンベットなどに五つ位のハモニカをまげて、なか／＼賑やかなバンドだつた。曲目は主に、戦争以前に唄われた映畫の主題歌や流行歌だつたが、女装をした踊りなどがうまく組み合わされていて、ヤンヤと喝采を浴びた。殊に田野と云う青年のめずらしい女聲ソプラノは、きれいな女形の登場に一層花を咲かして、さかんにアンコールされた。

その樂團の指揮をとつたのが「お喜代さん」である。なか／＼元氣のいいタクトを振るかと思ふと、自分でアコーディオンを手にしたり、ギターをはじいたりして萬能ぶりを發揮していた。私はその時から「お喜代」という名前に一寸興味を感じていたが、その後私が芝居の脚本を書かされることになつて、演藝部の人たちと顔を合わす機会が多くなつてから、この「お喜代」と呼ぶ青年とも親しくなつた。

彼はなか／＼霸氣に富んだ好漢だつた。國鐵に勤めてスキーをやつていたそうだが、兵隊になつて沖繩に來た時は、私と同じように日本軍隊の最下級者だつた。ところが、米軍が沖繩本島に上陸して日本陸軍最後の日が近づくにつれて、彼の地位は躍進したのである。混亂した軍隊の末期には、絶対に指導者が必要である。しかもこの場合の指導者は、唯他人の御威光をかさにきた形式だけの襟章ではおさまらない。曾つての實力のない膽力の足りない上官たちは、簡単にその

正體を曝露する。

「お喜代」——彼の本名は堀越と云つた。後での混亂を防ぐために今後は本名でいこう——血の氣の多い青年堀越は、日本陸軍の斷末魔と、命の瀬戸際に於ける上官たちの意氣地なさに奮然として立つたのである。

そして米軍の追撃にばらくになつた日本軍の洞窟の生活が始まると、たちまちにして彼堀越は洞窟の王者になり上つた。その中には二人の將校と、彼の直接の分隊長をまじえて二十名ばかりの兵隊の外に、彼が洞窟に隠遁の生活を始める直前にぶつかつた沖繩の娘五人が一緒に居た。多くの兵隊たちは、敵弾飛雨の中で、自分一人の生命さえもてあまして、遁げまわつたのである。島の老人や女子供の悲惨な姿を見ても、これをかばう餘裕など全然なかつたのである。

堀越は昂然として、洞窟の兵隊たちに宣言したという。

「今日から俺たちの穴の生活が始まる。食糧を持つている者はみんなここに出せ。俺たちの命は共同の力で維持して行かねばならん。俺は責任をもつて、今から何か月か續く俺たちの穴の生活のために、食糧をかせぐ。

現在食糧を持つているものは、洗いざらいにここに出すんだ！」

二人の將校も曾つての分隊長も、この際の指導者であり得ないことを見て採つた堀越は、自ら表面に立つたのである。誰も反抗らしい態度を示すものは居なかつた。堀越は、曾つての分隊長の側にちかよつて、

「今後この穴の生活の指揮は俺がとる！」と斷言して、彼自身の上等兵の襟章と分隊長の軍曹の襟章を、力一ぱいもぎとつたという。

堀越を長とした穴の生活は、沖繩本島玉碎の報が傳えられた六月中旬から終戦後の八月末日までおよそ二カ月半に及んだが、彼は尻ごみする兵隊たちを残して、敢然と一人だけで食糧をかせいでまわつた。晝の間は大きな洞窟の奥深くに隠れていて、四周が夜のとおぼりに包まれる頃を見ずましては、拳銃を腰にさげて出かけたのである。或る時は米軍の幕舎にしのびこんで大膽に食糧を盗み出した。堀越は、實力をもつて、完全に洞窟内の王者となつた。當然の結果として暗い穴の中でも、彼は娘たちの尊敬をかち得たのである。

そうした生活が二カ月近く経つた頃、彼は一人の女を経験した。お喜代と呼ぶ、五人の中では一番歳若いおとなしい娘だつた。堀越はその頃の生活を述懐してこう云つた。

— 誰もものにおびえていて、横に女がいても手出しの出来るような奴は居なかつた。俺は本當に自然にお喜代と知り合つた。

だが、すつと一列に枕を並べて寝ているんだから、全然二人で聲を出したことはない。將來のことを話したりすることはなかつた。

— 勿論、斬込みに出かけるときはいつでも死ぬ覺悟だつたから、後のことを考える餘裕などなかつたが—

— 一べんだけこんなことがあつた。俺が斬込みに出かけようとすると、いつもそんなことはなかつたのに「今日だけは行くの、止して！」と云つてどうしても拳銃を渡してくれなかつたことが—

— 外の女たちはどう思つていたのか。俺がお喜代に「おいチビ！（これがお喜代の洞窟内での愛稱だつたらしい）こつちに來て寝るんだ。貴様は俺の當番だぞ」とどなりつけたりしていたので、いつの間にか「お喜代ちゃん、堀越さんのとこにやすむのよ」といつてお喜代の寢床の定位置を俺の隣に決めてしまつたさ—

— 友軍の大尉が終戦の報を持つて來た時だ。

俺たちに穴を出ると云うんだ。俺はどうしても日本の降伏など信じられなかつた。だからはつきり断つた。傍でお喜代が「穴を出るんでしたらあたしを殺して！」とはつきり云つた。

——八月の末、愈々穴を出る日の朝だつた。

俺たち兵隊は石川の收容所に、そして女たちは地方人だけの收容所に離ればなれになる最後の朝だつた。みんなを穴から出してあとを見届けている俺のところにお喜代が近づいて来て、

「ねえ、お願い。二人で、二人だけでここに残つて！」と云うんだ。

そして今までに示したことのない情熱をもつて、俺の腕をつかまえて離さなかつた——

こうした述懐を堀越から聞き出したのは、私と堀越とがすっかり親しくなつてからである。

だから、私はそのまゝに、堀越がこの小野山の鐵柵の中から、お喜代の所在をたしかめるために如何に腐心したか、そしてお喜代の所在を確かめ得て如何に狂喜したかを、よく知つていた。

お喜代には、この夏、坊やが生れた。堀越は坊やの生れる日を、鐵柵の中でひたすら待つた。

そして彼の出来る最大の努力をはらつて、精神的に物質的にこの洞窟の妻をいたわつた。小野山の醫務室で懇請入手したヴィタミン錠や脱脂綿を届けるために凡ゆる手をつくして連絡したり

した。

堀越はつきり斷言するのである。命がけで結婚した女だ。いくさのどさくさにすてばちになつてくつついた唯の女とはわけが違ふ、と。だから彼は沖繩に残留することを、はつきり希望していたが、種々手を盡して調べた結果、日本軍俘虏の現地残留は許可しないという米軍の意圖を知つてしよげきつた。

堀越は郷里に一人の母を残している。彼は母に對しても、お喜代との結婚を報告してその諒解を求めたようである。

歸國したら、すぐお喜代を呼ぶ手続きのために、いま堀越は事務的な努力を續けている。

「お喜代とその樂團」！ 堀越は自分の指揮する樂團にそう命名して、はりきつてタクトを振つた。私は彼に所望されて子守唄を作つた。彼は今熱心にその作曲に頭をひねつてゐる。

沖繩の母——お喜代に捧ぐ

1

泣くんじやないよ ねえ坊や

いとしお前の父さんは

遠いお山の向う側

だけど命の瀬戸際に

かたく契つた日本の

人よ おとこよ ねえ坊や

この母さんと二人して

風に涙を飛ばそうよ

2

泣くんじやないよ ねえ坊や

お前は曾つて日本が

世界を相手にふんばつて

闘い抜いたあの頃の

強いお國の一つだね

はつこり笑つて ねえ坊や
この母さんとあの高い
お空の星を数えよう

3

泣くんじやないよ ねえ坊や
お前が泣けば未だ若い
この母さんも泣けて来る
彈で倒れたあの山の
松も若芽を出す時が
きつと来るわよ ねえ坊や
涙をふいてむらさきの
夢に逢おうよ 父さんに

灰色の戦友

六月の暑い陽がじり／＼と照りつけている午後だつた。作業から歸つた私は、P・Wの事務をとつている本部幕舎の横にぼんやりつつ立つてゐる異様な四人の戦友を見出した。ぼろ／＼の日本軍衣をまゝとつて顔は灰色をしている。その瘦軀から見ても、一見私の心をうつものがあつた。未だ山に籠つて頑張つてゐるといふ戦友のいることを聞いたことがあつたからである。

私たちのM・Pの一人で、ケンタッキーと云うニックネームで通つていた快活な米兵が盛んに四人にまくし立ててゐる。通譯の近江がそばにいた。私は手短かに近江の説明を求めた。

四人の灰色の男たちは、今日はじめて洞窟から出て來たのであつた。終戦後すでに十カ月、國頭あたりの山に籠つたまま、晝は洞窟の奥深くにひそんで、夜になると或は芋を掘り、或は雜草を探めて、今まで生き伸びて來たと云う。終戦のことも昨日偶然ぶつつかつた島人からそれを聞

いたが、どうしても信じられずに、今日は洞窟に迎えに行つた米兵に案内されて、終戦の實相を見せられているのだという。私は驚きと共に、彼等の姿を見直した。魂だけで生きて來た逞しさ、眼光にだけ集中されたように、ぎよろ／＼とあたりを見まわしていた。若いのであろうが、一寸年齢の見當もつかかなかつた。話しかけたい衝動をおさえて、私は自分の幕舎に歸つた。その夜、幕舎ではこの四人の灰色の戦友が話題になつた。

——すごいじゃないか。今まで降伏せずに頑張つていたんだぞ
と感激してるものが居るかと思うと、

——あんなの馬鹿だよ。徒らに今まで苦しんで……………
と茶化すものも現われた。

恐らく終戦について今まで全く聞く機會がなかつたとは、私には思われなかつた。唯、「日本の勝利」だけを信じきつて居たために、それ以外の一切の現象に目を瞑つたのに相違ない。銃聲が聞えなくなつて随分永いこと經つたのに、彼等は一途に戦闘中の生活を持続したわけである。

この意外な事件にぶつつかつて、自らの洞窟時代を思い出した堀越は、かなり興奮したようだ

つた。彼は洞窟から出て来た灰色の戦友について批判するかわりに、P・Wたちの安易な観方や考え方が癪にさわるらしかった。そして生來の純真な短氣さをぶつつける様に、

——この頃、ダンスなんかやつてる連中まで居るじやないか。何だ、あれは！

と荒つぽくどなつた。私は戯れにはあつたが、O・B・Cの武田や宇都宮なんかと、「歸つたらきつとダンスホールも出來てるぜ」と笑いながら、男同志のステップを踏んだりしたことがあつたので、どうも一途な堀越の言葉にはまいつた。しかも丁度一年に近い洞窟蟄居の生活から出て来た戦友に驚いた日だつたので——。

だが、こうした機會こそ、考えていることを話し合うには逸すべからざる好機である。興奮している堀越をつかまえて、

——今からの生き方は難かしいぜ。物事を片つ方からだけ見て斷定を下すことはやめなければいかんな、と話しかけた。初めはなか／＼私の云うことを聞こうとしなかつた堀越だつたが、「お喜代」に純情を捧げる彼を知つていたので、私は辛棒強く夜更けるまで彼と語つて、私のダンスの責任をとつたのである。その夜堀越とだべつたことを、私は、その週の「小野山タイムス」の「風聲空語」欄に次のように書いた。

風聲空語——

島國根性、偏狹、排他、ひとりよがり、井中の蛙、閥、セクシヨナリズム！ この一連のものの考え方が日本を敗戦に導いたことに、はつきり氣づかなければならない。「大日本は神國なり」と獨りで決めて、それだけに依存して來たのが過去の日本人であつた。特攻の華と散つた純情な若人の愛國心も、あたら南海のさかなの餌と化し去つたことを、感傷の涙をふりはらつて、はつきり認めることこそ、再建日本の思想的出發點である。

「俺はダンスはきらいだ！ 見ただけで胸くそが悪くなる！」と云う人がある。だが、自分だけが胸くそが悪いからといつて、それを他人に押賣りして、他人の行動や心まで抑制しなければおさまらぬのは偏狹である。そんな偏狹なものを日本精神と混淆してはいけない。

好むと好まざるとに拘わらず、今からの日本にはダンスは氾濫するであらうし、神宮球場は米軍の専用になり、歌舞伎座の特等席は米軍將校とその愛する夫人たちによつて占められるのである。彼等が、神聖なる伊勢神宮の境内で、熱い接吻を交していても、日本人は見ないふりをしていなければなるまい。泉岳寺は「ハラキリ日本」の笑話の殘骸として扱われ、お堀に圍ま

れた宮城の靜謐ささえも、街の中にある輕井澤ホテルのガーデン代用として、使用されるかも分らない。我々が永い間、高いものとしてうけつぎ、守り續けて來た日本の精神的な存在の總ては、極めて軽く、あつさりとふみにじられるに違いない。

だが
だが——

今こそあらゆる過去の日本的なものに新しい批判を加えるための絶好のチャンスではないか。總てを世界的な視野から見直して、棄てるべきを棄て、守るべきを守るのだ。如何なる嚴正な批判にも堪えようではないか。「敗戦」という大きな現實が、我々に與えてくれるものありとすれば、過去の日本をゆすぶつてゆすぶつてくたくたにして、更にその下から湧き出て來る力を自覺さしてくれることだ！

洞窟から出て、明るい太陽の光をまぶしがつた四人の灰色の戦友を見て、私の感慨はこんな風に流れたのである。

姫百合の塔

首里の山柔き乳房に彈あてて

純き生命を咲き散らしひと

文藝部の投稿歌の中から見出した一つである。

竹 島 慧

作者の竹島は、哈爾濱の義勇隊幹部訓練所にいたという眞面目な感じのいい青年で、よく私の暮舎にも訪ねてくれた。一夜私は「柔き乳房」の話を持ちだしたことがある。竹島は私と同じように宮古組で、沖繩本島の激しい闘いの経験は持たなかつたので、「沖繩の兵隊から聞いたんですが」と前提しながら、彼の作歌の素材に就いて語ってくれた。手榴彈をいだいて暗い洞窟の中で自ら生命を断つて行つた女學生の純情な最後を語る竹島は頬を紅潮させていた。私も断片的な彼の話を心の中で綴り合わせながら、若い心の昂ぶるのを覺えた。

それから二三日経つた夕食後、竹島は「こんなものが手にはいつたんですが——」といつて一冊のノートを示してくれた。ノートは彼の友人のもので、流行歌詞が書いてあるかと思うと、文藝部で発表した作品をうつしてあつたり、「沖繩戦記」と標題のある美文の勇ましい文章がのつていたりした。

その中に「姫百合の塔」と云う題のついた一文があつた。竹島が特にこのノートを持つて來てくれたのはこの一文のためだつた。すつと目を通して、「誰が書いたのか分りませんか」と尋ねたが、全く見當がつかなかつた。「何でも沖繩戦記の方は沖繩で戦つた讀賣の記者だそうです」とだけ説明してくれたが、私には美辭麗句を並べた實感の乏しい沖繩戦記には興味がなかつた。

「姫百合の塔」は二三日前に竹島の口から聞いた話とは、事件の位置は相違していたが、筋が通つていたし、好意の持てる小品であつた。

すつとあとになつてこの原作者が、小祿收容所にいる三瓶と云う三十三になる人であることを知ることが出來た。讀みものに飢えたP・Wたちのために、彼が作業場で、島の娘から聞いた話を綴つたもので、小祿で毎週一回すつ聞かれた朗讀會で好評を博したということも聞いた。東京の女學校からどこかの豫科練にも教鞭をとつたことがあり、やつぱり宮古島では私と同じように

初年兵の苦勞をやらされた人だと聞いて、私は深い親しみを覺えた。きつといつか會える日があ
るに相違ない。

だがここに拜借する彼の小品は、P・Wたちが順々に寫しまわつたもので、實に多くの誤字が
まじつているところを見ても、或いは抜かされたり飛ばされたりしてかなり原作とは變形されて
いることが想像出来る。寫本を作り合つて鐵柵のくらしを愉しんだP・Wたちの生活を如實に物
語るものとして、そうした誤寫や變形も亦、原作者は微笑んで見のがしてくれるであろう。

“ 姫 百合 の 塔 ”

三 瓶 達 司

蒸し暑い空気が雨に濡れている衣服の下で肌になつとりと膏つこい汗をにじませている。

何時迄降り続く雨であろうか。戦に敗れた人々の胸はこの陰鬱な雨のために一層重苦しいいら
いらした壓迫を感じた。

昭和二十年五月の末、糸満街道は逃げまどう島民の群で混亂雜踏を極めていた。日が暮れてグ
ラマンの執拗な襲撃が杜絶えると同時に、あちこちの家から這い出し流れ出して来る彼等は、と
もかく今夜の中に再び身をかくすべき場所を發見しなければならぬと云うせつばつまつた焦慮

にかりたてられていた。

去年の十月十日の空襲に那覇は完全に灰燼に歸し、前線より追われ追われた避難民は更に糸満に向けて奔流したのだが、同時に糸満も敵上陸の可能性が濃厚となり、那覇方面へ待避しようとする人々が氾濫した。彼等はこの路上で衝突した。雙方の危険性はいよいよ誇大に傳えられた。

「那覇の方に身をかくす所があるもんか」

「糸満だつて同じ事よ……」

「那覇は敵の陣地で一パイだぞ」

「糸満にはもう敵が上陸しているんだ」

烈しい混乱が湧き起つた。彼等はもうどこへ行くと云うあてもなく、ただむやみにわめき乍ら右往左往するばかりだつた。

糸満方面の友軍陣地は既に潰滅し、一つの堡壘、一人の歩哨の姿も認められない。時たま彈藥輸送の輸送車の列がこと／＼と通つた。

島民等はそれをけがらわしい物でもいとう様に道ばたに避けた。彼等の胸の中には敗れた軍隊に對する理由のない憤りがあつた。地下足袋で輜重車を曳きすつて行く兵隊達がなんとも云えな

い愚かしいものに思えてそれ等を口汚くのものしつたりした。

「今頃になつて車に弾なんか積んで何になるものか」

「車でてくてく歩いてゐるうちに糸満は火の海にならあ！」

敵の秀れた科學兵器と物量の豊かさを、まざまざと眼前に見せつけられた彼等には、もう幾時代か前の様式で戦つてゐる友軍の兵隊達が、全部の敗戦の責任を負つてゐる様な錯覺にとらわれていた。

彼等を見るものきくもの何もかもが憤ろしく不愉快で、手をあげ足をならし獸の様な叫び聲をあげたりした。その間も敵の迫撃砲や艦砲がたえず頭上に炸烈した。混乱の人の群は大きな渦を巻いて僅かにかくれるものを求めて身を伏せたが、その度毎に何人かの生命が碎け散つた。

烈しい叫喚と慟哭、正に悲惨極まりない地獄圖繪であつた。が……此の一群の中にここばかりはしんとした一團の避難者があつた。彼等は黙々として歩いてゐる。

しぶき降る雨の中にそれはあたかも葬送の列の如き足どりであつた。何ら秩序もなくごつた返してゐる島民の中を、彼等のみは肅々とした隊伍であつた。

鋭い砲聲が響くと彼等はがばと道に伏して互いにかばい合つていたが、直に又無言の行進を始

めるのであつた。

それは沖繩女子師範學校の生徒八十名と、第一高女の生徒數名それに若干の傷病兵の一團であつた。彼女等は戰が熾烈の度を加え負傷者が續出するや榛原の野戰病院へ勤務する様になつた。まだ十七、八歳の少女ばかりであつたが、清純な彼女達は戰の現實に直面して一點の疑惑もなく唯々愛國心の一途に燃えていた。

「大君の御盾として」——之は彼女達にとつてこの上ない美しい熱情であつた。野戰病院勤務が決定された時彼女等はむしろ欣然としてその求めに應じた。それは恰も男子の應召の如く限りない晴れやかな情感であつた。戰を恐れると云う様子よりも自ら進んで自己の生命を戰の中に没入させようとするきびしい情熱が身内をゆすぶつたのである。

それだから今日日本が戰に敗れ、この街道を逃避する様な運命がめぐつて來ても、悔恨から生れる歎きはすこしもなかつた。

生命を失うかも知れぬと云う本能的な恐怖はあつたけれどそれははつきりした意識として表わされるものではなかつた。彼女達の心を蔽つてゐるものは唯直面してゐる戰の相のみであつた。赫灼たる照明彈が絶え間なく雨空にかえつた。それは闇の中に白日の明るさをなし、その閃光の

きらめく度に彼女達は思わず傍を歩く松葉杖の兵隊の脇をささえる手に力をこめるのであつた。泥まみれの服も、それにひしとよりそつている少女達の服も、雨のためにぐつしより濡れてゐた。顔は打續く苦痛と疲労のため引きつる様にゆがんでいたが、緊張したその目は雨のしたたりを受けて一分のすきもない美しさに光つていた。

そして明るく照らされた光の中に、自分の周囲を見まわして友の姿を發見すると、今更の様に「私は生きていたのだ」と云う切實な生命感を暖かく身内に感じて、自分の通つて來た道を振り返つてみたりした。

五一七高地らしい方面は、ここから見ると空を焼く紅蓮の炎であつた。自分達が嘗つて生活していた家も土地もいま一面の焼野原になりつつある。彼女等の胸を云い様のない悲嘆の幻がかすめた。そして果しもなく懐かしい父や母や姉や妹や……そして親しい友達の様や、過ぎし半生の想い出が走馬燈の様にくるくると脳裡を走つた。けれどもそれを口に出して云うものは一人もいなかつた。今一人がそんな事を云い出せば、一度にわつと泣きたくなる様な感情であつた。「何もかもあの燃えさかる炎と共に燃えつくされよ」彼女達は濡れた髪をぶると振ると、又追われ行く死の行進をつづけるのであつた。

然し……歩いてても歩いてても戦の火はすぐ背後に迫つてゐる様に思われた。不氣味な音の弧線を描いて飛んで来る砲弾は、その一つ一つが彼等の一人々々を追撃してゐる様に思われた。

豊見城を通り、半座を過ぎて漸く彼女達が友軍の第一線陣地たる糸満に辿りついた頃は、そのはだしの足は肉破れ血にまみれて眞紅に染まつていた。

もう此のあたりで、どうしても隠れるべき洞窟を見出さなければならぬ。疲れ果ててゐた傷兵たちのほげしい息づかいを聞く度に少女達の心は焦つた。けれど適當な洞窟を發見する事が出来ず、糸満の更に南にある米須附近まで来て、漸く彼等を收容するにたる洞窟を見出す事が出来た。彼女達は生き返つた様に傷病兵を中にかつぎ入れた。患者達は極度に疲勞し、朽木の様にぶつ倒れてしまふ。彼女達はびしょ濡れの衣服をしぼる暇さえなく直に患者達の介抱に當らねばならなかつた。繻帶を取りかえる者、傷口を洗うもの、藥をつける者……衣服をきかえさしてやるもの、水を汲みに行くもの、寢場所をつくるもの、彼女達は衛生兵を助けて一瞬の休息すら攝らうとはしなかつた。やつと自分達の體にかえつた時にはもう夜は白々と白みかけていた。併し夜が明けると云う事は生命が危険にさらされると云う事である。彼等は洞窟の奥深く居を移し砲撃爆撃の強襲からのがれなければならぬ。彼女達は改めて洞窟の中を見廻した。

此の天然の洞窟の奥はどの位あるか見當もつかなく、たが實際に人の住めるのは約十米位に限られていた。然し内部には既に島民が待避し、息苦しいまでに不潔な空氣が満ちていた。

此の暗澹たる石の洞窟が自分達の最後の床となるであろうか……。

彼女達の腦裡にふといまわしい死の幻影が走つたが、それを考えつめる事が出来ない程、今はぐつたりと疲れ果てていた。

腰を下しているとすぐうとくと眠つた。だがものの三十分もたたない内に患者のうめき聲は彼女達の眠りをさました。殆んど休息を取るひまもないうちに又夜が來た。依然として迫や艦砲の彈雨が洞窟の附近に降り注いでいる。その僅かな隙をみては彼女達は寢床をつくる草を取りに行つたり、携帶糧秣の不足を補うべく芋を掘りに行つたり、偽装を完全にするために働き続けるのであつた。

洞窟の中の島民は全く自我の塊になつていた。自己の利益になる以外の何物にも手を出そうとはしなかつた。二歳の嬰兒は何一つ喰うものもなくヒリ／＼と乾いた泣き聲をたてていたが、その母がおろおろ泣き乍ら食を乞うても人々は白い目をそそいだのみで、くるりと背を向けてしまふ。一個の芋が紛失したと云つては誰彼に呪わしい聲を浴びせかけている中年の男もあつた。

彼等の間では醜い慾望の争が絶える時はなかつた。

少女達は傷病兵の看護に忙殺される一方此の様な島民の心とも戦わなければならなかつた。彼の心は彼女達にとつてたえがたい忌わしきであつたが、之にもきびしい忍従を以つて堪え様とした。そればかりではなく、この島民へまで暖い手をさしのべた。幼い子供達を木當の弟妹の様に世話したし、足腰のたたない老人に親身の親の様に仕えた。

自我の塊の様な島民の中にも人知れず彼女達に感謝の涙を流すものもあつた。……

洞窟の外の敵弾は愈々その凄まじさを加えて來た。那覇方面に進攻して來た敵と糸満に上陸した敵とは、遂に糸満に於いて合流し友軍との間に激しい戦闘が開始されていた。迫と艦砲との攻撃は益々激しくなり空襲は一層熾烈になつた。

人々は食を求める爲にも洞窟を一步も出られない日が多かつた。沖縄戦が敗れたと云う事は今や常識の様に洞窟の中の人にも考えられて來た。或る夜島民の一人が芋掘に行つた時ふと手にふれた一枚の紙片を拾つて來た。僅かにもれる光に照らして見ると、それは敵が散布した宣傳文の一つであつた。

「日本は既に敗れ去つたのである。お前達は速に降伏せよ。我々は決してひどい事はしない。

又食料も與える」彼等の間に沈鬱な動搖が起つた。既に日本を離れていた人々の心は一息に敵の中にかげこもうと云う衝動にかられた。彼等はもう一刻も此の暗黒の中に坐してゐることはしのびなくなつた。然し彼等も自分一人でこの擧に出るのが後めたい様な氣がし、お互いの心の中を探り合い、思い切つて洞窟を飛び出して行こうとするものもなかつた。

それに又敵がどの様な振舞に出るやも知れぬ不安の氣持もあつた。が彼女等は彼等とは全然異つていた。彼女等の毎日の生活には其の様な誘惑の影がしのぶだけの餘裕はなかつた。あまりにも切迫した日々の生活であつた。

起きて働いている時も疲れて眠つてゐる時も、それは恰も機械の如く彼女等を支配してゐた。その心の中に一貫して流れているものは、ただ戰の現實と悲壯な感激のみであつた。

彼女等のこの健氣な活動に深く感動した附近の兵隊達は、しばしば此の洞窟を訪れては、何かと援助を惜しまなかつた。

清純な乙女等と熱血の青年達はその感激の中心に、大君と云う象徴を見出してしつかり結合してゐたのである。

「敵既に糸満に在り」と云うことが明瞭になつた一夜、兵隊達には特攻の命降り、彼等は最後

の訣別を告げるべく此の洞窟を訪れた。

その時數人の少女が此の肉攻班に加わる事を嘆願したのである。兵隊達は驚いて止めた。

然し彼女達の嘆願が一時的の激情でなく、もつと根強いものから發している事を知つた時、兵隊達は涙と共にその申出を受け入れようと思つた。そして少女と共に班長に願つた。折から雲間がきれて凄いな月光がしつとりと濡れた草々を照らし出した。肉攻班長は黙つて彼等の云う事をきいていたが、やがてきつぱりと一言「よし」と云つた。其の青黒い頬を數行の涙が傳わつていた。

間もなくその美しい幾組かの肉攻班はしつかりと手を取り合つて出發した。出發に際して少女等は此の死の出陣を心から祝い度いと念じたが、唯さん／＼と止めどない涙だけがその饒けであつた。彼女達は齒を喰いしばつて泣いた。兵隊達も泣いた。此の世にある限りの最も美しい涙が暗い洞窟の中一パイに充滿した。

「立派に死んで來ます」そう云つて出て行つた彼女達は、遂に再びその姿を洞窟に現わさなかつた——。

敵はいよいよ間近に迫つて來た。砲彈が洞窟の入口の岩片を吹き飛ばす様になつた。人々は愈

愈奥深くもぐつた。夜も晝も窒息する様な沈黙の空氣の中にちぢまっていた。

たつた一つの島民の持つていた時計まで止つてしまつた。

少しでも身を動かすとそれがいやに音高く洞窟に反響した。息をするのさえ苦しい様な深海の静けさであつた。突然うす氣味悪い轟音が地響きして通りすぎた。戦車である。敵は遂に來たのだ、一臺がすぎると又一臺が迫つた。後から後から轟音は續いた。洞窟の中で全身を耳にしてゐる彼女達の握りしめた手が脂でじつとりと濡れていた。

途端に洞窟の入口で數發の爆雷が轟然と爆發して不覺にも數名の者の姿が消し飛んだ。愈々敵の馬乗り攻撃が始まつたのである。

もう彼等は一步も洞窟外に出る事が出来なくなつてしまつた。彼等は蛆虫の様にうごめいて僅かに手にふれる物を何んでも口に入れる様になつた。

餓と闇の息苦しい沈黙の中に渦卷いてゐる彼等は、今や完全なる屍である。生きてゐるものもただ病的に鋭くときすまされた神経だけであつた。

それは痛酷なる神経の拷問であつた。斷頭臺上に首をさし延べて、鋭い刃物の落ちて來るのを待つ時の氣持でもあつた。十字架に高々と吊されて眼前に槍の穂先を見る様な心持でもあつた。

一人の老婆は突然飛び上ると、ひからびた聲でからからと笑い出して、洞窟の中をくるくる駆け始めたが、尖つた岩角に頭をぶつけると藁の様にひしやがれてしまった。

今朝迄殺してくれ殺してくれとうめき叫んでいた一人の傷兵は、傷口を眞紅にただせたままその夕刻にはもう石の様に冷たく硬くなつていた。

いつの間にかその舌は嚙み切られていたのである。

此の様な洞窟内の惨状にも拘らず、翌日になると時を同じうして再び敵の馬乗り攻撃がやつて來た。爆雷は更に奥深く投げ込まれ黄燐彈迄これに加わつた。その特有の窒息性瓦斯は低く洞窟の底を這つて流れ込んで來た。又數名の者が朽木の様に斃れて行つた。

もう人々ははつきりと、死か降伏の境を見極めていた。選ぶべき道は一つしかないのである。その日遂に此の洞窟から數人の島民が去つた。残つたものはうつろな目で何んの感動もなくそれを見送つた。それを見送る少女達も心の中にはかすかな反撥をするものがあつたとは云え、然し彼等の行動を輕蔑したり憎んだりする氣にはなれなかつた。

ただ彼女達には、自分達はこれ等の傷病兵と共に死ぬ事が、何か前世の深い因縁の下に定められていたように思われたのである。

彼女は今更の様に自分達の身の廻りを眺めた。何と云う變り果てた姿であろう。

鳥の巢の様に亂れて肩を蔽っている頭髮、汚れはて泥にまみれた顔、ぎよろ／＼と異様に光る目、スキツと尖つた頬、飼ひ猿の様に干乾びてから／＼になつた手、鋭い眞黒な爪、枯木の様な土色の肌、ひとでの様に生氣のない足、そしてそれ等を蔽うぼろ／＼の制服、……彼女等はほろほろと泣けて來た。何の心配もなく、又苦勞もなく楽しく過して來た、半生の思い出が強く胸を締めつけて來た。

父母や弟妹等と仲良く圍んだ夕餉の膳が、傷々しく腦裡をかけめぐり、苦しませた。

「死のう！ 自分達が家を出る時から既に今日あるのは分りきつていた事ではないか。何もかも終りなのだ。せめてきれいな死を迎えよう」

彼女達の心に清らかな光の流れが靜かに湧き出して來た。

次の夜、彼女たちの中でもすぐれた美しさと快活な動作とで人氣の中心になつていた信子と貞子と云う姉妹の少女が、今迄一度も開いた事のない布包みを開いた。その中から出て來たのは一度も手を通した事のない制服……これこそ少女達の純潔の象徴であり、これあるが故に彼女たちの清潔さが保たれている様な、ほこらしい衣裳なのだ。

彼女たちは黙つてそれを着た。それから更に二人は包の中から小さな化粧道具を取り出すと、見えぬ目を見交し乍ら、互いに顔を美しく化粧し始めた。

姉妹の動作をいぶかしげに見ていた他の少女達は、おぼろ氣乍ら彼女達の心が解り始めた。ほろり／＼とまるで齒が抜けて行く様に、自分達のまわりから姿を消して行く人々ではないか……。彼女達も「ああ、とうとうあたし達の間からも降伏者が出たのだ」その最初の人が信子さんと貞子さんであるのは意外だつたのだが、然しとがめまい、あざけりもすまい、みんな致し方のないことなのだ。

美しく粧えば粧う程、淋しい彼女達の姿ではないか……。少女達は眼をつむつて二人の方を見まゐりと思つた。

二人の少女は手をかたく握り合つて入口の方に歩いて行つた。

と、突然の大音響が起つた。かつと開いた火焰の炸烈の中にのけぞり斃れる二人の姿があつた。自決だ……。少女達は泣きはしなかつた。涙を流して泣くには餘りにも痛烈な感動なのだ。

「信子さん！ 貞子さん!! 待つていてね、私等もすぐ後から行きますわ……」

少女達が此の洞窟にこもつて二週間たつた六月の或る日、彼女達の傷みはた耳にもはつきり

と入口の方にすさまじい音をきいた。それは地獄の爆破のひびきにも等しかつた。一氣に人間のあらゆる生命を併呑してしまふ様なひびきでもあつた。彼女達が洞窟の入口を見た時、そこにちらりと火焰の一閃を認めた。身體中の血が逆流してぐつと脳天をつきあげた。

一瞬彼女達はけたたましい叫び聲を上げた。そして眼を大きく見はつたまま、ぱつたりと失神してしまつた。

巨大な蛇の舌の様な炎が、ペロ／＼と斃れた少女達の上をなめていた。

戦終つて一カ年、糸満街道を米人のジープやトラックが沖繩特有の蒙々たる砂けむりを捲きあげて疾走する。

そこには新しい建設と融和の光が輝いている。

少女達の死んだ洞窟はすつかり片附けられて、僅かに火焰放射器の重油のあとが、所々に洞窟を黒々とくすませている。

島の人々はこれら美しい心のまま死んで行つた少女達の冥福を祈つて、洞窟を「姫百合の塔」と名づけた。

捕 虜 の 話

「アメリカに行つた捕虜というテーマはどうだ」

松本が新聞記者らしい興味のある話題を持ち出した。

「今日、偶然に発見したんだ。この柵内に三人居る——沖繩の戦が始まつて、一週間位で捕虜になつた男たちで、ハワイから米本土に送られて、點々とアメリカを歩いたと云うんだ。サンフランシスコからテキサスあたりをね——。そして終戦後、再びこの島につれて來られたらしい、今年の始め頃に——」

「そいつあ、面白い。是非話を聞こうじゃないか。呼んで來いよ——」私は賛成した。

「善はいそげだ——」福山がおだてた。

その夜は芝居の練習もなかつたのでステージに陣どつて私たちのグループは時間を空費してい

た。松本は早速話題の主をよびに出かけた。だが三十分も待たした頃、

「失敗だよ」としよんぼり一人で歸つて來た。

「拙すかつたよ。みんな聞きたがつてるからアメリカの話をしてくれときり出したんで、すっかり尻込みしちやつてねえ——」

「どうしてだい？」

「やつぱりこだわつてるんだ、早く捕虜になつたことを——」

「どうしても駄目かい？」

「いろ／＼くだいたんだが、みんなで話を聞くと云つたのがいけなかつた——」

そんなわけでせつかくの面白い話題を直接聞くことは失敗に終つたが、松本を通じて聞かされたP・Wの觀たアメリカの斷片は、私たちの好奇心をかき立てるに充分だつた。

——どんなひどい目にあわされるか分らない、おびえた氣持でいつもいた。

——うまいものを食わされると、死の饗宴にでもあずかるような、暗い氣分になつて、なか／＼のどを通らなかつた。

——どこに送られるか見當もつかぬまま、ながい夜汽車にゆられた時だつた。汽車の窓ごしに華

やかな夜景が點滅する。ダンス・パーティーのようなものさえ聞かれているのが目に映る。

それが戦時下のアメリカ風景だつた。

——とももう日本人としては生きては行けない。いつそアメリカで無茶苦茶な人生を過す術はないかとも考えた。

松本はそんな話を受け賣りした。そして彼等は今も尙、何となく後めたいものを感じていて、彼等が沖繩戦の初期に捕われたことに觸れるのを好まない事實を「やつぱり日本人だなあ」とつけ加えた。

「是非、その男たちの話を直き直きに聞きたいもんだ」とみんな未練を残しながら、その夜私たちはさかんに「捕虜の話」をした。

どこから入れたニュースか根據はなかつたが、——捕虜第一號は眞珠灣の軍神だそうな、とか、——南郷少佐は生きてるそうだけ。

といった話も飛び出した。

——一體内地の學生が沖繩のP・Wに反感を持つてているというのはどう云うわけなんだ？

と、その頃傳えられていた内地の噂もとりあげられた。沖繩から病院船が着いた時「日本が戦に

敗れたのは沖繩の兵隊がだらしなかつたからだ」と云つて一群の大學生が「沖繩の兵隊をやつつけろ！」とおしよせて、亂闘が演ぜられた、という話がまことしやかに傳えられていたのである。事實の眞偽はわからなかつたが「内地の人々がP・Wにどんな感じを持つてゐるか」は我々の重大關心事だつたので、この學生との問題は柵内生活にかなり大きな渦を捲き起してゐた。

——太平洋戦争のかがが沖繩の兵隊に握られていたと解釋する程、單純な大學生がいるとすれば、これは日本人の知性の缺除を物語る代表的な事件の一つだぜ。

——そうだ。その知性の缺除こそ敗戦の大きな原因ではなかつたのか。

——制空權と制海權を喪つたこの島で戦わされた兵隊たちこそ、最も悲惨な犠牲者だつたのだ。

——犠牲？　こんなのは犠牲とは云わないんだ。犠牲とは少量のマイナスによつて、より多くのプラスを勝ち得ることだ。まあ碁で云う捨て石だな。

沖繩の兵隊は決して捨て石にもなれなかつたじゃないか。

丁度そんなことをだべつてゐるところに、沖繩組のKが顔を出した。彼は終戦後九月まで洞窟で頑張つた男である。

「俺が穴を出て石川に行つた時には全く驚いたよ。斬込みに行つて、すつと前に死んだ筈の男

が、何人も涼しい顔をしていやがるんだ。どいつも血色のいい顔色で「大變だつたな」元氣でよかつた」なんてなことを云つて親しく俺の肩をたたくんだ。俺はぶんなぐつてやりたい様な衝動にかられた！」

Ⅴは昂ぶる心を壓えるようにしながら、その頃の石川收容所の話を續けた。

——慶良間の守備隊長をしていたⅡ少佐の話を知つてるかい？

あいつは、四月の始めに——敵の沖繩攻撃がはじまつて二三日経つたばかりに、手をあげてやがるんだ。しかも女を連れて出て來たそうさ。俺は石川でその野郎に會つた！

彼は語氣を荒くして續けるのである。

——のう／＼と將校幕舎に大きな顔をしてやがつたので、みんなで呼び出してやつた。さすがに萎れてやがつた！ 顔も上げきらずに、何を聞いてもだまつてやがつた！

——なぐつちまえ！ と誰かがどなつたとたんに鐵拳の雨さ。俺もぶんなぐつてやつた！

——あんな將校が隊長でござる！ と頑張つていやがるんだからかなわないうさ。それに、みんながひどく憤慨した原因がもう一つある。それはこうなんだ………

——未だ敵が來ない頃、Ⅱの部隊で畑から芋を盗つて食つた兵隊があつたそうさ。Ⅱの野郎、さ

かんに軍規々々と偉そうなことを云つてた時で、その兵隊を殺せと命じたそうだ。しかもUの命令でその兵隊を突き刺した下士官が、丁度石川と一緒に居たんだ。

KのそうしたP・W生活初期の話は、私たち宮古組にはめずらしかつた。いためつけられた日本の軍隊生活の反動が、暴行事件となつて現われたことは、當然だと思われた。そして、恐らく士官學校五十二期だともいうUの降伏の場合でも、事件は一方的に觀られて語られているだろうとは考えたが、誰もなぐられた日本將校にはあまり同情の意を表わさなかつた。

こんな場合、私は私自身の心の中に、へんに矛盾したものを見出すのであつた。それは、私自身が直接にぶつつかつたいやな上官の事だつたら一緒になつて油をそそぐのであるが、關係のないよその話の中に、あまりにも強く日本軍隊の舊惡や無統制を曝露されると、何だか冷たい淋しさを覺えることだつた。

P・W 根性

「沖繩新聞」に「米人から觀たP・W」というテーマで、米軍の將校やサージヤンの感想をたいた記事が出たことがある。

シュローダー少尉

——(前略)私は仕事を通じて數人のP・Wに好感を持つに至つた。然し私の知り得た此等のP・Wの中には完全に信頼し得るものもあつたが、又私が信を置いた者にして、私の信頼を逆に利用した者もあつた。それは日本帝國が對米開戦前に行つた行爲を、そつくりそのまま行つたのである。即ち日本の和平特使が米大統領と會見するために、華府に滞在していたその時に眞珠灣が攻撃されたのであり、これは恰も片手で肩をたたきながら片手で背後から傷けるよう

なものであつた。今や日本人はアメリカから民主主義の本義をしつかりと身につけなければならぬ。思慮のある生活を確立するために、みんなが愛し合い且そのためには犠牲を惜まらず喜んで闘うような宗教と生活様式を學ばねばならない。そこにこそ新生日本の道があると思う。

タフト中尉

——私は數千人の人間が集つていながら、宗派の如何を問はず週例月例或いは定期的な禮拜が何も行われていないのに氣がついて驚いた。(中略)柵内對抗或いは收容所對抗の運動競技にはスポーツマン・シップが現われているが、最近行われた牧港と嘉手納の相撲試合の確執は私の全く豫期しなかつたところであり、寧ろ可笑しく思われた。アメリカの兵隊と同じように、P・W諸君は、同情し合つたり、一緒に寝て語り合つたり、或いは煙草を分け合つたりすることが好きだということも知つた。更に又P・W諸君がいりもしない品物を澤山ためこむことを好むということも——。

この二つは「米人から觀たP・W」のほんの斷片にしか過ぎない。私自身もかなり親しく數名の米人と知り合うことの出來たのを喜んでゐるが、我々の米人に對した態度を反省して見て、果

して「日本人」として悔いなき接觸をして来たであらうか。米人のP・W觀はそのまま米人の日本人觀であることに氣づいた時、私は何だか暗い氣分になつた。

「俺はP・Wだ。相手はアメリカじゃないか——」

と云つた考え方が、我々の行動の基礎になつていたことを、幾多の實例によつてはつきり認めざるを得ない。それはまさしくP・W根性である。しかもP・W根性の根ざすところは、深く偏狭な日本人根性に在ることを思うとき、我々は安閑として居れないのである。

米軍の官舎に作業に行つては、よく欲しい物を失敬して来たP・Wが居た。日の丸の國旗を急造して二三箱の煙草と交換したものを見た。實に下劣な猥畫をものして、米兵の歡心を買つたものもあつた。そしてタフト中尉がもらしているように、實によく「いりもしない品物」を澤山たぬめこんだのである。戦災の郷里に歸つたら着るべき被服のないことを心配しては、洗濯して乾してある米軍の被服をこつそり持つて来る。日本の軍隊では「昌數をつける」と稱して兵隊の個人所有物品が紛失すると、他人の所有に屬する物を、無斷で失敬して来ることを奨勵したようだった。この惡習は兵隊の魂にしつかりしみこんでいて、どうやら習性となり、環境が日本軍隊

からP・W生活に變つてもなか／＼とりのぞかれなかつたのである。他人の物を無斷で頂戴して來ることを兵隊たちは「がめる」と云つた。物をがめて來ることは兵隊の特權であるかのように誰もが誇りがましく、その日の收穫を語り合つてもいた。

埠頭に積まれたレーションを晝食のためにがめることなどは、最も普通のことだつたし、このがめる心理は次第に昂じて、時には寫眞機や時計まで持ち歸つて喜ぶものさえ現れた。

こうしたP・W根性は仕事の上にも歴然と表現された。のらりくらりとさつぱり仕事をしないのである。G・L (Gear Locker) と呼ばれる作業場で、板を組み合わせて貨物運搬用の臺を造る作業があつたが、一日に二人組んで十臺も作り上げさせるためには、米軍の將校がやつきになつて「ハーバー・ハーバー」と追いまくらねばならなかつた。どうした機会かに、この作業方式が變えられて、二人で十五臺を終ればそれで一日の作業を完了と見なし、殘餘の時間は自由に休息を許すということになつた。すると驚くべき結果を拜見したのである。僅か三時間位で十五臺を完了して悠々と晝食を愉しむものが續出した。あまりに容易に十五臺の組み立てが出来るのに米軍將校はむしろめんくらつて、後には一日の作業量を二十五臺までに引き上げたが、それでも

P・Wたちは午前中には定量を終つて悠然と遊んでいた。

私は米兵たちが、上官が見て居ようと居まいと平氣で、あたかも仕事をたのしむかのように、定まつた時間中は眞面目に仕事をやつてのけるのと見較べて、日本人の性格やその受けて來た教育について考えざるを得なかつた。

小野山の鐵柵内に在る我々の幕舎は、初めはカンバスのフントを支柱と綱とで支えただけのお粗末なものだつた。地面に毛布を敷いて寝るいやな日が續いたのだが、やつと許可が出て、適當な材料の持ち込みと幕舎の改築が出来るようになった時のことである。

各人の作業場で、不用の木材などをもらつて來て建築するのだから、千五百名のために九十餘りの幕舎が完成するには相當の時日がかかるものと豫想された。

實際は、一二の例外をのぞいて一夜のうちに小野山の柵内が生れかわつたのには、誰もが驚いた。特にM・Pたちは、一晚のうちに丁度湘南の海邊に見るバンガローの様に、綺麗なペンキの香を朝風にただよわしている風景を見て感歎の叫びを擧げた。これは決して悪いことではない。

我々はこの改築以來、すつかり爽快な生活を持つことが出來たのであるから――。

然し、米軍の作業場で、こうした暮舎を一軒完成するには、十人のP・Wが少なくとも一週間
はかからねばならなかつたのである。自分のことになれば本気でやる、個人の利益と結びつか
なければ、出来るだけ怠ける——。

これでいいであらうか。

確かに我々日本人は、否P・Wたちは、みんな我利々々の島國根性を露骨にむき出しにしたよ
うである。

そしてこの事は、米人に對して、日本人は仕事の出来る國民であることは知らしたようである
が、「心から信頼出来る國民である」とは印象づけなかつたであらう。P・W根性は、どうして
も祖國にまで持ちかえつてはならない。それは日本軍隊の形式主義と共に、南海の波底深く葬り
去らるべき、日本人の心のよごれであると云いきりたい。

「ハーバー」

恐らくP・Wたちが最初に覺えた英語？はこの言葉であろう。未だ使う方も使われる方も相手の氣心が全然分らなかつた初めの頃は、米兵は本氣で小銃や拳銃を身につけて心をひき緊めていた。そして作業の監視をしながら、一寸でも怠けたり氣に入らなかつたりすると「ハーバー」「ハーバー」を連發した。

引率されて一緒に作業の現場に行く時にも、向うの方から「おいでおいで」と手まねで呼ぶ時にも、トラックに乗る時にも、材木を肩で運ぶ時にも、P・Wたちは「ハーバー」「ハーバー」と云う聲を聞かされた。それは白人の場合でも黒人の場合でも同じだつた。そしていつの間にか、P・Wたちは「ハーバー」が「はやくやれ」だとか「しつかりやれ」という催促を意味するらしいことをさとつて、日本人同志の間でも使いはじめた。

私も二三度米兵に向つて「ハーバー」とはどんな意味なのかと質問してみたが、「Harry up」を意味してゐるのだと答へられて、それ以上の語源なんか知らないとなつてねられた。

或る日誰かが至極最もらしい調子でこんなことを教えてくれた。「ハーバー」というのは「パール・ハーバー」から來てゐるんだ。眞珠灣だな、日本から眞珠灣に奇襲をうけたことを、膽に銘じるために、太平洋戦争の合言葉として、「ハーバー」「ハーバー」と云う様になつたんだ。「パール、ハーバーへ」即ち「眞珠灣へ」「眞珠灣へ」と全米國民の心を戦力増強に集中して行くためのアメリカの合言葉だ、と云うのである。これは面白い、或いはそんなことも知れない、と云つてそれが本當だとすれば、我々日本人には誠に面白い言葉だなあ、と笑いながら、そのことを米兵にたしかめて見たが、

「そんなことはないだろう。ハーバーという言葉はもつと前からアメリカでは使つていた」と云う返事をもつたこともあつた。

ずつと後になつてからだつた。通稱「二八」と呼ばれてゐる海軍の建築部隊に行つたことがある。そこには海軍の軍屬技術者がいて、家族づれの中年者が多く、他の米兵ばかりの官舎と氣分

もちがつていた。丁度、二見がホールの壁にかける二百號大の油繪を依頼されて、二見自身軍隊生活以來始めて熱情を湧かして制作に従事していたので、それを見ながら、中年の米軍技術者と言葉を交すことが出来た。その時のことである、ふつと思ひ出して「ハーバー」の語源を質問すると彼は興味を持つて答えてくれた。

「ハーバー」を彼は、'Habbā' と綴つた。そして "Habbā" は勿論 "Harry up" を意味するが、それはアメリカの南の方に多いニグロのジャズ音楽に起因するスラングだと説明した。テムポの速い音楽で、ドラムなどをたたきながら「ハーバー」「ハーバー」と軽く調子をとるのだ。従つてこれは何も軍隊だけで用いるスラングではないことも明らかになつた。

黒人たちが明るい南の太陽を浴びながら、軽い原始音楽を奏でる。そのうかれた朗らかなリズムが「ハーバー」の發生地だと云うことは、私を極めて愉快にした。

みんな顔見知りになつて、本氣で「ハーバー」を繰り返されて作業に追いたてられることは、既になくなつていたが、私はその後「ハーバー」と云う言葉を聞いても、少しも嫌な気分を感じなかつた。

「ハーバー」の外にも、かなり多くのP・W語？が出来た。P・Wの側では、米兵のよく使う言葉を真似たし、その真似を又米兵たちが面白がつて真似たりして、英語でも日本語でもないP・W語が出来たのである。

然し、その多くは、日本語の「馬鹿野郎」や「助平」更にもつと低俗な露骨な内容のものでつた。それが人間の本性に觸れていて、理解が早いためではあるうが、朝の挨拶がわりに愚劣な會話？だけが交換される風景は、私には快くは感じられなかつた。

驚いた時などに米兵たちはよく「ガッテム」と強く叫んだ。これも「二八」の中年氏の説明によると「God-damn」で、神の喪失を意味するのだと云つた。いろんな時にこの言葉は使用された。なか／＼味のある言葉だが、P・Wの誰がいだしたのか、この言葉の譯語として直感的に「くさつたなあ」という日本語をあてはめて教えたらしく、米兵たちは「くさつたなあ」を連發した。朝トラックで作業場に着くと、待ちかまえていたように、米兵のサージャンなどが「くたつたなあ」とへんてこなアクセントで挨拶の言葉を投げかけるのには幾度も苦笑させられたものである。

知り合うこと

炎暑にぐつたりして、のらくらとP・W根性を出していると、こつびどくぶつつかつて来る米兵がいる。作業場でそんな嚴格さにぶつつかるとP・Wたちは、

「あいつは、横濱でP・Wになつていたんだ」とか、

「いやマニラで日本兵に虐待されたことがあるそうだ」などと、まことしやかに喧傳する。恐らく、そんなP・Wたちは、日本人の大好きな仇討ち心理を米人におきかえて、彼等が横濱やマニラでの復讐を、沖繩の我々の上につつけるんだと考えたいらしいし、その考え方を同僚におしひろめることによつて安心するらしいのである。

反対の場合もある、米兵たちの明朗な日常を見、そのスマートな容姿に接すると、一も二もなく心酔してしまう者である。相手の人格や教養に就いては少しも考えようもしないで、色の白

い背の高い外貌が、そのままその人の内容の具象でもあるかのような錯覺に陥るのである。

私は思うのである——我々の米人觀はそのまま我々の日本人觀に置き換うべきであると。私はこうしたものゝ觀方をする事と自體を、深く内省しない。

幸いに私は、P・Wとしての立場からではあつたが、多くの米兵と知り合う機會を得た。そして國民性の相違と云うか、何か米人特有のおおらかさを、彼等の共有物としてうらやましく受けとつたことは事實であるが、個々の交際では、彼等に對して何等無條件に心酔もしなければ、無茶に毛嫌いしたくも感じなかつた。

明るいものの中には、暗い性格の持主がいた。眞面目なものとふざけた男とがベッドをならべていた。きまえのいいのがあるかと思つと、けちな男もいた。それは私が、日夕起居を共にする日本のP・Wたちと同じように、單に雑多な個人の集積であつた。唯我々は、戦いの最中にあつては、一つの目的のために、米人を普通の眼でまともに觀ることを拒まれて來た。概念的に「米人とは、個人本位で、物質萬能で、女尊男卑で、街上で接吻をする動物」だと考えることを強いられて來た。そしてその以外の觀方をする事を完全に封じられていることにさえ氣づかなかつ

た。すばらしい鎖國政策である。大きな鐵鎖で心をしばられていたのである。

「I・D」の官舎に作業に行つて知り合つたり、ジレー伍長は、私のP・W生活で忘れられない米兵の一人である。彼は八月になつかしの郷里テキサスに歸國してしまつたが、恐らく今頃は私との約束を守つて私宛の書簡が東京の兄の家に届いてゐるであらうと思う。リ伍長と親しんだ動機はこうである。私はふりあてられたその日の仕事として、彼の幕舎の掃除をしてゐた。彼の寢臺の周圍を掃く時に軽く「パードン・ミイ」と挨拶すると彼は人なつっこい表情で「君は英語を話せますね」と話しかけて來た。「いくらか——」と應えると、彼は煙草をすすめながら、私に坐れと云う。暫くの猶豫を願つてその幕舎の掃除をすましてから、私は彼と向ひ合つた。彼はテキサスの大學に通つてゐる彼の婚約者に贈るのだ、と云つて綺麗なアルバムを示した。アルバムには彼と彼女の寫眞を第一頁に並べて貼つてあつたが、そのあとには、彼の軍隊生活を物語る様々な寫眞や、沖繩の風物、更に日本軍の襟章、日本紙幣、沖繩でばらまかれた米軍のビラ、新聞のスクラップなどが實に丁寧な心づくしを示してゐた。

私は、大切な婚約者への贈物として高價なコテイの香水と口紅の代りに一冊の内容豊富なアルバムを用意したり伍長に、強い好感を覺えた。その好意を示すために「このアルバムに、沖繩の

P・Wが記念の言葉を書き入れたのですが」と申し出ると、彼は非常に喜んだ。

恩讐を越えて風風ぐ南海の

島に語りき異國の友と

一枚の紙にそう書いて、もう一枚の紙に下手な英語で次のような意味のことを書いた。

——親愛なるリ伍長に贈る

數カ月以前まで、君と僕とは彈丸をうち合う敵だった。然し今は違ふ。僕は初めて逢つて君に好意を感じた。

南の小島の微風を受けながら僕は君と語ることが出来て心から楽しい。

以上が日本文字の内容である。日本文字は、日本の固有の詩の形態をとつて書かれてある。僕は詩人ではないが詩を愛するからだ。そして多くの日本人は、戦争よりはすつと深く詩を愛することを銘記されたい。あなたの愛する婚約者ミス・メアリーによろしく。

一九四六・六・一九

沖繩にて

日本のP・W

みやなが・つぎを

リ伍長は、充分満足の意を表して、二枚の紙を丁寧にアルバムに貼りつけた。その目私はリ伍長から上等のパイプとタバコをもちつた。しかも彼は、そのパイプを私が私たちの鐵柵の入口でM・Pに没收されることをおそれて、次の様な入念なタイプライターの證明書まで添えてくれた。

——検査をされるであろう方へ

このP・Wは私のところで、非常によく働いてくれた。私はこのP・Wに好意を持つ。私は彼と個人的な交友を續けたいと欲している。

今日パイプとタバコを彼に與えたが、それは是非没收することなく、私の誠意を彼がたのしめるように特別の配慮が願いたい。

リッジレー伍長

勿論、私はすと彼の誠意をたのしむことが出来た。非常にいい型のパイプで、横に寝ている福山をさかんに羨ましがらせた程である。

恐らく歸國後も、私はこれを愛用出来ることを信じて大切に喫つてゐる。

が、その後リ伍長とは、割合に會う機會が少なかつた。彼は三度程、彼の官舎に作業に行つてゐるP・Wを通じて、私に煙草を届けてくれた。いつも五つ箱ずつだつた。私は返禮の仕方を知

らずに困つた。それで同じ幕舎にいる副島に美人畫を描いてもらつたこともあつた。副島は他のP・Wたちがグロテスクな猥畫などを描いては煙草と交換するのと違つて、伊東深水ばりのきれいな日本畫を描いたからである。

八月中頃、愈々彼が歸國する前に、彼はあちこちと探ね歩いて、私の作業場に来てくれた。そして私のために冷たいビールを三本ジープで取りに行つた。舌に觸れるビールの味をかみしめながら、私は「戦争に負けたら總ての日本人男子は去勢されるぞ」と宣傳した日本軍閥のことをふつと考へた。

私は忘れられないり伍長の想い出を書いたが、とにかく、こうしてP・Wたちはそれ／＼の立場で、アメリカの兵隊と友達になつたのである。人間と人間だ。言葉が通じるとか通じないとかは末節である。必ず分るのだ。分れば良さも悪さも感じるであらう。たとえ萬一、悪さだけを擱んだと假定しても、全然觸れることなく知らずに過すに優ること數倍だ。

私は、私の結婚記念に、老父の贈つてくれた掛軸の中の一句を思い出す。「一善以爲友、三人有我師」

親しく觸れて、いろ／＼の米人を知る！ それだけで今までは百倍も世界が明るくなるではないか。

文化的なもの

O・B・Cの集いがまとまつて一カ月も経つていただろうか。例によつて夕食後のひと時を、電柱の下に集つて、とりとめのない雑談にふけつてゐる時、誰かが「ぼつ／＼俺たちのグループも何かやつてはどうだ。少なくとも夜毎のたびに一つ中心話題を持とう」と提案した。

丁度福山が、興味を持つて原子爆弾の資料を蒐めていた。作業場で米兵たちの讀物の中からかき集めた資料で、科學雜誌や新聞などの集積だつたが、既に相當の量をなして居り、福山は彼の日常の無精な行動にも似ず、科學者らしい克明さで一語もゆるがせにせず翻譯していた。「あいつを話せよ」と彼が槍玉にあがつた。初めは唯O・B・Cの連中だけで彼の原子爆弾解説を聞

く豫定にしていたが、愈々となると何だか惜しいような氣がして、柵内のスピーカーで「本日O
 B・Cの集いで福山君の原子爆彈に關する話があります。御希望の方はどうぞ」と呼びかけた。
 結果は豫想外に多くの聴衆を獲得した。二百名近くの眼と眼が、眞剣な態度で福山の顔を凝視め
 ると、一寸はにかみながらそれでも彼は眞面目に「原子力の偉大さ」について解説を始めた。だ
 が“Uranium-235”だの“Plutonium”、“Neptium”など、（註）しぬ言葉から、“ $200+2=$
 99.7 ”とか“ $1 \times 100 = 98.9$ ”と云つた數式が飛んで来ると、科學常識にとぼしいその夜
 の聴衆の大部分は、自らの理解力の貧困さに悲觀した。然しながら、ウィタミン錠大のウラニウ
 ムで、我家の一カ年分の燐房が可能であり、石炭やガソリン・電氣の力では到底成り立たぬ月世
 界へのロケット旅行が可能になり、小さな自家用飛行機で簡単に大西洋横斷が出来るると云う話に
 は興味を持たざるを得なかつた。土曜日の天候をコントロールして、折角の楽しい早慶戦を雨の
 ためにかこつ心配もなくなるだろうと云われると、いやでも小さい原子崩壞の巨大なエネルギー
 に驚かされた。私は石油のために戦争することなくなる世（註）になつた。
 とまれ、福山の原子爆彈の話は、O・B・Cの最初の公（註）演の形をなとして、我々は氣をよく
 した。そして早速全柵内に向つて「常識講座」の企畫を發表した。はじめ、室々と「文化講座」

日本の美術の秋を鋭く批判してあつたのが動機で、いろ／＼二見から美術の話聞いた夜に、この企畫は成つた。

千數百名の中には、いろ／＼な人がいて、様々な美術や工藝に屬するものを制作していた。

最初はみんな煙草が欲しくて、繪を描き指輪をつくつたのであるが、P・Wたちの精巧な作品を見ると、米兵たちは勝手な注文を出し、そしてそれが聞き馴れず出來榮えによつて煙草の數を増した。一時に多量な煙草を確保するたゞび出した。我々は益々腕のさえを見せた。指輪もなかなか凝つた彫刻をほどこされたし、それは腕輪から金屬製の時計バンド、お土産用の極彩色の下駄、五月人形用の大刀、さては實用をねらつて煙草用ライターと進んで行つた。ダシヒルの上等のライターにも劣らぬ作品をほとんどやすり一本で仕上げる腕は、正に驚異だつた。

美術展には、二見自身のスケッチを中心に、五十號位の繪もかざられたし、沖繩神社の模型や飛行機のついた灰皿などに、後にO・B・Cのグループに加つた若林が彼の本格的な腕を示した「書」も加えられて、なかなか多彩だつた。

そしてその出品物は、M・Pたちの垂涎の種となつて開講者人への土産に譲つてくれと懇望されたのもあつた。

美術展の會場にあてられた那覇劇場のステージに立つて、私は二見と述懐した。

——これが俘虜の生活だろうか。我々はいつの間にか、アメリカカビいきになつたようだな、と。
日本の軍隊のどこに文化の片鱗があつたか。歩兵操典に類するものだけが軍隊に許された公的な讀物で、特に隊長の許可を得て通俗低級な雜誌類がころがつていただけではなかつたか。米軍の官舎などで見る米軍の教養並びに娯樂の書は、まさしく驚くべきもので、福山は彼の専門の立場から實に面白いという地質の本をさがしていたし、二見は原色版の世界美術大觀式のものを入手して喜んでいた。私も、H・G・ウエルズの世界史や、ウアーズ・ウアースの詩集、更に多くの世界的名小説をかなりもらつて歸つた。それ等が何れも岩波文庫風な兵隊向のもので無料で豊富に刊行されていた。

日本の武士道にもこうした「文」を愛好する精神が多分に藏されていた筈であるのに——。

性

慾

——筑紫の友へ——

相野——

もう寶滿山の一帯も紅く色づいたであろう。松茸の香をただよわした故里の山は、戦いに疲れ
た僕には、少年の日の甘い戀の如くに淡い感傷の囚である。

戦い終つて既に一年有二カ月を経過した。君はどんな暮し方を、どんな心でやつて來たであ
るか。

宮古島で過した一年半の兵隊生活に續いて、沖繩のP・W生活は、既に僕の人生の三十七年目
を大半終らせようとしている。

そして復員！ それだけが今の僕の心を占領している。苦しんだあとの人間はこんなにも甘く
なるものか、と我ながらおかしい位だ。理論的に考えると、復員した祖國は、僕には決して愉

しいものではない。僕の男の力と熱情の總てをうちこんだ滿洲は、既にゼロであるし、僕の應召後旅順に移つたことを豫想出来る新京の女房や子供は、内地に歸つて居そうにはない。旅順には女房の母親がいる。ソ連の勢力圏内に入つた旅順・大連の在留邦人は未だ全然復員してないと云う淋しい確報を、僕は先日この鐵柵の中で聞かされたのだ。そうして見ると、僕を待つていてくれるものは、失業難と食糧難の祖國の混亂以外に何があるだろう。

相野——

僕の今の生活は、俘虜と云うにはあまりにのんきではある。バラ線のかこいの中ではあるが、一應自分の意志で勝手に遊んで居れる。P・Wたちの愉しい演劇に關係したり、文藝運動の世話役みたいなことが僕の仕事で、食糧は總てトルーマン給與である。煙草は米軍の官舎に作業に通う同僚が持つて來てくれて不自由を感じない。まあ贅澤を云えば酒と女のないことだけが僕にP・Wの悲哀を自覺させる。

これは日本の軍隊生活とはおよそ距離のある生活である。日本軍隊では、僕は精神的に完全に奴隷だつた。

日本軍隊が「鐵柵のない牢獄」だつたら、ここは「自由の獄舎」である。

相野——

僕はこの頃三年振りの性慾を覚える。宮古島の生活では、僕は「女」を想つたことは夢にもなかつた。性慾は斷じて食慾以前のものでないことを、僕は宮古島の生活で體驗した。たまたま若い娘の居る家に行つても、僕はその娘から如何にして「芋」を獲得するかに着いてだけ腐心した。そんな僕の兵隊姿を、娘は侮蔑の眼で見据えながら、なかなか快くは「芋」をわけてはくれなかつた。

沖繩に来て、とある兵隊から、あの激しい戦いの最中に暗い洞窟の中で、島の娘と一緒になつた體驗を聞かされた時、僕は驚いた。然し、案外人間は苦惱のどん底に陥つて、食うべき何ものもなく、砲弾と死骸と絶望との中に自分を見出した時、熾烈な性の慾求を覚えるのかも知れないと思つた。

相野——

今の僕はそれとは違ふ。日本の兵隊生活で消耗し盡くした體力も、喪失していた自らの精神もすつかりとりもどしている。だから永いこと壓えていたものが、もりもりと湧き上つて來たのである。滿洲に残して來た女房の夢を見ても、それは「女」としてだけの女房であることを、

夢醒めた僕は笑うのである。

相野——

この鐵柵のP・Wたちは時々逃亡を企てる。その目的が面白いのだ。食いものは、地方人の部落よりは、この方がずつと恵まれている。だから決して食うためには逃げない。「女」だ。作業場で知り合つた島の娘のところに命がけで逃げて行くのだ。脱柵の現場でも露見すれば、望樓の機關銃や作業監視の米兵の小銃にねらわれることは必定だ。にも拘わらず逃げて行く。そして三日も経つと安心して、捕つて歸つて来る。營倉に入れられて重労働を一週間も課せられると逃亡の罪は解消する。

この前も、あるP・Wは逃亡の前夜遅くまでかかつてP・Wの書いた小説を寫したという話を聞いた。部落に行つて娘に讀んでやる爲だつた。

宮古島で、中隊を離れて逃亡した兵隊は、みんな作業のはげしさと、上官の暴行と、空腹とに堪え兼ねてであつたのに思い較べて僕は笑うのである。

相野——

もう一つ面白いP・W生活の断面を報告しよう。

それは、部落に住む地方人と鐵柵の中に住むP・Wとが交代することが流行したからだ。地方人は、一般に食糧不足らしい。だから作業場で親しくなつたP・Wと話し合つて、作業終了後の歸りのトラックを故意に間違えるのだ。地方人がP・Wのキャンプに歸つて、P・Wが娘のいる部落に歸るのである。一日だけ交代の約束が、翌日も亦「もう一日」と圓満に話がついて、一週間もそれを續けた勇士がいる。地方人はM・Pの點呼をうける柵内生活の食糧に満足して喜んでゐる。部落になじんだP・Wは、男の少ない島の娘の眞心に満足してゐるのは勿論である。

「僕も一度行つて見たいなあ」と大きい聲でどなつて、同僚から笑われたが、本當にこの頃は男だけの生活が鼻につき過ぎて來た。だから若い連中が、柵内でやる芝居の女形に熱をあげたりするのを見ても、今の僕にはよくその氣持が分る。

相野――

僕は復員したら、何もかも出直しだし、この機會に年齢も十だけひき下げようと思つてゐる。僕の戸籍は焼けていないだろうと思ふが、日本中にはきつと戸籍の原簿を失つた日本人がうよ

うよしているのではなからうか。

兵隊生活でマイナスになつた僕自身を挽回するためにも、新しい仕事を始めるためにも、十年若返る必要があると思う。そしてこの考え方は今の僕の性への慾求の發露でもあるようだ。

相野——

こう云いながら、僕は今この三年ぶりの童貞を捧げる相手のことを考えている。そしてその結論を感心にも、復員してもすぐ會えそろにない女房にしている。この純情は、兵隊の生活で僕が少年にかえつたことを意味するようでもある。

復員のうわさが盛んに飛んでいる。もうきつと間近ではないかと云う豫感もする。

相野——

君に逢える日の夢は少年の日のその如くに甘い。

南海の鐵柵の夜空に、秋の星が無數に輝いている。

十月二十日

孤 兒

私のよく通つた「一三六」と云う作業場は、昔の那覇市の辻遊廓の跡だつた。波上宮という神社の跡が直ぐ近くにあつて、そこは島田を結つたきれいな人々が、切ない胸のうちを神かけて祈願するにふさわしい波うち際の絶景だつた。これも小野山の護國神社と同じように、鳥居だけが完全な姿でつつ立つていて、社殿や社務所らしい建物は無慘にうち壊されていた。その波上宮につづいて沖繩獨特の墓所が、戦争中兵隊たちの待避壕や陣地の代用に使われたことを歴然と物語つて、哀れな荒廢ぶりをむき出しにしていた。「辻遊廓開祖の墓―貸座敷組合建之」と刻まれた石碑が誰からも省りみられることなくころがつてゐるのを見出したこともあつた。そんな所に海軍部隊の宿舎「一三六」があつた。

その私の作業場の一劃に、小さいテントを張つて五六名の島の子供が寝起きしたことがある。

十歳位から十五、六歳位までの少年ばかりで、時々私たちの作業場の炊事場に來ては残飯を集めて行つた。

彼等に物を恵むことは禁止されていたが、私たちは米兵の眼をかくれて、罐詰や古い被服を投げた。一週間ばかりで、M・Pの子供狩り？に會つてトラックで何處かにつれて行かれたが、激しい戦いの最中に、親とも兄弟ともはぐれてしまつた孤兒であることを思うと、私はさつぱり情報明瞭でない満洲の子供のことに想いを馳せた。

山と山との間——大きな谷が塵捨場になつていて、毎日沖繩中の塵がトラックでそこに運ばれる。P・Wたちが「バタヤ」と稱する作業は、この塵捨作業のことで、多くのP・Wたちは「バタヤ」になることを喜んだ。

ドラム罐に一ぱいになつた塵芥をトラックに積み、炊事の残飯などをいじるこの作業は、決して綺麗な仕事ではないのに、P・Wたちが好んでこの作業をやりたがる理由はこうだつた。

米軍の炊事場から出る塵芥の中には、相當に豊富に恵みの材料が混つていたし、谷間の塵捨場には、島の人々がたかつてそれを待つていたからである。

島民の中には「資材回収係」と書いた胸章をつけた大人がいて、部落の生活に利用出来そうな木材や布團・被服などを（そんなものをどしどし）トラックで棄てる米軍だつた。大々的に回収していたが、P・Wたちの關心は塵捨場にたかる女と子供だつた。彼等の欲するものは全部食糧だつた。米軍の炊事の残滓の中からちやんと選んでおいた果物や罐詰を（そんなものも、何も食ひ残りでなく、餘ると箱のまま棄てる米軍だつた）投げ與える特權が「バタヤ」には附與されている。

最初この「バタヤ」をやらされた時、私は特權を感じるどころか、戦いに敗れた同胞の現實をまざまざと見せつけられて、胸をつまらせた。

日華事變の頃、ニュース映畫で見た中國の大衆の姿を、眼のあたりに見出した時、私は改めて戦争をのろつた。そして私自身の感情では、幾度「バタヤ」の特權を與えられても、この淋しいおもいを拂い去ることは出来なかつたが、塵捨場で私たちのトラックに歡聲を上げて集る子供たちを見ると、私は私の子供の年齢を思い出しては恵むべき相手を物色した。九つになつた軌雄と四つになつた宣子が、滿洲の何處かで寒さにふるえているのではないかと、心冷たいものがこみあげて來るのを意識しながら――

ぼつぼつ我々の復員が具體化しようとする十月中頃だつた。ひよつこり我々の柵内に子供の姿を見た。誰かが、壊れた日本船の中で自活していた子供をつれて來たのだと云う。その夜、私はその子と夕めしを一緒に食つた。割合に元氣で明るい子供だつた。

「名前は何と云うの？」

「與那覇 弘」

「いくつ？」

「九つ」

「うちのひとは誰もいないの？」

「うん」

「學校は？」

「二年生」

「今は行かないの」

「うん」

「どうして？」

「——」

「今まで何處にいたの？」

「船の中」

「食べものは？」

「アメリカの船員さんがくれたの」

「その船員さんはどうしたの？」

「アメリカに歸つちやつた」

少年の顔を一寸暗いものがはしつた。

「ここどう？ 好きかい？」

「うん」

「ずつとここに居るかい？」

「うん、兵隊さんが歸るまで——」

「兵隊さんと内地に行きたくないの？」

「行きたいさ——」

こんな會話を交しながら、私はすなおなこの少年の顔を凝視して居れなくなつた。「内地に連れて行つてやろう」そんな僞も云えずに「兵隊さんにも坊やがいるんだ。丁度弘君とおんなじ歳、やつぱり九つだよ」と云うと、少年は私の顔を見上げてうなずいた。

それから、その少年はよく私の所に遊びに來た。寝とまりは、この少年をつれて來た私の知らない人のところでやつているようだった。

ところが、この少年の柵内つれ込みが端緒となつて、その後十名近くの子供たちが柵内で元氣よくキャッチボールなどを始めた。はじめはだまつて見のがしていた我々のM・Pも、こんなに子供の人數が増えると監督上困ると見えて「柵内の子供たちを全部出すように」と云う命令が出た。スピーカーで「柵内に子供をつれて來て居られる方は本部に御集合願います」と呼び出されて、子供好きなP・Wが何人か本部に集つた。本部の委員から「實はM・Pの命令で——」と言されると、誰も豫期したことはあつたが、既に子供を手離すには愛情が湧き過ぎていたのである。何とかして、M・Pたちの眼にとまらぬ様に努力するからと眞剣に申し出るのである。

どうせ、歸國の時には別れなければならぬことを理窟では諒解していながら「どうしても内

地に連れて行きたい」と熱情を示すものもあつた。が、公式には一應全部の子供を柵外に出すことにせざるを得ない。

その夜、私は二組の別離風景を見た。三十近くのP・Wと十二、三の孤兒とが、鐵柵のそばの電柱の下に坐つていた。

直接その會話を聞きとることは出来なかつたが、恐らくは「兵隊さんは、いつまでも坊やと一緒に暮したいんだ。然し兵隊さんは、今どうにも自由のきかぬ俘虜だからね。坊やも分るだろう？」と、感傷をおさえて、理窟だけを自分自身に云いきかせていたに違いない。

鐵の柵に圍まれたP・Wと、それをしたう敗戦の孤兒の姿は、秋深い南海の夜風にいつまでも吹かれていた。

歸心

十月末の文藝募集の短歌に、私はふつと思いついて「歸心」と云う題を出した。その時の應募作品の中から拾い上げて見る。

麥蒔かんなど念いしが我未だ
かえらず島に秋は闌けたり

野田良夫

「背戸」の杜おおかた散りて木枯らしの
吹き來る頃かみちのくの里に

菊田草太郎

南海に命生きたり故里の茸の山よ

夢に煙あぐ

三浦 正

故里のいで湯は愉し山峽の宿の乙女も

色蘭けし頃

田口 靜生

青波のつらなる遠き故里よ

白き煙草をふかぶかと吸う

越野 仙太郎

今まで、かなり鋭い感覚で歌を詠んだ越野や菊田のような滿洲の義勇隊開拓團出身の青年たちまでが、故郷のことになると、こんな甘い歌を投稿した。然しこれは決して小さい感傷だけではなかつた。

憶えば永い歸心である。宮古島で丁度一年前「もう歸れる」十月末には船が来る」と本氣で語り出してから「正月には！」「櫻には間に合う」と延びくじらされて來た。そして六月頃の

沖繩新聞には「初盆に間にあうかしら生佛」と云う川柳が漫畫入りで掲載されたが、それは全部のP・Wたちの笑えない心境だつた。

病院船が入港して、少數の病友や機能障りになつた戦友が歸國すると、夜毎故里の夢を見た。作業場でやさしい米軍の將校に會うと、

「我々はいつ歸國出来るでしょうか」と切實な質問をなげかけて相手を困らせた。時々入手する内地新聞の復員だよりの中から、何か一行でも沖繩のP・Wに關連を見出すと、それを百倍にもひき伸ばして慰め合つた。

だからこそ——「十二月末日までに、全沖繩のP・Wを歸國せしむべき命令を受領した」という米軍當局の公式發表を報らされた時、鐵柵内は歡喜のどよめきにふるえたのである。

それがはつきりすると、妙にP・Wたちは心の均衡を失つた。或るものは食糧難や失業難の祖国を自分のこととして考え出した。鐵道従業員や、船舶組合のゼネストをひとごととして傍觀出來なくなつたことに、氣づかざるを得なかつた。そして或るものは、歸還準備のために着々とボストン・バッグやリュックサックの手製に着手した。

私をとりまく連中は、主として滿洲に残して來た妻子について本氣で心配をはじめた。

——新京の在留邦人は、終戦直前に北支に避難して既に内地に復員した

という話を聞いて安心した翌日には、新京は國共軍の戦災を受けて、女と云う女はほとんど凌辱されたと聞いて、みんなだまつてしまった。

演藝部では、部員解散の前に大公演を三日間も続けてはりきつた最後を見せた。各劇團からピツク・アップされた一流の名優？ だけで合同劇とも云うべきお名残狂言が登場して、復員後の祖國を主材にした「東京エピソード」や、お喜代樂團の最後を飾る音楽と舞踊のヴァラエティーなどが、心の軽くなつたP・Wたちから萬雷の拍手を浴びたことは勿論である。

そして兵隊生活からP・W生活に結び合つた友情を永遠に記念するために「寄せ書き帖」を作る事が流行した。私も二十枚餘りの紙をとじてそれになつた。私の親しい人々によつて書かれた私の「寄せ書き帖」の中から抜き書きすることを許していただく。

福山の頁

——お前さんと別れるのはいやだ、歸つたら隣り合せて住もう。そして貴公の戀女房のおしや

くで毎晩飲もう。

福島の頁

——戦争中にはあまり用のないタイプ、これが貴男の肉體から發散する動作のすみずみにまでしみ渡つてゐる。戦争が敗けてから戦争がきらいになつた人が多い中で、たとえ捷つても戦争を好きになれなかつただろうと想われる人、それが貴男だ。

突然全く突然そんな感じの中に、在りし日の戀物語をのろける。女學生にせがまれて、とまどいする中年の先生が、その家庭生活の一部をチラリとデッサンして見せる、そんな程度に……
伊良原の頁

——俺とお前さんとは、P・W生活と云う稀有な生活がなかつたら、永久にこんな仲良しにはならなかつたかも知れないね。俺は宮古で古年兵面をしたと云うので、随分お前さんに、にくまれていたんだね。俺もお前さんをどうしようもない兵隊だと思つていた。からだは瘦せひぼけて働きの出来ないこと、俺の小隊では有數だつた。

そのお前さんと、今別れようとして、俺は胸のつまる思いがする。

黒山の頁

——過去十七年間、作物と家畜と生を共にし、精魂を傾け盡して來ましたが、何か物足らぬものを感じて參りました。復員歸農の後、貴方に手解きを受けた歌作の心によつて満たされることを信じ、新しい生活記録の生れることを欣びといたします。東京を離れること西に十五里、奥多摩の清流を眼下に見て懷舊談に花の咲くのも遠くはないと思ひます。

再會の日を待望しつゝ——

前原の頁

——常夏の島、沖繩での生活、それは日數にしては短いものでした。然し私には、吾が前半生を盡くした實に永いものでした。心身共に、全力をあげての世紀の戦い、そして敗戦、總てを失つて呆然自失のP・W生活。私のP・W生活の前半は唯食べて生きて行く生ける屍にしか過ぎなかつたのです。牧港から小野山に轉屬になり、そして漸く馴れた頃、「歌の會」が出来ました。やつぱり生への執着か、私は同志を求め氣持で、おそろしく作つてみました。そこで雅兄を識つたのです。

漸くに「我」をとりもどして來た頃の歡喜、それは何とも表現しかねるものでした……

武田の頁

——あなたは貴族的だ、文化貴族だ。

あなたの字、歌、話、親類、眠り等々總てアリストラティックだ。

あなたは人につくらせて喰う。決して自分ではつくらない。あなたは傳統の保持者たり得る。だが決して傳統を創造することは欲しないだろう。

あなたは私にとつては、淋しい友である。

松本の頁

——東京に先に歸つたら、私の戀人（註——本當はノー・タツチの新妻）の行方をさがしておいて下さい。親父の名は君の知る光井與四郎（註——私は滿鐵の先輩としてこの人を知っている）若し光井の引揚地が分つたら、私のことを連絡しておいて下さい。

二見の頁には、彼が宮古島でスケッチした葉書の繪が貼られてある。

私は、この寄せ書き帖をすっかり好きになつた。それで好意を感じ合つた人々に出来るだけ多くサインしてもらうために、二回も新しい紙を追加した。

ラ イ カ ム

二隻のL・S・Tによつて一回に千八百名宛の復員は始まつた。米軍によつてつきつきに復員者が指名された。

四回目の發表の時に、私は幸いに私の親しんだ友人たちの過半数と共に、私の名前を見出した。

O・B・Cのメンバーの丁度半分がこの時一緒だつた。

一夜、幕舎の横に毛布を敷いて、ささやかな送別會が開かれた。

席上で、お別れの歌をつくれと云われて、「明日はお立ちか」という誰でも知つてる流行歌の曲にあわせて、即興の歌みtainものを書いてみんなであうたつた。

1

友よ歸るか 心がいたむ

君と語つた 棘の舎に
秋も深いぞ 南の海の
風が冷たい ほろにがい

2

友よお先きに 心が残る
君と盟つた 交わりを
くにで偲んで 夜空の空を
數えて待つぞ 會える日を

3

今度逢う時や 日本の酒だ
ゆれる灯かげに 肩寄せて
どてら姿だ 疊の上だ
大きな聲で 唄おうぜ

そうだ、この送別會には酒があつた。それはM・Pたちには祕密だが、配給になるジャムに醗

醇劑のイースト菌を入れて二晝夜がかりで醸造したものである。甘ずっぱいアルコール量の低いものだったが、これで充分気分が出た。

復員の船が入港するまで、いろいろの手續きを完了するために、空沖繩の各收容所の歸國者はライカム收容所に集められる。私たち四次の歸國者は十一月十日に、小野山の收容所にお別れをした。丁度雨の日だった。鐵柵の外のトラックの上の私たちを、柵につかまつていつまでも手を振ってくれた顔々々。松本、伊良原、黒山、福島、前原等々々が淋しく微笑んでいた。

ライカム收容所は、云わば待合室の感じである。

ここでは、米軍側からP・Wとして働いた賃銀の支拂いを受け、身體検査と豫防注射をされ、日本側からは復員事務の書類を作ることだけが仕事だった。

だが、日本側の調整すべき書類を示された時には一寸驚いた。

「名古屋援護局沖繩出張所」と看板をあげた係員から示された「復員書類作成要領」によつて列べるとざつとこんな調子である。

六、各自に於て作成するもの（各一部）

- 1 復員者調査表
 - 2 身上申告書
 - 3 給與通報
 - 4 生死不明者連名簿
 - 5 死亡者生死不明者殘留品覺書
- 二、各中隊にて作成するもの

- 1 乗船名簿（四部）
- 2 除隊召集解除者名簿（四部）
- 3 部隊別乗船人員一覽表（一部）
- 4 乗船連絡調査表（一部）
- 5 受領金委任狀（一部）
- 6 被服裝具受領證（一部）
- 7 持歸金所有狀況調査表（一部）
- 8 遺骨遺品名簿（一部）

三、輸送指揮官にて作成するもの

- 1 部隊別乗船一覽表（一部）
- 2 乗船連絡調査表（三部）

以上が陸軍關係者に必要なものだった。中隊の書記を仰せつかつた木須と松浦が悲鳴をあげる

のを見て、みんな同情した。勿論一年がかりで待ちに待った歸國が、今度こそ間違いなく實現するのだから、その位の煩雜さには、笑つて堪えたようであるが、敗戦後の今日でもやつぱり日本のお役所の形式主義は少しも改められていないことを嘆息したのである。

ここでもらつた米軍からの賃銀支拂いの場合と思ひ較べたから、特にその嘆息は永かつた。一人の米軍將校が來て、千八百名のP・Wに一分間二十名位のスピードで小切手を渡してくれたが私の小切手にはあたりまえではあるが、ちゃんと私の名前と私の捕虜番號がタイプされ十カ月分の賃銀が十五ドル十八セントと書かれてあつた。福山が十四ドル九十三セント、二見が技術者扱いで二十四ドル三十セントと云う具合だつたが、その計算は病氣で作業を休んだのを正確に差引いて算出されていた。尙私たちが自分の捕虜番號と名前とを並べた書類は、この島の最初に石川收容所で捕虜番號を頂戴した時のカード以外にはないはずだつた。

能率と人間に思ひを致すのは當然であろう。

ライカム收容所に勤務して歸國者の世話をしてくれるP・Wたちは、なかなか親切だつた。船の來るまで一日おきに映畫を見せてくれたし、「ライカム銀座」と銘打つ通りには散髪屋や飲食

店みたいなのをさえ開いていてくれた。

キャバレー「蘭鳥」としやれた幕舎があつて、赤い電燈をつけたりしていたが、なかなか気分を出してP・Wたちの歸心をかり立てていた。いろんな飲食物を出してくれたが、代金は總て煙草だつた。キャバレー「蘭鳥」のメニューを紹介するとざつと次の通りである。數字は代金を示す煙草の數である。

皆様へのお献立

ライカムランチ	(20)	酒	香	(20)
天 井	(12)	玉子井		(12)
ハムライス	(12)	チキンライス		(12)
ヤキメシ	(12)	天ぷらうどん		(12)
やきうどん	(12)	すうどん		(5)
天 ぷら	(7)	玉子やき		(7)
レモン水	(2)	コーヒー		(2)

幕舎の一隅には白布に「誓——友十萬民族の覺醒に尊き生命を捧げたり、吾等死を以て祖國を

棄てざりし眞男たらん！ 十一月三日」と書いてぶら下げてあつた。

ライカム收容所は、故郷に眞つ直ぐ道が通じていることを自覺していたので、誰も和やかな謔をしていた。

永かつた、本當に永かつた苦闘の幾年かを忘れたように、誰もがふんわりと微笑みをたたえていた。

南島の秋はこの人々にとつて快い小春日和である。

シラミの歌

しらみよ

お前と近づきになつた日の

最初の愕きを私は忘れない

小豆いろにまろまろと色づいて

襦袢の縫目にとりついたお前は

生きとし生けるものよろこびにみなざり

私の指さきはお前を摘みあげて

掌の上に移し

はじめて火を発見した原始人の

胸のおののきに似たものをおぼえたものだ

しらみよ

お前の知己は

古人のなかに親しく名を連ねている

良寛さまも

芭蕉さんも

お前とお前の親戚にあたる

ノミを詠みあげること

民衆詩人の名を高めている

シャリアピンは

ノミの歌で世界の好樂家連をうならせたものだ

萬葉の歌人も

「袴の縫目縫目に子をひりてしらみの神代

はじまりにけり」と

お前の遠い祖先に

思いを寄せている

しらみよ

宮古島の陣地作業に

われわれ兵隊が

汗と垢にまみれて

働いた日々を知っているのはお前だ

僅かな小休止の折にも

お前を見つげ出し

親指の爪と爪を血に染めて

押しつぶすのが

われわれの日課だった

眞に「しらみつぶし」という言葉を

私は味わつたものだ

しらみよ

終戦となつた日の歎きを

私はじつと涙をこらえて

お前の透明なタマゴに

眼を据えたことを銘記してやまぬ

しらみよ

お前は夜毎

膚を這いまわり

塗りかえた地圖のごとき爪あとをのこして

朝を迎えるのが私のならわしだつた

「これが本當の血兄弟さ」

戦友と私は笑いあつた

しらみよ

那覇へ渡つて

P・Wの作業服に着換えたわれわれの

どの衣類にも

最早お前を見かけることはできない

某日、配給された白い粉末の効果は

お前のミイラを發見し得たことで

お前とのいまわしい関係も終結を告げたのだ

お前と潔く袂別したわれわれには

新しいニツボン再建の

大仕事が待つている

黙つてきょうのことに精出して働こう

しらみよ

お前の活躍した舞臺は

既に幕が下りてしまつたのだ

無用の微生物たりし

お前よ

永久に消えて無くなつておくれ

作者の大輪とは、復員も間近くなつて知り合つた。

彼はすつと小祿收容所に居たからである。ライカムに来て船を待つ何日かの間、彼はよく私の幕舎に遊びに来た。おとなしく無口で、いつも顔に微笑をたたえていたが、小祿收容所での文化運動の中心になつていたらしい逞まじさが、奥の方に光つている男だつた。お互いに「鐵柵に圍まれたP・W生活」の感想を話し合つた。

一年に近いP・Wの生活、それは極めて特殊なものではあつたが、考え方によつては全く敗戦祖國の縮圖でもあつた。誰もが鐵柵のわくの中に居た、丁度今の日本のように。そして誰もが自由勝手にふるまつた、丁度今の日本人のように——。戦争中にがんじがらめに縛られていたものが、あつさりどりのぞかれて「自由」とやらを與えられたのである。だから良かれ悪しかれ誰もがその個性に立ちかへつた。

「若し宮古から眞直ぐ内地に歸されていたらどうだつたらう？」

と大輪と私は顔を見合した。恐らく自分では氣づくことのない日本軍隊の残滓——それは因循と姑息とを、私に教えこんでくれたが、そんなものをむき出しにして、食うために、生きるため

にあえいだのではなかつたらうかと思うとぞつとするのである。

謂わばP・Wの生活は、私の軍隊生活と將來とを繋ぐためのよき緩衝地帯であつてくれた。

私はここで、世界のレベルの一面に觸れた。島國を一步も出ない日本的な考え方の貧困さを體驗した。

そして今後我々に與えられるであろう「自由」の中で、日本人がどんな生き方をするかの模型を見ることも出來た。

恐らく、厳しい食うための生活が祖國には待つてゐるに違いないが、それに對處する心がまえらしいものを作り得た。

そんな意味で、私は私の一年近い俘虜生活に意義をさえ感じた。

「シラミの歌」——シラミを知り、シラミと苦しみ、シラミを放擲した私の生活は終つたのである。シラミよ！ 永久にさようなら。

明日は待望のL・S・Tが入港すると云う！

あ　と　が　き

鐵欄の中でものしたらく書が、活字になる。私は、この貧しい記録を、私の歸りを待ちながら淋しく眠つていつた亡父宮永不言の靈に捧げ得ることを喜ぶ。父は、終戦を聞いてぐつたり弱つたそうである。その氣持が私にはよくわかる。歸還後の私の最初のプランは、とにかく亡父の墓前に額づくことであつたが、過去の總てを喪つてまる裸になつた私は、いまだにそれを果してない。この書が貧しい私の手向草の役を果してくれるわけである。

活字になることになつたので、假名づかいを直したりするために、讀みなおしながら感じたことは、内容的に甘いということだつた。きびしい戦後の世相にもみくちやにされながら、私は私の捕虜生活をかえりみて「何とのんきな生活だつたことか」と慰められるものさえ覚える。従つ

て私の現在の考え方からすると、手を入れたい點や物足りないところが、いくらかもあるが、私は鐵柵の中での記録を尊重するために、そのままにした。その方が、P・W生活の雰圍氣を傳えるに役立つと思つたからである。

この書が世に出るに當つては、舊知の温かい友情が身にしみた。序文を下さつた寺崎浩氏と心から私の生還をよろこんで力づけてくれた相野茂樹氏には特に厚く謝したい。更に父亡きあと、親がわりとして、兄宮永健兒には肉身の甘え方ですつかり世話になつた。烈しい世の中に、私はいつまでも甘く生きる人間であるらしい。甘く生きられる幸福を私はじつとかみしめる。